

INTRODUCTION

アメリカ版への前書き
ヤニック・ブルイノフ

ウイスキーのボトル一本と、テープレコーダーを持って行ったほうがいい。この本を書こうとしたとき、そんなアドバイスを受けた。結果としては、ウイスキーは一本ではぜんぜん足りなかった。でもテープレコーダーを使う必要はなかった。

1953 年頃、ビックビルはブルースについての本を見て、自分自身も「ブルースの真実」と題して、本を書こうと思い立ち、一連のエピソードを書き始めた。それらはやがて、書き直されたり、手直しが入ったりして、「ビックビルブルース」という名のこの本を成すに至ったのだ。

ここに書かれている内容は、単にブルースの真実だけではない。一人の男が想いを込めて綴った彼自身の真実がそこにある。その男は、時代を代表するブルースミュージシャンであり、彼のその時代の真実が、彼の人生と、彼のブルースを作り上げたのだ。

彼が語った物語には、ブルースの世界と多くの共通した特徴がある。彼のようなシンガーは、生まれながらのストーリー・テラー、現代の寓話作家であって、事実に尾ひれを付けて、信じられないような話を興味深く、面白おかしく話す才能に長けている。そしてまた、当事者とは異なる人物を拉致し来たって話す才能も自然に持っている。第3の違う人物が歌ったらどうだろう？同じことがまた違う人の身の上に起こったら？と発展させるのだ。そういうわけで、ビックビルはおそらく、誰かの身の上話や、聞いただけの話を、生き生きとした想像力で脚色して、彼自身の話として語っていることもあるだろう。しかしながら、あの時代の南部のブルースシンガー達がみなそうだったように、彼が破天荒な人生を歩んできたことは間違いない。

また一方で、日付や生誕地についてのビックビルの記憶は、少なからず混乱している。こういった間違いは、彼が他の事実を克明に記憶していたことと奇妙な対比を成している。私はこれについては、次のように推測している。1958 年の 8 月 15 日にシカゴでビックビルが死亡した時、この件についての報告書が作成されることになった。それで彼の双子の姉のラニーは、1898 年 6 月 28 日に生まれていた事実を認めることになり、それで、ビックビルは実際には、彼の自称の年齢よりも 5 才若かった事が判った。こうした年齢の詐称は、彼の時代の南部のニグロには珍しくないことだ。普通は従軍や社会保障などの理由で詐称することが多く、ビックビルもおそらくこうした必要があったのだろう。それで、若いころの行いや、いくつかの出来事の詳しい様子について、曖昧で混乱した発言が出てきたのだろう。

INTRODUCTION

こうした内容については、この本の初版以来、でき得る限り、他のミュージシャンへの質問などを元に、訂正するようにしてきた。脚注にはこうした訂正や、ビックビルの主張に対する反駁を載せている。ただし、こうしておく必要がある。ビックビルはブルースに対しての思い出や大きな愛情から、すべてを語っているのだ。

レコーディングの日時やタイトルについては、ほとんど訂正の必要が無かった。巻末のディスコグラフィーについては、できる限りの確認を行った。ビックビルが語ったタイトルがレコード会社で変更されている場合や、リリースされなかった場合もある。また、作者としてのクレジットについて、特にこの時代のトラディショナルな作品については、ブルースシンガーが歌った曲の正確な作者を特定する事は、不可能といってよい。

最後に、この本のもっとも肝心な所、ビックビルが言いたかったことは何か、という事は、そのために我々は彼を手伝った訳だが、この本の結びの、彼自身の語った結論を読んで頂きたい。

FOREWORD

ビック・ビル・ブルース
スタンリー・ダンス

この本は、ブルースという音楽と、そのミュージシャン達の世界への扉を開いてくれるだろう。その世界は、確かにこのアメリカの一部だが、これまでは閉ざされたままで、あまり知られることがなかった。

ブルーンジーが歌い、語るブルースは、明らかにアメリカ南部のニグロ社会に根ざしたものであるが、大都市の有色人種社会においては随分以前から広まっているものなので、その起源を明確に定義することは難しい。地方と都市のブルースが混ざり合って行った結果、歌詞、表現方法、アクセントなどが大きく変化した訳だが、それでもなお、南部では、田舎風のブルースがあまり変化することなく影響力を保っている。南部では自然、大地とのつながりの強い暮らしが続いており、昔風のブルースがまだ生きているのだ。そうでなければ、南部の人々は、綿花を摘み、ヤギを育て、とうもろこしパンを食べる昔の暮らしを捨てることができないのかも知れない。ビックビルが愛し、歌い、受け継ごうとしているブルースがそこにはあるのだ。

ビックビルがアーティストとしての尊厳を保ち続けてきた事は、そのこと自体が偉大な業績のひとつであるだろう。ブルースを歌うことで、彼は、ミシシッピの農場からシカゴのナイトクラブへ、レコーディングスタジオへ、ニューヨークのカーネギーホールへ、そして、ヨーロッパの各地へと引きずり出された。そのような環境の変化の中で、商業的な活動を求められるようになると、芸術性が腐敗してしまう事はよくある事なのだ。しかし、直接にせよ、レコードにせよ、彼の演奏を聴くと、彼自身が損なわれることなくそこに存在していることを感じる。本物のブルースシンガーとして、そして、一人の人間として、このような素晴らしい業績は他に例を見ない。

彼が歌った題材はバラエティに富んでいる。ブルースが歌うのは、悲しみ、人種の問題ばかりではない。悲しみ、抑圧もあるけれど、それを蹴散らす勇気やユーモアもある。男女関係の纏れを滑稽に扱った作品では、同情を超えて、皮肉な世相を描き出している。そしてまた、ダンスミュージックという観点で聴くと、ビックビルの弾くギターのビートは、溢れる陽気さでスウィングし、ブルースがジャズの源であることを感じさせる。

編者のヤニック・ブレイノフが構成した、ビックビルの語りと、ブルースの歌詞を一緒に読ませるというアイデアは大成功で、力強くのびのびした作品にまとまっている。ビックビル自身が生活や歌についてのとびきりの逸話を、彼自身の言葉ではつらつと語ることで、リアルさが一段と高まっているのだ。この本が生まれる背景には、この二人の深い信頼関

FOREWORD

係があったことは間違いないだろう。

MY LIFE

MY LIFE

ミシシッピのニグロ達の音楽の本当の姿、それを知りたいと思っている奴がいるんじゃないか、それがこの本を書こうと思った理由さ。俺はブルースマンの中では一番の古株だ。俺達、ミシシッピのブルースミュージシャンは、他の奴らと同じように、自分達の演奏スタイルにこだわってきたんだ。南部の人間でブルースを演るのが、俺達だけじゃない事は知ってるさ。でもこれだけは言える。ミシシッピ、そしてアーカンソーのミュージシャンは、自分達の演り方に誇りを持ってる。ミシシッピ、そして、アーカンソー、この2つの街で、俺は人生のほとんどを過ごしてきた。

最初生まれたのはミシシッピで、しばらくはアーカンソーで育った。50歳になるまでずっと、ミシシッピとアーカンソーを行き来して暮らしてきた。今でもミシシッピとアーカンソーには知人を訪ねてよく出かけて行くよ。俺は南部の故郷が大好きなのさ。

ブルースを演るのは俺達ニグロだけじゃない。ヒルビリーやカウボーイの奴らだって演奏する。奴らには奴らの演り方があるんだろうが、俺達は俺達の演り方が好きなんだ。ヒルビリーの奴らが昔風の演奏を堂々とやっている様に、俺達だって自分達のブルースの演り方に恥じるどころはどこにも無い。

誰かに教えられたものじゃないんだ。ブルースの歌い方、演り方は俺達の中で自然に生まれてきたものなんだよ。

ニグロの仲間の中にはこんな事を言う奴もいる。昔風のブルースは馬車の時代の事、奴隷の時代の事を思い出させる。そんな物を思い出させてどうするんだ。奴隷の話はもうコリゴリだ。もっと違ったものを演奏できないのか？ってね。俺にはこれしか演奏できないんだって答えた。すると、

「それなら本当の音楽って物を少しは習ってきたらどうだ？」

「それならブルースは音楽じゃないとでも言うのか？」

「あんたの歌は、ラバ、綿、とうもろこし、レビーキャンプ、暴力沙汰、なあビックビル、そういうのはもう過ぎ去った時代の話なんだ」

「ちょっと待ちなよ、あんた間違っていないか？あんたの着てる服は綿で出来てるし、アメリカには今でもラバもいればギャングもいる。南部の街では綿とラバを育て、男達はとうもろこしパンを食う。男と女はいつもブルースを与え合っている。こんな世の中だから、アメリカ中どこへ行っても、ブルースを歌ってる奴がいるのさ。」

俺が思い出すのは、昔、俺のおじさんと釣りに行った時の話だ。その日は一匹も釣れなくて、獲物といったら、でかい亀が一匹だけだった。俺達はその亀を連れて帰ったんだが、おじさんは俺に、亀に棒切れをくわえさせて、甲羅の中に頭が入らないようにしろという。それで俺は亀の目の前に棒切れを差し出した。亀は棒切れをくわえて離さない。おじさんは言った。

「首を切っちゃうから、しっかり持ってる。」

おじさんは斧を取り出して、奴の首を切っちゃった。俺達はしばらく家の中にいて、亀

MY LIFE

のいたところに戻ってみると亀がいない。探してみると、もといた湖に戻ろうとしていやる。亀をまた捕まえて戻ってくると、おじさんはこう言った。

「奴さん、自分が死んだことに気付いてねえな。」

俺が思うに、今時の人間はみなこうだと思う。自分がブルースにどっぷり浸かってることに気付いてないんだ。

ブルースについて書こうと思った理由はこれだけじゃない。一つは俺がブルースを愛してるってことかな。その歌い方がどうであれ、歌っている人間が白人であれ黒人であれ、そのスタイルが俺と同じでも違っていても、そんなことはどうでもいいんだ。今となっては、本物のブルースを演れるミュージシャンはすっかり減っちまって、昔風の南部のブルースの演り方を知りたくても、教えてくれる場所なんてどこにも無い。南部の人間も、今はテンポのいいジャンプナンバーが好みだし、若い連中ときたら、ジッターバグだ。もし俺が昔風でスローな本物のブルースを演るのを止めちまったら、いったいどうなっちゃうんだろう。

俺は昔風のブルースが廃れちまうのが嫌なんだ。そのときは俺自身が死んでしまう時なんだ。ブルースだけが俺の音楽で、俺は昔風のスタイルを愛しているんだ。

俺はアメリカ中を旅して回り、さらには、メキシコ、スペイン、ドイツ、イギリス、オランダ、スイス、イタリア、アフリカ、ベルギー、フランスと、昔風のブルースを宣伝して回ったのさ。このピックビルが生きている限り、昔風のブルースを続けていくさ。

俺の親父は 5 人兄弟で、男が 5 人、女が 1 人。親父のお袋はムラートで、黒人だった俺の爺さんと結婚して、家を追い出された。

俺がようやく歩けるようになったぐらいの子供の頃の話だが、ばあちゃんに連れられて教会へ出かけていき、礼拝が終わるまで教会の外で待たされたことを覚えている。その頃はまだ、黒人のニグロは教会にも学校にも入れなかったのさ。

そんな奴隷の時代に、親父はどうやってお袋と知り合ったかを話してくれたことがある。親父は一日働けば十分な量の綿を摘んだんだが、お袋の方は、約束した量の仕事が終わらなくて、酷くいじめられていたんだ。それで親父は、自分の仕事が早く終わったら、藪を潜り抜けて、あんたを手伝いに行つてやろうとそう言って、毎日お袋を手伝ったんだ。

その後、奴隷が解放されて、故郷に帰ることが出来、ルイジアナのバトンルージュで二人は再び、生きてめぐり会ったんだ。そして結婚した。

お袋はいつも言ってたよ。

「あの人はいつも私を助けてくれて、この人のためなら、結婚して子供を生んでも良いと思ったの。」

お袋はその通りにして、21 人の子供を生んだんだ。21 というのは、俺の兄弟が 16 人で、それから、3 人の死産の子供がいたこと、2 人が 2 歳まで生きていたということをお袋が話していたからさ。子供が死んだのは、丸太を引いたり、木を切ったり、畑を耕すという親父の仕事を手伝ったからだといっていた。

お袋は 2 組の双子の男の子と、1 組の男女の双子を産んだ。その男女の双子の男の方が、この俺、ビクビルさ。

お袋には 10 人の姉妹と、1 人の兄弟がいた。親父は別の女に 6 人の子供を作らせていたよ。お袋がそれを知ったのは、親父が死んだすぐ後だった。もし、お袋がもっと早くそれを知っていたら、親父はもっと早く死んだだろうな。

親父はなかなかの爺さんだったよ。死んだのは 1930 年。俺にはいつもこう言っていた。「お前は姉さんより 30 分遅く生まれてきたってことを知ってるか？」

「知ってるさ」と俺は答える。

すると親父はいつもこういうのさ。

「お前は女のケツの後から生まれてきたんだぜ。お前の人生はこれからいつも、こんな調子だろうよ。」

でも結局、その言葉は当たっていたんだ。今じゃ 59 になって、メガネもかけているが、看板の太ももを出した綺麗な女を見るのが好きなんだ。特にでかい奴がね。

MY LIFE

南部で生まれたニグロや、ミシシッピ生まれの連中は、自分の年齢を知らないと思っている奴が多いようだが、そんなことはないさ。親父とお袋は、俺が生まれた年をちゃんと憶えていた。1892年にひどい洪水があって、俺の生まれたのは、翌年の1893年なんだ。もちろんその時生まれたのは俺一人じゃなくて、双子の姉ちゃんも一緒さ。

ニグロの連中はみな、大きな出来事の、前の年、同じ年、翌年に生まれた事を目印にするのさ。

奴隷の時代からずっと、子供の生まれた年を覚えるために、こんな風に使っていたのさ。そして、その日が来ると、アッシュケーキを焼いたり、サツマイモを蒸したり、みんなで何か獲物を捕まえに行ったりした。

毎年、色々な出来事が起こっていたよ。干ばつ、洪水、ピクニック、どこかのニグロが恐ろしい殺され方で死んだ事件など、南部ではこんな風にして、自分の子供が生まれた年を覚えておいたのさ。洪水や嵐に襲われたり、キャンプやピクニックに出かけて、すべ自由な時間を経験したら、それはずっと忘れられないだろ？

そうやって俺達は、自分の生まれた日を覚えておいて、12才か15才になると、盛大にお祝いをしていた。自分の誕生日のその日を楽しみに待っているんだ。

MY LIFE

7 才になると俺は、親父に言われて、ある男の家へ働きに出された。その家は、6 人の子供がいて、男が 4 人、女が 2 人だった。

その子供達の面倒を見るのが俺の仕事だった。でも男の子のうち 2 人は、俺より年上だったんだ。一番上の子は、カレッジを卒業して帰ってきて、弁護士になった。2 人目の子はカレッジを卒業して医者になった。2 人の女の子はカレッジを卒業して教師になった。一番下の子は、カレッジを卒業した後、家に戻って親父の家業を継いだ。

俺がこの家で働き始めたのが 1899 年。1916 年まで働いて、子供達が全員、カレッジに上がるのを見届けた。それで俺もカレッジに行きたいと思ったわけさ。だって 6 人の子供達が皆カレッジを出て、一角の人間になっていくのを見たんだからね。

1917 年に俺は徴兵され、1919 年に家に戻った。その頃にはもう色々な事を習い覚えていたんだが、やっぱりカレッジに行きたいと思っていた。1900 年以来、ずっと叶わないままだったんだ。

俺は音楽の演奏を覚え、働くことを覚え、説教の話し方を覚え、ブルースを歌うこと、教会で歌うことを覚えたが、まだカレッジに行きたいと思っていた。

それがとうとう、1950 年に俺はカレッジに入ることが出来たんだよ。これは何よりも、シェレター博士、ペンバーグ氏のおかげさ。奴らは俺の夢を実現してくれたんだ。

奴ら、俺をアイオワ州立大学の管理人に雇ってくれたんだ。俺は楽しく過ごし、奴らに十分感謝しているよ。

10 才の頃、俺はタバコの箱でフィドルを作ったんだよ。相棒のルイス・カーターは空箱からギターを作った。それで俺達は、白人達のピクニックについて行って演奏したんだ。そこには2つのステージがあって、片方がニグロ用、もう一方が白人用になっていた。

白人達は、俺達の昔風の歌を面白がって聴いていた。そしてマックさんという男がやって来て、俺達に言ったんだ。

「ビル、お前とルイはなかなかの腕前だ。そんな手作りのフィドルじゃもったいない。俺がお前達2人に新しい楽器を買ってやるよ。」

それで本当に買ってもらうことが出来たんだが、俺にはどちらも弾けなかったよ。ルイはギターが弾けないと言って泣き出しちゃうし。それで俺達は、新しい楽器は箱にしまっ てしまい、また古いやつを取り出してきて弾く事にしたんだ。

すると白人の口の悪い奴がやって来てこう言う。

「お前らニグロには本物のフィドルは弾けねえのさ。古いタバコの箱でもくれてやって、一晩中、くたくたになるまで弾かせて、帰らせろ。」ってね。

帰り際、新しい楽器を買ってくれた男がやって来てこう言った。

「ちょっと来なよ。新しい楽器はお前達にくれてやる。弾けるようになるまで家でとっと きな。」

それで俺達は新しい楽器をいただいて帰って練習したんだ。でも弾けるようになったのは、それから3ヶ月も後だったよ。

その後俺は、4年間、宣教師の仕事をした。それからまた俺とルイと一緒に演奏するようになった。俺が宣教師をやっている間、ルイは司祭の補佐の仕事をやっていたんだ。

俺達がまた演奏するようになった頃には、俺達はあの辺りでは一番のニグロのミュージシャンになっていたよ。白人達がそう言っていたんだ。俺達は天幕を張ったポーチで演奏するんだが、同じ時間に、他のニグロ達は、炎天下で野良仕事をさせられているんだ。白人は俺達2人をニグロと言いながらも、他のニグロと一緒に仕事をさせるにはもったいないと思っていたようだ。もちろん俺達の仕事は1ドルたりとも収入にならなかったが、食いたいただけ食わせてもらえて、お下がりの服も随分といただいた。

俺が宣教師の仕事を辞めて、フィドル弾きに戻ったのは次のような理由さ。ある日、俺がフェンスにまたがって座っていると、俺のおじさんがやって来てこう言った。

「フェンスにまたがって生きるってのがお前のやり方か？フェンスの向こうか、こちらか、どちらか一方にしたらどうだ。」

おじさんが言うのは、フィドルを弾くか、説教をするか、どちらか一方にして、両方やるなんて思うなってことさ。お前は宣教師なのか？フィドル弾きなのか？

それで俺はベッドの中で、一晩中寝ないで考えた。俺は読み書きも出来ないし、人々を正しい道に導こうにも、自分自身がまず、正しい道が判らない。そう自分に言ったんだ。

次の日、俺は農場へ出掛けていった。女房が水を持ってきてくれて、そいつを俺が飲んでいると、農場主さんがやって来たんで、俺は水を飲むのをやめた。

MY LIFE

「ビル。」

「なんですかい。」

「4日間、ピクニックに出掛けるんだが、一緒に来て、フィドルを弾いてくれないか。」

「あっしは、宣教師ですよ。」

「説教なんてくそ食らえさ。ここに 50 ドルある。これならお前さんもうんと言うだろう。お前には新しいフィドルと、ルイには新しいギターも準備しよう。」

俺の女房は 50 ドル掴み取ると、靴下の中に隠してこう言った。

「こんな大金、めったに手に入らないわ。昔みたいにフィドルを弾いて頂戴よ。それにあんた、説教なんかしてても、1 ドルにもならなかったじゃないの。あたし、明日さっそく、街へ出掛けて行って、このお金を使っちゃうことにするわ。そうすれば、マックさんだって、お金を取り返せないもの。ねえ、あたしの言ってる意味わかってる？ビル？」

「ああ、わかってるさ。フィドルを弾きに出掛けるか、そうでなきゃ、お前と赤ん坊を置いて夜逃げするか、どっちかな？」

「そうよ、フィドルを弾くのよ。でなきゃ、あんたとはこれっきりお別れよ。」

そういう訳で、それから 4 日 4 晩、俺はフィドルを弾く事になったのさ。

ニグロが信じている迷信にはいろいろあるよ。ハシゴの下をくぐらない事。ベッドの中で歌を歌わない事。13 という数字には気をつける事。テーブルの上の最後のビスケットを食べない事。2人で歩いているとき、その間を誰かに通らせない事。月曜日の朝は黒人の客を招かない事。月曜日には借金を返さない事。日曜日には仕事をしない事。こいつを守らないとどうなるか？「牛が池に落ちたから、引き上げに行ってくるよ。」というのなら OK なんだ。しかし、とれたボタンを元の場所に付けるなんてことはやっては駄目なんだ。でないと口につっかえ棒をされちまう事になる。もしヘビが道を横切った跡が残っていたら、回り道をするか、引き返さなくちゃならない。だから、ヘビがどっちに行ったか判っていて、それがそんなに遠くないなら、ヘビのところまで行って周っていく事になる。俺は何度もヘビを追って、2 マイル、3 マイルと遠回りをし、ヘビの首を切り落としてやったよ。でもヘビを殺すとき、そいつの胴体を回さないように気をつけなくちゃいけない。でないと夕方までに雨が降ることになるんだ。

1918 年の事だが、俺は軍隊で働いていて、俺達 6 人は街へ出掛けるところだった。ちょうど何人かの白人の兵士も街へ向かっていた。そこにはキャンプが 2 つあって、道のこちらがニグロ、向こう側が白人になっていた。

街の近くに来たとき、黒猫が一匹、道を横切った。それでニグロの一人がこう叫んだんだ。

「見ろ、あの黒猫野郎、道を横切らせるな。不吉なことになるぜ。」

俺達 6 人は、猫の首を切り落としてやろうと、すぐに駆け出した。猫を追ってある店の中へ駆け込んで叫んだ。

「黒猫を捕まえてくれ。俺達の前を横切らせるな。」

そこには白人の兵士達が 12 人いて、俺達が猫を追うのを見て笑っていたよ。それから 2 時間して、ようやく俺達は猫を捕まえた。そして猫を道の反対側の、もといいた場所に連れ戻して逃がしてやった。

見ていた白人の一人はこう言ったのさ。

「キャンプに戻ろうぜ。今夜は面白いネタがあるな。6 人の黒人が猫一匹を追回していたんだ。」

白人の兵士達はキャンプへ戻り、俺達は街へ出掛けて酒を飲み、笑いながら帰ってきた。猫は傷一つ負わなかったが、俺達は、手足や頭に傷だらけだったよ。

それからというもの、白人の兵士達は、黒猫を見るたびに大笑いしていた。

ある日、俺達は道端に腰をかけて、白人の兵士達の演習を見ていた。でも白人の奴らは笑ってばかりで、練習にならないんだ。やつら、俺達のことを黒人だからって笑ってやがるんだと思って、俺達はみんな腹が立ってきた。俺達が道を渡って進んでいくと、一人の将校がやってきた。

「お前ら、何しに来たんだ。」

「やつら、何を笑ってやがるんです？」

MY LIFE

と俺達は聞いた。

「さあ、俺にも判らんが、ちょっと見てくることにしよう。」

将校は一人の中尉を呼んだ。その頃には 200 人ぐらいの黒人の兵士が道を渡って詰め寄っていたんだ。将校たちも全員やってきて、白人の兵士達が笑ってたわけを聞いている間、座って待っていると呼びかけた。

やがて将校は、あの日俺達が黒猫を追っているときに一緒だった 12 人の兵士達を連れてきた。

その頃には、周りには 1000 人ぐらいの兵士が集まってきていたよ。

将校は 12 人の内の 1 人を大きな箱の上に立たせ、

「お前達が笑っていた訳を、黒人の兵士達に話せ。」と言った。兵士は、6 人の黒人の兵士が 1 匹の猫を追いかけた話をすると、集まっていた兵士達は皆、大笑いさ。将軍まで笑っていたよ。

それで俺達は、自分達の場所へ戻って、サイコロやトランプを続けたのさ。

その日以来、白人の兵士達が、俺達のキャンプの側へやってくるようになり、一緒にゲームさえするようになったよ。それから 14 ヶ月ぐらいの間、俺達が黒猫を追いかけた晩の話で盛り上がっていたな。

MY LIFE

昔、俺のおじさんとジョンという男が、アーカンソーを離れ、ミシシッピへ出掛けていった。当時、あの辺りでは、ニグロがよその州へ出るのは止めるように言われていたんだ。アーカンソーで豚を盗んで、ミシシッピへと運ぶ連中が後を絶たなかったからさ。それで州を越えるときには必ず、ハイウェイのパトロールから取り調べを受けたんだ。

俺のおじさんとジョンは、古いワンシーターのフォードに乗っていて、おじさんは 1 マイルほど先に警察官が立っているのを見つけた。

「やばいぜ。サツだ。この豚どうする？」

「お前のコートを着せて、帽子をかぶらせるんだ。」

とジョンは答えた。

ジョンは豚にコートと帽子をかぶせ、車は警察官の前で止まったんだ。

「お前の名前は？」

「ジョン。」

「そっちの奴は？」

「ジェリー。」

「OK。通って良いぞ。お前達は問題なさそうだ。」

車が走り出そうとすると、すぐまた呼び止められた。

「ちょっと待てよ。お前は名前を何て言った？」

「ジェリーさ。」

「じゃお前は？」

「ジョンだ。」

「じゃ、真ん中の奴は何ていうんだ？」

と警官は尋ねた。

帽子とコートをかぶった豚が何も言わないので、警官は持っていた警棒で豚をぐっと押したんだ。すると豚がブーブーと鳴いた。

「お前ら 2 人はいいんだが、この真ん中のブーブー言うニグロは、今までに見た中でも、一番ひどいニグロだな。」

警官はこのひどいニグロをとっとと連れて行けと言った。おじさん達は、豚に帽子とコートをかぶせたまま、州境を越えて、無事に家まで辿り着いたんだ。

豚を盗んで捕まったら大変さ。2 年間の農場労働と、100 ドルの罰金さ。

その時、おじさんは、豚に帽子とコートをかぶせてうまくやり過ごした。もちろん豚は黒豚で、警官は豚を、単に醜いニグロだと思い込んだ。それ以来、この豚は、ブーブーニグロというあだ名になったのさ。

昔、アーカンソーにクラーク・ホワイトという名前の白人が住んでいたのを憶えているよ。25 マイルぐらい向こうまでの、広大な農場を持っていて、周りを真っ白なフェンスで囲っていたんだ。そいつの家にあるものは、ニワトリ、アヒル、七面鳥、ガチョウ、馬、牛、豚、ヤギ、ヒツジ、犬、猫、とにかくすべてのものが白いのさ。おまけに庭木まで白く塗らせるし、馬車や農具も白かった。

とにかく黒いものが大嫌いで、ニグロも嫌い。ニワトリから生まれた子供が黒かったら、それはニグロにやっちまうんだ。

それである日、俺がホワイトさんの農場の前を通りかかると、ちょうど子馬が一頭生まれたところで、それで俺に、

「兄ちゃん、乗馬用に1頭、馬が欲しくないかい？」

と言ってきた。

「ええ、頂きます。」

と答えると、黒い子牛も一頭、生まれたからと言って、馬だけじゃなく牛も頂戴したのさ。

こんな具合だから、ニグロの連中は毎日のように、ホワイトさんの農場へ馬車で乗り付けて、何かしら黒いものを貰っていたんだ。

2年ほどして、州がホワイトさんの農場を横切ってハイウェイを建設することを決めるとき、ホワイトさんは

「道路を作るのは問題ないが、ニグロは通行禁止という看板を立ててくれないか。」

と言ったのだ。

そして本当にそうになった。俺達は、

「ホワイトさんはいつも俺達に良くしてくれる。だから農場を横切らないようにしようぜ。なに、5マイルばかり遠回りするだけさ。問題ねえよ。」

俺達は農場を迂回するようになった。そうすると、毎年、果物の収穫の時期になると、ホワイトさんは、農場の収穫が多すぎると言って、自分の農場の連中（もちろん全員白人さ）に言って、荷車いっぱい色々な果物を積み込んで、そんなのを近所のニグロの連中のところまで持って行き、地面の上へ置いてゆくのだ。多いときには、毎日4台分ぐらい持って来た。俺達がピクニックに行くとなれば、豚、牛、ヤギ、ヒツジ、ニワトリ、とにかく何でもくれたんだ。でも、こんな計らいにお礼を言いたくても、耳も貸しちゃくれない。ニグロが大嫌いで、ニグロからは何も貰いたくない、礼も言われたくないって言うんだ。

みんなが言うには、
「金こそすべて。」
「金を持ったら、人を信用するな。」
って事みたいだ。

ところで、俺がツアーでヨーロッパを回ったとき、ポケットには 200 ドルと、5 万フランが入っているんだが、俺は腹ペコで死にそうなくらいだった。プペ、ガイ・ラフィット、ハジョの 3 人以外、頼る人が誰もいないんだ。なぜなら俺が演奏に行った街には、誰一人として英語を話せる奴がいなくて、逆にこの俺は一言もフランス語が話せず、水もパンも頼めない始末だった。

(注：ピアニスト、Andre Persiany, テナーサックス、Guy Lafitte、ベース、Hadjo は、1951 年夏のフランス・ツアーで、ビッグ・ビルをサポートした。)

またある日、アーカンソーの北部の街で、ポケットの中には金が入っているが、街の中ではニグロは列車に乗ってはいけないと言われて、列車から降ろされてしまったことがある。俺は 5 マイルほど歩く羽目になり、そこで通り過ぎた 4、5 軒の店には、人がいるんだが、食べ物売ってくれと頼んでも駄目で、

「ニグロは張り紙を見て立ち去りな。もし字が読めないって言うなら、そのまま立ち去りな。」と追っ払われた。仕方なく俺は店を立ち去り、とうとう列車が水を補給するタンクのある場所へとやってきた。そこは一人の男が管理していて、列車が来ると、水を補給する作業をやっていた。

彼は俺を見つけて言った。

「お前さん、どこへ行くんだい？」

「何か食べ物を探しているんだ。それから、家へ帰る途中なんだ。」

それから男は俺を箱の中へ閉じ込めて、鍵をかけちまった。外から聞こえてくる会話を聞くと、白人が来て、ニグロを見なかったかと聞いているようだ。

「へえ見ましたよ。あっちの方へ行きました。」

白人がいなくなると男は戻ってきて、俺に晩飯を食わしてくれた。それから男は、戻ってくるまで箱の中で待ってろ、と言った。

俺は 2 日 2 晩、その箱の中に隠れていたんだが、男は時々戻ってきて、水や食料をくれて、時々、誰もいないとき見計らって、便所へも行かせてくれた。男が言うには、ニグロには親切にしてはいけないと言われているようだが、俺に対しては、本当に困っている人間なんだと感じたらしい。

「あんたは悪い奴ではなさそうだ。誰かに怪我をさせたり、ものを盗んだり、誰かの家へ押し入ったり、悪いうわさを立てたり。あんたはそういうことをしそうにない。ただ食べ物が欲しくて、家へ帰りたいたんだろ？俺の息子だって、他の誰かだって同じさ。誰だって生きてりゃ失敗だってする。だから俺は、仲間達にお前を殺して欲しくなかったんだ。俺はお前を助けてやるが、いいか、憶えておけよ。礼は絶対もらわないぜ。俺はニグロから

MY LIFE

は何ももらわない。俺だってニグロは大嫌いなんだ。」

男は目に涙を浮かべながら言ったのさ。そして、俺の故郷までまっすぐに行く貨物列車の貨車に俺をもぐりこませ、食料の入った箱と、5ドル紙幣を渡してくれた。

「じゃあな、幸運を祈るぜ。でも、ニグロの爺さん、ここへは2度と戻ってくるんじゃねえぞ。この街の連中は皆、ニグロが嫌いなのさ。」

つまり俺は、金がすべてじゃないと思うわけさ。世界中の金すべてもらうよりも、いい友達を持つほうが、このビックビルにとっては大切だと思うね。もちろん、見かけの友達みたいな連中がいて、目に「\$」ドルマークが浮かんでいて、あの手この手で俺から金を巻き上げていった奴らもいる。俺が言ってるのはそういうのではなくて、本当の友達が大切だってことさ。幸いにもこの俺は、ヨーロッパとアメリカで、そんな友達を作ることが出来たよ。

ブルースシンガーやジャズミュージシャンは、皆、ウイスキーを飲み、ビバップのミュージシャンは皆、マリファナを吸うと思うかい？それならこのアメリカの、宣教師、医者、弁護士、警察官はどうだ？そうさ、それが犯罪じゃなくて、自由にやって良いことならば、悪くもないだろうな。

昔、こんな事があったんだが、俺は友達と地下のバーで飲んでいて、もうウイスキーを5杯は飲んでた。俺達が店を出てくると、1人の男が千鳥足でこっちへ歩いてくるのに出会った。特に誰かにからむわけでもなく、1人で荷物を抱え、家に向かう途中だ。俺の友達はこいつを見て言ったんだ。

「ああいう奴は、通りから締め出して、牢屋に入れたほうが良いな。」

俺は言った。

「じゃあ俺達2人はどうなるんだ。俺達だってこの道の上を歩いているぞ。」

「だって奴はワインを飲んでるぜ。」

「どこが違うって言うんだ。俺達だって同じように酔っ払ってる。奴はワインで、俺達はウイスキー。ポットがやかんを馬鹿にしたってしょうがないぜ。酔っ払いは酔っ払いさ。どういう理由で飲んでいようが、高級ホテルで飲もうが、スラムの地下のバーで飲もうが、農場だろうが、ウォールストリートだろうが、みな同じさ。まあ、お前の方が少しマシかも知れないが、お前だって酔っ払いだぜ。」

友達は納得して、そして俺達はもう一軒、違う地下のバーへ飲みに行った。それから自分のクラブへ、ミーティングに出掛けたんだ。

俺が言いたいことは何かっていうと、もしあんたがジャズミュージシャンだったり、ビバップやブルースのプレーヤー、シンガーだったら、何でもやろうとする前に、演奏する事と、酒を飲むことについて、2度ぐらい考えてみたほうがいい。まず考えるべきは

「こいつを一発吸った(飲んだ)として、俺は正しいコード、音程で演奏できるだろうか？」ってね。

他人の事なんてどうだって良いんだ。まずは自分の事を考えるんだ。

ミュージシャンには、酒を飲んだり、ヤクをやる奴がいる。俺自身も色々なのをやった事があるが、俺にはアルコールだね。ムーンシャイン・ウイスキーから、マリファナまで試したが、これはどうって事はなかった。

俺が思うに、ミュージシャンってのは、ナーバスになると何かが欲しくなるのさ。ミュージシャンじゃない奴らが、ナーバスになると、タバコ、噛みタバコ、嗅ぎタバコなどをやるのと同じさ。

若いミュージシャンの中には、有名なアーティストと同じスタイルの音楽をやるために、同じようなヤクをやらなくちゃいけないと思っている奴もいるようだ。クスリをやったり、ウイスキーを飲むことで、いい演奏が出来るのだと思って、最初は真似のつもりで始めるんだが、だんだん癖になって、それ無しでは演奏出来なくなってしまうんだ。

MY LIFE

俺自身について言うと、ブルースを歌い、演奏するようになってからずっと、2、3杯飲んでおかないと、自分の歌に入っていけないと感じている。飲んでおけば、今まで歌った歌がすべて、俺の中に蘇り、何も怖いものがなくなるんだ。俺が人前で演奏するようになったのは1912年からだが、今でも最初のステージが始まる前に、1杯引っ掛けてから始める。そして、1曲終わる度にちょっとだけ飲むのさ。

ずっと前、ニューヨークでブルースを歌う仕事の時、支配人は、ここで演奏するなら、酒は飲んでくるな、と言うんだ。それで俺は、首にされてはかなわないので、2週間、酒を飲まずに演奏したんだ。

ところがそんなある日、友達の所へ遊びに行ったら、そいつがウイスキーをしこたま飲んでいやがって、それで俺も、つられて飲んでしまったんだ。でもライブは10時からなのさ。

クラブに着いて支配人に会ったら、早速、飲んでることがばれて、俺は首になることになった。でもクラブは満員で、それで俺は、

「今日は飲んでしまったんですが、2度としませんから、許してください。」

と頼んだ。

支配人は、俺をジロリと見つめて、そのまま行ってしまったんだ。

その晩、2回のステージを終えて、給料をもらいに支配人のところへ行ったら、いつもより5ドル多く払ってくれるんだ。

「取っとけよ。それから、明日も飲んでくるんだぜ。お前、今晚は今までで最高の演奏だったぜ！」

それから毎晩、支配人は楽屋にやってきて、俺の口の匂いを嗅ぎ、酒の匂いが足りないのと、でかいウイスキーのグラスを持ってきて、始まる前に俺に飲ませるんだ。

俺だって、四六時中ウイスキーを飲んでるわけじゃないぜ。ブルースをやる時だけ、ちょいと引っ掛けるんだ。

ある男が、アルバートって奴のことをこんな風に言ってた。

「アルバート・ブラウンは、ウイスキーを飲んでばかりだ。きっと早死にするだろうよ。」

こいつとはまた別のアルバートという男がいて、生まれてから一度も酒を飲んだことがないという男だった。2人のアルバートがどうだったかと言うと、死んだのは6ヶ月しか違いがなかったんだ。俺が思うに、人間てのは色んな事で死ぬわけさ。例えば、心臓病で死ぬことはよくあるが、心臓さえ調子よく動いて、止まることがなけりゃ、死なずに済むだろうさ。

でも、ミュージシャンを雇うって事を考えると、俺は、ウイスキーを飲む奴よりは、マリファナを吸う奴の方がいい。今までリーダーをやった事のある5つのバンドでは、ハッパを吸う奴は、おせっかいでもなく、演奏もしっかりしていて、付き合いやすかった。常に新しいものを吸収しようとしたり、古い歌を発展させようとしていた。

MY LIFE

そこへ行くと、ウイスキーを飲む奴は、しゃべってばかりでリーダーの言うことを聞かない。昨日と今日で、演奏するキーがずれているかと思えば、口論を始めて全然演奏しない。レコーディングのためにスタジオに入ったら、ピアノの陰で寝ちまう奴もいたよ。7人でレコーディングを始めたのに、レコーディングの最後まで出来たのは3人なんて事もよくあった。残りの4人は飲んだくれて、しまいには俺とケンカになったんだ。

「そんなのブルースじゃねえ！」

なんて言い出すから、残りの曲は、俺が自分でやるしかなかった。

昔、レコーディングのために、街から50マイルも離れたスタジオに行ったことがある。

そして、ミュージシャンを集めて

「早速、1曲やってみよう。」

と言うと、1人だけ、トランペットの奴がしょげてる。

「どうした？」

と尋ねると、

「ケースは持ってきたんだが、肝心のトランペットを入れるのを忘れてた。」

ときたのさ。仕方なく俺は、楽器を借りに行ったよ。あいつもかなりの飲んだくれだった。

ブルースシンガーって何だ？いいの？悪いの？そんな風に尋ねられたら俺は、ブルースシンガーってのは、金に目がくらんだ男や女の、晩飯のチケットみたいなものさ、と答えるよ。

1922 年に、マヨ・ウィリアムズに初めて会ったとき、あんたの演奏はいまいちだが、俺は嫌いじゃないぜ、と言ってくれた。俺は早速、飛んで帰り、友達のジョン・トーマスに話して、一緒に来てもらうことにした。

それでもう一度、ウィリアムズに会うと、今度は、何曲歌えるんだ？と聞かれた。それで、" House Rent Stomp "、" Big Bill Blues "、" Gonna Tear It Down "、" Tod Pail Blues " の 4 曲だと答えた。ウィリアムズは、

「よし判った。その 4 曲をしっかり練習して、2 週間後に来てくれ。」

と言った。

それから毎晩、俺とトーマスは、一生懸命練習したよ。そして 2 週間後、ウィリアムズは、" Big Bill Blues "、" House Rent Stomp " の 2 枚のレコードを出してくれたんだ。

それが 1923 年の事で、同じ年にもう 2 枚レコーディングしたんだが、こっちは発売されず、俺達のはお試しで終わってしまい、結局、違うアーティストが録音して発売したんだ。この時の " Gonna Tear It Down " は、それから、いくつかのバンドで演奏されたよ。

結局この、後の 2 枚はまったく金にならなかった。最初の 2 枚はどうかと言うと、ジョン・トーマスの方はちょっと嘘をついて、100 ドルせしめた。親父が死んでしまって、その葬式代にどうしても 100 ドル必要だと頼んだんだ。でも本当は、トーマスの親父さんは、あいつが 12 才のときに死んだって事を俺は知ってたんだけどね。俺の方はどうだったかと言うと、嘘はつかなかったんで 50 ドルだった。俺がスタジオに置いてある 500 ドルのレコーディング装置を、足を乗せて壊しちまったと言って値切られたのさ。

でも結局、この 2 枚についても、全然金にならなかった。レコードは 10 月 25 日に発売になったんだが、俺は、自分のレコードが売ってるのを見かけたら、すぐに全部買っちゃったんだ。シカゴのマクセル通りにはレコード屋が 2 軒あって、1 軒は俺、もう 1 軒はトーマスが行って、毎日、売ってるレコードを全部買ったんだ。だから、このレコードは良く売れたね。俺達だけで 50 枚も買ったんだ。

俺とトーマスは座り込みまして、レコードを作るにはどうすればいいか相談したもんだよ。当時、レコーディングってのはこんな具合だった。俺はラッパみたいなやつの中へ頭を突っ込まされて歌い、歌詞を見るときにはラッパから一度頭を出し、また頭を突っ込んで歌う。トーマスの方は 2 フィートもある柱の上に寄せられてる。それなのに奴ら、いつもの通り、家やパーティーで演奏するときみたいにやれって言うんだぜ。リラックスするように、ムーンシャイン・ウイスキーを飲んだらどうだとしきりに勧められ、そして俺は飲んだのさ。

レコーディングが終わると俺は眠り込みまして、気が付くと家に帰る途中だった。ジョン・トーマスは、俺が何かの書類にサインしてたと言うんだが、俺は知らないと答えた。

「ジャンパーのポケットをってみろよ。」

と言われてしてみると、確かに、サインの書かれた紙が入っている。

「奴ら、お前にしこたま飲ませてたぜ。おい、お前、すべての権利を譲渡致しますって書いてるぜ！」

俺はとんでもないことをしでかしちまったんだ。ただ泣く事しか出来ず、トーマスには何度も謝った。だから、トーマスが嘘をついて 100 ドルせしめた時、俺は何も言えなかったんだ。

「そうなんです、ウィリアムズさん。トーマスの親父は昨日の夜、10 時ぐらいに亡くなったんです。」とそう言ったのさ。

トーマスは金を受け取ると、それから 2 週間は見つからないように隠れていたよ。でもウィリアムズは、トーマスをすぐに事務所へ連れて来いと言う。俺はトーマスの親父さんの葬式が終わるまでは帰らないですよと答えておいたんだ。

それでもウィリアムズは、できるだけ早く、トーマスを連れて来いという。俺とトーマスは 2 週間たった後、ウィリアムズの事務所へ毎日、1 週間ばかり通ったが、今度はウィリアムズが忙しくて、なかなか会えなかった。

「ちくしょう、俺はもう 2 度とこんな所へ来ねえよ。」とトーマスは言った。

次にウィリアムズに会ったとき、俺と、ジェームズ・ウィリアムズと、ポール・ベネットの 3 人でレコードを作ることになった。ジェームズがピアノ、俺がギター、そしてポールが歌うんだ。これが 1926 年のことで、その時の給料は、ポールが 10 ドル、俺が 15 ドル、ジェームズが 25 ドルだった。

それからしばらくして、1928 年に俺は、レスター・メルローズに会った。その頃俺は、雑貨店で働いていて、メルローズは俺を事務所と呼んだんだ。それで俺は早速、ギターを持って出掛けたのさ。メルローズとその相棒のハーマンがいて、俺をスタジオに連れて行き、そこで俺は 4 曲吹き込んだ。この時に吹き込んだのが、

” With And Angle Blues ”、” The Walking Blues ”、” Big Bill Blues No.2 ”、” House Rent Stomp No.2 ” といった曲さ。

2 ヶ月もするとさらに、” Bull Cow Blues ”、” Milk Cow Blues ”、” Serve It To Me Right Blues ”、” Mama Let's Cuddle ” などを録音した。

その頃からブラック・ボブというピアニストと知り合い、それから数年は彼と一緒に演奏していた。

「ビック・タウン・ブルース」という言い方があって、このビック・タウンというのは、ニューオーリンズ、メンフィス、セントルイス、カンサスシティ、アトランタ、ヒューストン、リトルロック、ジャクソン、ビックスバーグといった街にいたミュージシャンが始めたスタイルだ。

奴らは王様みたいな暮らしをしていたよ。金持ちの白人の家の裏にある、使用人の家に、白人の家で料理する小間使いと一緒に住んでいるんだ。

こういうミュージシャンは、最近は見かけないね。奴らは夜になると起きだして、食事は、白人の家から小間使いがフライパンごと持ってくるんだ。俺達はそういう奴のことを、スイート・ビック・パパと呼んでいたよ。

奴ら、綿、とうもろこし、米、サトウキビなんかの作物をどうやって育てるかってことには、まったく興味が無いみたいだ。しゃれた服を着て、3、4人の女をはべらせて、毎晩街へと出掛けるんだ。1人の女は食費を出してやり、他の女は、服やら靴やらを買ってやる。10ドルもするステットソンの帽子をかぶり、20ドルで金の腕時計をはめ、歯やら指やらにはダイヤモンドがキラキラしてるのさ。

こういう男がいたおかげで、ベッシー・スミスやその姉妹、マー・レイニー、アイダ・コックス、メンフィス・ミニー、マーリン・ジョンソン、ヴィクトリア・スパイヴィ、リル・グリーンなど、他にも多くの女性ブルースシンガーがブルースを歌うようになったんだと思うよ。女達は、こういう男達とのトラブルで、ブルースを背負い込んでしまう事になったんだ。でも、あのクソ男どもは、少しもブルーを感じることは無かったんだろうけどね。

そんな訳で、例えば、"Me And My Chauffeur"、"Grave Digger Blues"、"See See Rider"、"King Size Papa"、"My Mellow Man"、"Deep Sea Driver"、"My Man Ain't Come Up To My House"、のような歌が生まれてきたんだ。自分が、例のスイート・パパをどんなに愛していて、どんなにつくしたか、男が自分をどう愛したか、を歌ったんだ。

ある男が女を捨てて別の女の所へ逃げて行き、女の方では男を殺してやりたいほど、でも捕まえられない時、その殺してやりたい気持ち、男を連れ戻したい気持ちをブルースに歌ったんだ。

俺が覚えてる話の一つある。そんなスイート・ビック・パパに女がいて、そいつは女の稼ぎが少ないと、女を殴りつけていたのさ。それである日、女に、7ドル稼いでくるまで帰ってくるな、と女を外へ追い出した。

女が歩いていると、シックスと呼ばれている警察官に出くわしたんだ。警官は、こんな夜遅くに何をしてるんです？と問いかけた。女は、

「夫が、7ドル稼いでくるまで帰ってくるなと、私を追い出したんです。」

と言った。それでシックスは、

「それなら、あなたの家へ行きましょう。あんたがノックしてください。」

と言った。

MY LIFE

女はノックし、大男のシックスがその後ろに立っていたんだ。夫はドアの向こうで、女に怒鳴った。

「7ドル稼いだできたのか。」

「いいえ、でもシックスを連れて来ました。」

夫は女が6ドル稼いで来たと思い込み、ドアを開けたんだ。そこですかさず、シカゴで一番の悪名高き大男の警察官、シックスが押し入って、スイートパパに一撃を食らわし、そのまま夫を牢屋にぶち込んだ。これがつまり、” In The Jail House Now ” というブルースの元になったのさ。

MY SONGS

MY SONGS

MY SONGS

=====

BLUES IN 1890

(Joe Turner Blues)

この歌が歌われていたのは 1892 年
ひどい洪水の年さ
貧しい人々はみなこの歌を歌った
自分達の気持ちを歌に託した
一年働いて、1 ドルの金にもならず
干ばつで畑も財産も失った
着る物も食糧もなく
ジョー・ターナーの名を呼ぶしかなかった
ジョー・ターナーは貧しい人々を助けてくれる
白人も黒人も分け隔てなく
人々は泣きながらこの歌を歌ったんだ

”ジョー・ターナーがやってきた
神様、ジョー・ターナーがやってきた
そしてまた何処かへ行ってしまった。”

うさぎ、あらいぐま、野ねずみ、捕まえに行こう
何か食べられる物を探しに
でも収穫はわずか
何度やっても同じ
とぼとぼと家に帰り、台所を見ると
小麦に肉に蜂蜜の山
ジョー・ターナーだ、ジョー・ターナーがやってきたんだ
人々は泣きながらこの歌を歌ったんだ

”ジョー・ターナーがやってきた
神様、ジョー・ターナーがやってきた
そしてまた何処かへ行ってしまった。”

出掛けるときには何も無かったんだ
ジョー・ターナーがやってきたんだ
食べる物、着る物、何から何まで

MY SONGS

人々は喜びに溢れ、叫び、踊った
ブギウギも踊ったんだ

(注:この曲は語りとリフレインの歌から構成されている。ビッグ・ビルは物語を語った後、独特のギター演奏に合わせて素晴らしい歌を聴かせる。レコーディングは、フランス、パリ、Vogue Records(Nr.131, LP 030))

(以下は別バージョンの録音：Folkway FG3586, FA2326, Verve MG V-3000-5 Vol.1)

=====

俺が録音した「Blues in 1890」という曲は、俺が生まれる3年前にはすでに歌われていたものだ。俺のおじさんと、その相棒のストーンウォール・ジャクソンは、2人でバンジョーを弾きながら、この歌を歌っていた。当時、この曲にはまだ名前が無かったが、当時から、俺がやっているのと同じような演奏と歌だった。違いがあるとすると、俺はギターでやっているという所ぐらいだろう。

俺のおじさんは、バンジョーを作ろうと思い立つ前に、雨の日や仕事が終わった後に、何か音楽を鳴らしたいと思っていた。それで、最初は手拍子に合わせて歌っていたんだが、ある者には強く叩かせ、またある者には揉むように叩かせ、色々な音を出そうとしたんだ。歌を歌う時にも、2人の男の間に1人の女が立つように並ばせて、大人の男はバス、若い男はテナー、大人の女はあると、若い娘はソプラノと、音程を分けて歌わせたんだ。

俺のおじさんは当時、仕事は鍛冶屋で、鋤(すき)などの農具の修理をやっていた。鋤には色々な種類があり、それぞれ刃の大きさが違う。俺のおじさんは刃を研いで鋤の手入れをしていたんだ。そしてある日、刃を研いでいるときに、叩くとそれぞれの鋤で違う音がする事に気付いた。それで鋤の中からいくつか選び出して針金を引っ掛けた。その針金を弾きながら歌を歌い、そうして音楽を作り出した。

ある日おじさんは洗濯用の古い桶の修理をしていた。桶に付いた汚れを落とそうとして棒で叩いてみると、これもまた違った音がする事に気付いた。ゆっくり叩いたり、早く叩いたり、1本のスティックで叩いたり、2本にしてみたり、そうして、どうしたらどんな音がするのかを掴んだ。おじさんは相棒のストーンウォール・ジャクソンを呼んで鋤の刃を弾かせ、自分は桶を叩いた。暇さえあればそんなことをしていたんだ。

またある日、おじさんのかみさんが台所掃除を手伝ってくれと頼んだ時のことさ。かみさんはほうきを渡して、床を掃くように言った。おじさんは皿洗いを終えたばかりで、手が濡れていて、机の上に腕を伸ばし、ほうきの柄の上で手を滑らせた時、音がすることに気付いた。強く握って動かせばまた、違った音がするんだ。おじさんは指を色々と動かしながら、色々な音を出してみたんだ。

おじさんは早速、ほうきを持って鍛冶屋に戻り、ストーンウォール・ジャクソンと、さらにもう一人、友達を呼んだ。そして、この男に桶を叩かせ、ストーンウォールには鋤の

MY SONGS

刃を弾かせ、そして、ジェリーおじさん自身は、机の上でほうきの柄を鳴らし、そんな事ばかり、ずっとやっていたんだ。毎日が、1日おきぐらいに、3人は集まって、こんな風に歌っていたんだ。

おじさんが話していたんだが、ある日、雨で野良仕事が出来ず、例の楽器を持ち寄って早速演奏を始めたんだ。するとみんなが、鋤の刃とほうきの柄と桶の演奏を聴きに集まってきた。白人まで面白がってやって来て、演奏に合わせて踊り始めたんだ。やがて白人達が疲れて何処かへ行ってしまうと、白人達が残っていたサイダー、丸焼き豚の肉などを食べたり飲んだりして、パーティーを始めた。

その時演奏した曲の一つがこの "Tell Me Joe Turner Been Here And Gone" さ。白人が見ている時は、この歌を歌うことが出来なかったよ。白人達は、自分が一番、ニグロに対して寛大な人間だと思っているようだったからね。でもニグロたちは、ジョー・ターナーのような人物が本当にいると信じていた。ニグロたちの信仰だったんだ。

ニグロたちはいつも、困った事があると、ジョー・ターナーの歌を歌った。食べ物や着る物が無いとき、日照りで作物が育たない時、みんな泣きながら、"Tell Me Joe Turner Been Here And Gone" を歌ったものさ。

1982年に大きな洪水があって、すべてが水に流されてしまい、しかも、翌年の1993年は干ばつで、畑に植えた作物はみな、枯れてしまった。

みんな食べるものが何もなくて、うさぎ、あらいぐま、野ねずみを捕まえに行ったよ。魚釣りに行ったやつもいる。大体、1匹の魚もうさぎも獲れず、仕方なく家へ帰ると、ジョー・ターナーが置いていった肉、小麦、蜂蜜を見つけるんだ。そして泣きながら、"Tell Me Joe Turner Been Here And Gone" を歌ったんだ。

おじさんは俺が10才の説き、ブギウギってダンスの踊り方を教えてくれた。部屋を横切って踊るものと、手を叩く者に分かれて、こんな風に歌う。

"ブギウギを踊ろうよ、子供達

ジョー・ターナーは俺達の味方"

するとみんな、ブギを踊りながら、そろって「そうさ！」叫ぶんだ。そしてみんな幸せな気持ちになる。何故かって言うと、食べ物や着る物、靴など、ジョー・ターナーが残して行ってくれた物が見つかるからなんだ。

ジェリーおじさんが言っていたんだが、昔、50人もの奴隷を使っている男がいた。奴隷の見張り役に3人の男をつけて、こいつらを奴隷使いと呼んでいたんだ。もちろんこの奴隷使いってのは白人なんだが、主人の男は、この奴隷使い達に、奴隷を引っ叩いたり悪口を言うことを許さなかったのさ。この主人の老いた白人は、年寄りのニグロに身の回りの世話をさせていて、このニグロから、ニグロ達の間で何が起きているのか、誰が何処へ行ったのかななどの話を聞いていた。このニグロの名はジョーと言った。ニグロ達はみな、

MY SONGS

何かお願いしたいことがあると、このジョー老人の所へ相談に行った。ある日、ニグロ達は狩りから戻ってきて、家の中に、食糧や服があるのを見つけて、ジョー老人の所へ駆けつけた。

「朝出掛けて行って、戻ってきてみると、家に食べ物や着る物があるんだ。いったい誰が置いて行ったんだろう？」

ジョー老人は言った。

「そいつはたぶん、ジョー・ターナーの仕業だな。」

そして、" Tell Me Joe Turner Been Here And Gone " の曲を口ずさんだ。ニグロ達は、ジョー老人に合わせて、みんなでこの歌を歌っていたんだが、気が付くと、老人はどこかへ行ってしまっていたのさ。

ジョー老人が仕えていた老いた白人は、大きな店を構えていて、色々な商品を扱っていた。この老人はニグロに頼まれれば、食糧や着る物を分けてやっていたんだ。それでこの白人はニグロ達から尊敬されていたのさ。大きな洪水や干ばつがあると、食糧や着る物を袋につめてジョー老人に渡し、ニグロ達が出掛けている間に、家々に配らせた。ジョー老人はそういう仕事をしていたんだ。

おじさんの話だと、こんな事が 20 年も続いたんだが、白人もニグロも、ジョー・ターナーが誰だか、誰も気付かなかったんだそうだ。

この白人が死んだとき、ニグロの連中は、挨拶に出掛けた。ジョー老人はうめくようにして泣いていたんだが、ニグロ達はみんな、老人がどうして泣いているのか判らなかったんだ。主人が死んでジユウの身となり、喜んでいるだろうと思ったからさ。それで、俺のおじさんはジョー老人に尋ねた。

「ジョー、どうして泣いているんだ？」

「ジェリー、お前には判らないのさ。もしそれを知ったら、お前だって泣いてしまうだろうよ。」

「何故だか判らないよ。」おじさんは言った。

「あいつは奴隷の主人だ。奴隷を使う連中はみな、ニグロが嫌いで、ニグロを働かせ、取り上げちまう事ばかり考えているんだぜ。あいつもニグロを嫌っていたよ。」

ジョー老人は泣き叫んだんだ。

「旦那はニグロが " 好き " ではないんだ。ニグロを " 愛して " いたんだ。旦那は死ぬ間際、私に、ジョー・ターナーを続けてくれ、とそうおっしゃったのだ。でもそんな事は、私一人では到底、無理な事なのさ。」

「どういう事さ。あんたはジョーじゃないのかい？」

「そうさ、俺は確かにジョーだが、旦那無しでは、ジョー・ターナーにはなれないのさ。」

「ジョー・ターナーであり続けるって、どういう事さ？」

とおじさんは聞いたんだ。

「ニグロ達をみんなここへ連れてきてくれ。みんなに話したい事があるんだ。」

MY SONGS

おじさんはニグロ達を連れてきた。そしてジョー老人は、ジョー・ターナーの話を始めたんだ。

「干ばつで畑の作物が全部駄目になったとき、それでも食糧にありつけたことを憶えているかい？」

みんなは憶えていると答えた。

「嵐が来て、みんなの家が吹き飛ばされちまった時、代わりの家と、食糧のある納屋と、ラバに食わせる干草にありついた事を憶えているかい？」

みんなはまた憶えていると答えた。

「でもジョー、一体、誰の仕業だったんだ？」

「ちょっと待て。今話してやる。1892年に大きな洪水があって、すべてが流され、俺達はみんな岡の上へ逃げるしかなかった。死んだ奴もいたな。水が引くまでには14日も掛かったが、その後、このジョーがああ岡の上でみんなに、水が引いたから家に戻れ、と言ったよな。岡の上でも俺達には食べ物があったが、家に帰ってみると、ベッドも小麦も肉も蜂蜜もコーヒーも砂糖も明かりの油も、服、靴もあったよな。」

「そうだ、確かにあった。でも誰の仕業だったんだ、ジョー？」

ジョー老人は首を振り、ほほに涙を流しながら答えた。

「お前達は知らなかったんだ。」

そして、死んだ白人が埋まっている墓を指さした。

「ニグロのみんな聞いてくれ。冷たい冷たい土の中、6フィートも深く眠っている、あの白人の旦那こそ、ジョー・ターナーさ。」

ニグロのみんなは聞いた。

「どうしてそんな事が判ったんだ？」

「お前達が狩りや釣りに行っている間に、旦那は食糧や服を詰め込んだ袋を私に渡し、お前達の家々に配るようと、そうおっしゃったんだ。お前達がすべてを失って悲しんでいた時、俺は夜通しかけてお前達の家を回り、旦那に頂いたベッド、食糧、服などすべてのものを運んだんだ。それが、お前達が泣きながら歌い踊ったあのジョー・ターナーさ。でももう、それも終わりさ。俺達ニグロはこれから、どうしたら良いか判らねえ。ニグロを愛してくれたあの旦那はもう死んじまったんだ。判ったかい？ じゃあな。」

そう言ってジョー老人は立ち去った。おじさんの話だと、それっきりジョー老人を見かける事は無かったそうだ。このジョー老人がその後どうなったか、誰も知らないんだ。ジョー・ターナーというのは、この老人の本当の名前さ。名前がジョー、そして、主人の白人の名が、マスター・ターナーなんだ。

こんな話があって俺は、この2人の白人と黒人の男についての"Blues in 1890"という歌を作ったんだ。この2人は、生きていた間に立派な行いをしたのさ。ミシシッピにはこれ以外にも何人か、ジョー・ターナーは居たらしいけどな。ざっとまあこれが、ブルースの真実さ。

MY SONGS

=====

PLOUGH-HAND BLUES

「鋤（すき）引き男」が俺のあだ名。もう 40 年もずっとそうさ。
神様、俺は出来るだけのことをしてきたよ。
だから少しは俺の事も気にかけてくれ

綿作りはもうコリゴリさ。神様、とうもろこし作りだって同じだよ。
もしもラバを取り逃がしたら、それでこの世が終わりだって言うなら、
神様、俺はおとなしく、ラバを家に連れて帰るよ。

ラバに向かって、立てと、いくら叫んでも無駄さ。
その場に座り込んだきり、動かねえ。
神様、仕方ねえから、畑は自分で耕すしかねえ。
でもそんな事をして、俺の爺さんは体を壊して死んじゃった。

毎晩、俺は、うなされて目が覚める。
神様、いくら怒っても、肩を震わせても、
この小さな鋤では、大して耕せねえよ。

(Vocalion 05452, Conqueror 9378

別バージョンは、Melodic 1203, Verve MG V3000-5 Vol.2)

=====

俺が初めて畑を耕す仕事をしたのは、1900 年の事で、その時は、フラット・ハリーって鋤を使った。こいつは 2 頭のラバに引かせる鋤で、とうもろこし畑をやる前に、こいつで耕すんだ。俺はこのハリーを使うのが、めっぼう上手くて、親父は、もしこれでとうもろこしが良く育ったら、今度は、プレーリー・ハリーを使わせてやると言って、そして実際に使わせてくれたんだ。俺がプレーリー・ハリーでも上手く仕事をしているのを見た親父は、「とうもろこしと綿が大きくなったら、今度は、綿の畑で、シングル・シャベルを使わせてやろう」と言った。そして今度も俺が上手く使っているのを見て、「お前は今年 1 年で、3 種類の鋤が使えるようになった。来年あたり、すべての鋤が使えるようになるだろうよ。」と言ったんだ。

次の年、早速、親父は俺に、回転式の鋤を使わせてくれた。この鋤で俺が、頼まれた畑

MY SONGS

を全部耕してしまうと、とうとう、畑仕事でもっとも手強いという、ミドル・バスターという鋤を使わせてくれる事になった。それから 4、5 年の間、俺はこのミドル・バスターという鋤を使いこなす事が出来なかったよ。いつも俺の体の方が投げ出されちゃうんだ。ミドル・バスターを使いこなせる男はモテるって知ってたから、毎年、俺はこいつと格闘していた。そして 15 才になる頃、とうとう俺は、すべての鋤が使いこなせるようになったのさ。その頃、俺は、5 フィートと 7 インチの身長だった。毎週土曜日に来る列車を出迎えに行くと、女の子達が親父に、

「ビルはミドル・バスターを使えるようになったの？」

と聞いていたよ。それで親父は、

「ああ、使えるようになったよ。あいつは 7 人兄弟の中で、一番、鋤の扱いが上手いよ。」

と、そう答えていたのさ。

その日そこには、同じメアリーという名前の女の子が 3 人いて、俺に祝福のキスをしてくれた。メアリー・バトル、メアリー・メーズ、そして、もう一人が俺の大好きなメアリー・クローで、肌の色が薄くて、茶色の髪をしていた。最初の 2 人のメアリーは俺と同じくらい黒くて、顔立ちは綺麗なんだが、本当に黒かったのさ。それで俺は、肌の薄いメアリー・クローにぞっこだった。

それで俺は、20 才になった時、メアリー・クローと結婚したいと親父に言った。親父は、

「お前、自分の言ってることが判ってるのか。」

と言う。俺は、

「判ってるさ。」

と答えた。

「お前、判ってねえよ。あの女は 28 才でお前は 20 才だ。この話は無しさ。あの女はスレてて、売春宿に住んでるんだぜ。」

「知ってるさ。」

と俺は答えた。

「だって俺はそこへ行行って、メアリーと一晚、寝てきたんだ。」

「何だって？お前、玄人とヤったのか。」

「そうさ、2 回行ってきた。」

「なに？その金はどこから出したんだ。」

「お袋が 3 ドル出してくれて、街で何でも好きなものを買ってきていいと言ったんだ。鋤引きが上手くなったご褒美さ。」

「それでお前、何回行ったんだ？」

「2 回だけさ。土曜日に 2 回。」

「お前、あの女を判っちゃいないよ。」

「そんなことは無いさ。彼女はメアリー・クローと言って、薄い肌と見事な脚をしているよ。」

MY SONGS

「お前が知っているのはそれだけかい？それであの女と結婚するのか？」

「ちがうよ。彼女はスイートで、素敵な愛し方を知ってて…」

「うるせえ。ぶっ飛ばすぞ。俺がお前を育てるのに、どれだけ苦労したと思っていやがんだ。売春宿の女と結婚させるぐらいなら、いっそお前を殺してやるよ。あの女の事は忘れな。来年6月に21オになったら、お前はガードルードと結婚しろ。」

そして翌年、1914年の11月11日に、俺とガードルードは結婚して、親父は幸せになったって訳さ。

でも毎週土曜日には、俺は街へ出掛けて、メアリー・クローに会おうとした。その日、俺は親父より一歩早く街に着き、メアリー・クローを捕まえて部屋に入ったところ、どうやら外から、親父の声で、メアリー・クローを指名しているのが聞こえてきた。受付の女は、

「あいにく、メアリー・クローには、もうお客さんが付いています。」

と答えた。

「それはどういう意味かね。」

「先に来たお客さんが優先でございます。」

「その客はどんな奴なんだ。」

「あなたの農場で鋤引きが一番上手な方です。」

と受付の女は答えたんだ。

それで親父は、その客がこの俺、ブルースを歌う鋤引きのビックビルだと判っちまった。

それから俺は軍隊に行くことになり、鋤引きもあまりやらなくなった。そして軍隊から戻ってきてから、若い頃を思い出して、"Plowgh-Hand Blues"という歌を作ったんだ。

=====

俺が農場のとうもろこしや綿の畑で鋤を引いていた頃は、太陽が昇るとすぐに仕事を始め、太陽が沈むまで仕事をしていたよ。やがて、もう一人、俺の鋤引きを手伝う奴が雇われて来た。

「いつ仕事を始めて、いつ終わるんですかい？」

「太陽が昇ったら初めて、沈んだら終わるんだ。」

俺はそう説明したよ。

ある日、太陽が西へと沈みかかると、逆に東から、月が昇り始めた。

「兄さんは、洒落が効いてますね。」

「洒落が効いてるってどういう事さ？」

「見なよ。太陽が1個沈んだと思ったら、もう1個の太陽が昇り始めましたよ。」

男はラバと鋤を畑に残したまま、どこかへ行ってしまい、それから誰も、その男の事を見なかったよ。

MY SONGS

PARTNERSHIP WOMAN

俺もとうとう女を見つけた
みんな俺のこの気持ちが判るかい？
この気持ちを教えてやるよ
俺の女は俺にひどい事ばかりしやがるんだ。

俺が友達を連れて帰ると
その事自体は悪いことでもなかったが
女は俺を追い出しちまって
今、一緒に住んでるのは、俺の友達の方さ

でも俺はツイてて
女を取り返してやった
早速、ブルドックを買いに行ったんだ
こいつが俺達には最高の友達さ

女が正直に言う事を聞くななんて思わないほうがいいぜ
これだけは間違いない
女が優しい時には
女は、お前さんの友達と、いい仲になっちまっているんだ

(Columbia 30143)

"Partnership Woman"というこの曲は 1945 年の吹き込みだ。ピアノはビック・メイシオ、サックスはバスター・ベネット、ドラムはリトル・T というメンバーで、このレコードは良く売れたよ。

この歌も実話が元になってる。この"Partner"という呼び方は、お互いに尊敬し合っていて、着る物や食べる物、金なんかをお互いに分け合って暮らしているときに使うものなんだ。俺はその時、パートナーと一緒に過ごしていた。一生忘れられない事だよ。

そいつの名前はシセロ・マーフィーと言った。独り立ちするようになった頃、小さな街に移ってきた。その頃俺は、農場で鋤引きをやってたよ。

俺の仕事はみんなから、「日雇い」と呼ばれていた。給料のもらい方で、仕事の呼び方が違うんだ。月払いなら「月雇い」、週払いなら「週雇い」、年払いなら「年雇い」となる。

MY SONGS

それで俺は日雇いで、シセロの方は隔週雇いだったのさ。あいつはコットン・ベルト鉄道株式会社に働いていて、レールのタイヤを取替えや草刈など、線路を掃除して、良い状態にするのが仕事だった。俺達は奴の仕事を、「軌道整備」とか、「隔週雇い」と呼んでいた。あいつの仕事は2週間に1回、給料が出たからね。

それから、女の話になるんだが、その頃、ベティと呼ばれてる女がいて、話しかけたら、付き合ってる男はいないと言うんだ。俺達はそれから付き合うようになり、俺は毎週、この女に小遣いを渡すようになった。この女は、2週間ごとに、従妹と伯母さんに会いに行くと言って、シセロが働いているのと同じ街へと出掛けていったんだ。2週間毎に、もちろん俺の金で、その街へと出掛けていき、3、4日泊まってくる。それからまた、鋤引きの俺の所へ戻ってきて、次の鉄道会社の給料日まで過ごすんだ。女は俺にキスしながら言ったよ。

「ビル、従妹に会いに行ってくるわ。」

俺は答える。

「ああ、ベティ。この金を持って行って、よろしく伝えてくれ。」

女は金を受け取ると、

「ビル、あなたが仕事から帰ってくる前には、出掛けてしまうわ。」

と言った。

7月4日のことだ。俺達は4日4晩のピクニックに出掛けることになった。俺とシセロは野球チームに参加することになり、2人とも4日間の休みを取った。ピクニックの野球大会に出るためにさ。あいつがピッチャーで俺がキャッチャー、朝には早速出掛けなくちゃならなかった。俺はベティに聞いたんだ。

「お前もピクニックに行くかい？」

「今日の第1試合のピッチャーは誰なの？」

「俺のパートナーのシセロさ。お前にもあいつのピッチングを見せてやりたいよ。まだ見たこと無いんだろ。」

「見たことないわ。でもボールを投げる事なんか、全然興味ないの。」

「でもあいつは、俺のパートナーなんだぜ。良かったら連れて行って会わせてやるよ。それに俺やお前の家族も、みんな来るぜ。」

「それなら先に行行って。私は後から行くわ。」

と女は言った。

俺はピクニック場のスタンドでシセロに会った。俺達は飲みながらバーベキューを食べ、丸太に腰掛けて、互いのガールフレンドの事を話し始めた。女の名前がベティだと俺が言うと、あいつも、

「俺の彼女もベティだ。」

と言う。

「どこに住んでるんだい？」

と聞くと、

MY SONGS

「伯母さんと従妹のいる街に住んでいて、2週間に1度しか会えないんだ。」

「俺は毎日会えるな。でも、2週間に一度、伯母さんと従妹のいる街へ出掛けて行って、3、4日泊まってくるんだ。」

「そうか…。判った。」

「ベティってのは、肌が薄くて、髪が長くて、身長は5フィートぐらいだ。」

「ああ。もう充分だ。」

俺達はずっと待ってたが、ベティは来なかった。やがて試合の時間になり、俺達は野球をしに行った。試合が終わり、俺達は勝って、ふと木の上を見上げると、そこにベティが座ってたんだ。俺は呼んだんだが、降りてこない。シセロは俺に言った。

「なあ、パートナーよ。もう止せよ。あの女のことを俺は、お前と同じぐらい良く知ってるよ。2週間に一度出掛けていくという、その伯母さんと従妹がつまり、俺なのさ。」

俺はすっかりしょげて家に帰った。するとベティがいつもと変わらぬ可愛い姿で待っていたんだ。

「どうしてシセロを知ってるって事を言わなかったんだ？」

と聞くと、

「だって私が愛しているのは、ビル、あなたですもの。シセロよりもあなたと過ごしている時間の方が長いわ。」

そうやって俺にキスして、細い腕を俺の首に回した。

「判ったよ、ベティ。俺を愛してるんだな。」

それから俺達は、シセロと一緒に食事をした。俺達は、今までベティがしたことや、その日の野球の試合の話はしなかった。その後、俺は、白人達のダンスへ演奏に行くことになり、シセロは俺の家に4日ほど泊まっていった。

このシセロとベティのことが忘れられず、俺はこの"Partnership Woman"という曲を作ったんだ。2人の男が互いにパートナーで、そして、同じ女と付き合っている時、この女のことを、パートナーシップ・ウーマンと呼ぶのさ。

これが俺がこの曲を書いたいきさつで、ベティはと言うと、俺とシセロの両方と付き合っていて、俺達はどちらも、ベティと寝て、一緒に食事をした。

ピクニックが終わり、シセロが帰って言った後、ベティがやって来てこう言った。

「シセロに会いに行ってきたでもいいかしら？」

「ああ、いいよ。でもあんまり長居してくんなよ。」

まあこれが、さんざん俺が語ってきた、ブルースの真実ってものだよ。

MY SONGS

HOUSE RENT STOMP

俺が作った曲に、"House Rent Stomp"というのがある。歌詞はなくて、6弦ギターの演奏だけの曲だ。この曲で俺がやったギターのピッキング、6つの弦のサウンドの鳴らし方はこんな風さ。ピッキングしながら上下させるんだ。1,2番目のE弦、G弦、これが悲しみだ。3,4番目のG弦とD弦、これが語りだ。そして、5,6番目のE弦とA弦、これが嘆きだ。こいつらをネックの上でスライドさせるんだよ。

話は1910年に戻るんだが、そのころの踊り方は、踊るというよりは、飛んだり跳ねたりという感じで、床をドスドス言わせていたよ。それでギターを弾く俺達も、そいつを真似た弾きかたを始めたんだ。2,3曲を、疲れて嫌になるまで、一晩中繰り返して演奏し、歌っていたよ。

ダンスの伴奏で、演奏が長時間に渡る時は、歌うのは止めて、「踊れ！踊れ！」と声を掛けるんだ。そしてそれに合わせて、みんな一晩中踊っていたよ。

歌とは違って、ギターの演奏はこんな事をするうちに弾きかたを憶えていった。こんな風にして、4,5種類のギターだけの演奏のスタイルを身につけたんだ。

1920年になって俺は、シカゴに移り住んだんだが、シカゴでは、うちに来て演奏してくれないかとよく頼まれた。故郷にいた頃から俺を知ってる人たちがいて、俺がブルースを演れるってことを知ってたんだ。俺が呼ばれて出掛けて行くと、フライドチキン、豚の足やモツなんかを、1皿25セントぐらいで売っているのさ。でもギターが弾けて歌えるやつは、全部タダでご馳走になることが出来た。それで毎週土曜の夜には、必ずのように出掛けて行って演奏していたよ。"Saturday Night Rub"なんて曲は、この時に作った曲で、俺達が演奏するときに、踊っている人たちの様子から付けたタイトルさ。男と女が組みになってフロアで踊るんだが、互いのお腹を揉み合いっこしながらストンプするのだ。俺達に向かって「例のやつをよろしく、兄貴！」なんて言ってたな。

そこで会った人達は、ほとんどが南部から来た人達で、より良い暮らしを求めて、シカゴに来ていたよ。でも、いざ田舎へ帰ろうと思うと、随分金が掛かったな。シカゴでは、ちょっとした家が借りられるぐらいに余裕が出来ると、土曜の夜にパーティーを開くような人も出てきた。そのパーティーを、ハウス・テント・パーティーと呼んで、人を集めては、チキン、豚の足、自家製ビール、モツ、ムーンシャイン・ウイスキーなんかを売のさ。ミュージシャンはもちろんタダで、可愛い女の子達と友達になるチャンスもあったぜ。

俺、ルイー、スリーピー・ジョン・エスティス、ショーティー・ジャクソンといった仲間達で、毎晩のようにハウス・レント・パーティーで演奏していた。それが、1924年頃のことだ。その頃に、レモン・ジェファーソン、ブラインド・ブレイク、ロニー・ジョンソン、ショーティー・ジョージ、ジム・ジャクソン、バーベキュー・ボブなんて連中と出会ったんだ。彼らはみんなレコードを吹き込んでいて、俺にもやってみてはどうだと誘って

MY SONGS

きたんだ。そうして、1925 年に吹き込んだのが、"House Rent Stomp"、"Big Bill Blues" で、1925 年の 8 月 14 日にリリースした。

実は 1924 年にもこれより早く、"Gonna Tear It Down"、"To Pail Blues"、"Dying Day Blues" の 3 曲を吹き込んでいたんだが、これらはリリースされず、後から別のアーティストが吹き込むことになり、少しも金にならなかったよ。

MY SONGS

=====

WHEN WILL I GET TO BE CALLED A MAN?

せっかくこの世に生まれてきたんだが
53 の歳になっても、半人前扱いさ
いつになったら一人前の男として扱ってもらえるのさ
93 まで待つのかい？

サムおじさんだけは俺を一人前に扱ってくれた
でも軍隊じゃ、" 兵隊の坊や " と呼ばれてばかり
いつになったら一人前の男として扱ってもらえるのさ
93 まで待つのかい？

船旅から帰ってきても一晩明けて、ボスに会えば
「坊主、オーバーオールを持って来い。」
いつになったら一人前の男として扱ってもらえるのさ
93 まで待つのかい？

レビーキャンプの仕事も、チェインギャングの仕事も同じだった
どれだけ仕事が出来たって、白人にとっては黒人は、いつも " 坊や " さ
いつになったら一人前の男として扱ってもらえるのさ
93 まで待つのかい？

あいつら、俺に、すこし知恵が足りないなんて言ってた
今じゃ少しは勉強もしたんだが、それでも " 坊や " は変わらずさ
いつになったら一人前の男として扱ってもらえるのさ
93 まで待つのかい？

(Folkway FA2326)

=====

これは 1928 年に書いた "When Will I Get To Be Called A Man?" という曲さ。
俺の知り合いの男で、俺が 10 才の頃からずっと、白人からは " 坊や " と呼ばれていた男
がいる。当時、その男が 30 だった。
俺が 1919 年に軍隊から帰って来たとき、男はすっかり歳を取っていて、その頃には、白
人の連中は、" マッカレイじいさん " と呼んでいたよ。だからこの男は、" 坊や " からいき

MY SONGS

なり、" じいさん " になってしまい、" 兄さん " なんて、一人前に呼ばれることがなかったのさ

これはたぶん今でも同じだろうな。ニグロはいつも、" 坊や " と呼ばれていて、それが子供を持つような年齢になっても変わらないんだ。年寄りの連中には、" 坊や " と呼ばれて嬉しがるような奴もいるんだろうが、50 歳までは " 坊や " なんて呼んでもらえたとしても、そのうち、" 坊や " と呼んでほしいはずが、" じいさん " と呼ばれるようになってしまっようよ。

俺としても、" 坊や " と呼ばれるのは悪くないな。自分の姉さんの子供からは、じいさんと呼ばれても何も言わないが、80 の爺さん、婆さんたちから、" じいさん " と呼ばれたくはねえよ。

MY SONGS

=====

WALKING DOWN THE LONESOME ROAD

一人さびしくこの道を歩いている
行くところもなく、休む部屋もない

この道の行く先は暗く
どう生きるべきか、考え込んでしまう

おふくろはこんな風に言っていたよ
屋根の無いところで寝るのは寂しいこと
そんな時は、この家に帰っておいで
父さんのベッドで寝かせてあげるわ

一人さびしく、この道を旅し続ける
家族はみな死んで身寄りもなく
俺は一人なのさ

(録音は、パリ、Vogue、1951年9月、シカゴ、Mercury、1951年11月)

=====

女の子を残して、その土地を離れなくちゃならなかったことがある。その子の名前はナティ。俺が働いていたキャンプのボスが、お前みたいにレビーキャンプで働いているような男には、ナティのような美人はもったいないと言い出し、俺はキャンプを追い出されることになった。

「女は置いていくんだぞ。2日だけ猶予をやろう。」

俺はナティに訳を話したんだが、ナティは俺の行くところなら何処でもついて行くと言う。俺は連れて行けないと言ったんだが、彼女は泣きながら言ったんだ。

「それならこうするわ。あなたが何処へ行ったか判るまで、私はここに残るわ。私はあなたを愛しているの。いつまでも私をここに引き止めておくことは出来ないわ。あなたを助けるために、私はそうするの。そして、上手くやって、もう一度あなたに会いに行くわ。」

俺はキャンプを離れ、そして、それっきり、俺はナティとは会うことがなかったよ。ナティは撃ち殺されたって、友達が教えてくれたのさ。

MY SONGS

=====

SATURDAY EVENING BLUES

土曜の夜遅く、太陽はとっくに沈ってしまった
俺はあの娘を探しに出掛けたが、あの娘はどこにもいない

風がうなり、雨が降り始めた
俺がどんなにあの娘を愛しているか
それを知ったらもう二度と、あの娘は俺を一人にしないだろう

あの娘の写真はいつも、鏡の前にある
あの娘のガウンはいつも、ベッドの上にある
神様、あの娘はまだ生きているのだろうか
それとも死んでしまったのだろうか

土曜の夜はいつもブルーな気分だ
昔は、俺とギターとワイフの3人で幸せだったのに

(Columbia 37314, Falkway FA2326, Verve MG V-3000-5 Vol.1)

=====

レビーキャンプで働いていたころ、街へ出られるのは週に1回ぐらいだった。
俺の彼女は街に住んでいて、彼女と一緒にいられるのは日曜の夜2時まで。俺は夜明けまでにキャンプに戻らなくちゃならなかった。そのために俺は、レビーから、ラバに乗って出掛けたのさ。

ある土曜日、街について彼女の家を訪ねるとあの娘はいない。写真もガウンもそのままだ。

どうやら別の男と旅立ったらしいのさ。隣の人が、新しいラバつながれていたことや、男と一緒にラバで出掛けたのを見たと言う。

土曜の夜は幸せだったんだけどな。3人そろっていて、俺があんたに歌を歌ってやったのさ。

MY SONGS

OLD MAN BLUES

俺の書いた曲で、"Old Man Blues"というのがある。1947年に吹き込んだ曲で、6つのパートに分かれている。この曲はとても良く売れた。年を取ったやつらには、この曲の意味が良くわかるだろうし、若い女の子だって、俺が歌うのを聴けばはっとするだろう。

” おじさんの恋人になるほうが
若い男の奴隷でいるよりずっといい
おじさんの財布にはお金がたんまり
ねだったものを何でも買ってくれる ”

それから、こんな歌詞も女の子達は気に入ってくれるだろう

” 若い男のポケットには小銭ばかり
おじさんとなら、たらふくディナーが食べられるのに
おじさんはきっと、約束を守ってくれる ”

「ニッケルと釘」という言い方は、若い連中が小銭をチャラつかせることを言ったんだ。ニッケルがアメリカの5セントのこと、釘は鉄で出来て、家を建てる時なんかには使うあれさ。若い連中は、他にもいろいろなものを、ポケットにチャラつかせているからね。

若い連中には、女の子に小遣いをあげるような余裕はなくて、ほとんどの奴がすっからかんだよ。女の子達はダンスに出掛けたり、若い男からチャホヤされるのが嬉しいんだが、チケット代、コートにドレスにハイヒールとなってくると、やっぱりおじさんの方がいいだろう。財布には5ドル、10ドル、20ドル、50ドル、そして100ドルと、全部、札で入ってるから、ポッケがチャラチャラいったりしないのさ。それから、おじさんは、持っている金も違うけど、仕事の種類も違って、安定したいい仕事をしている。つまり、同じ会社で30年働いていたりするので、景気が悪くなったときに、若い連中が真っ先に辞めさせられていっても、おじさん達は次の給料日も安心と言うわけだ。そして、女の子達は、おじさんのヒゲをさすり、アゴをくすぐって、ダディ、なんて甘い声で呼びかけ、小遣いをせしめることが出来る。これが若い男だったら大変だ。警察沙汰になっちゃう。

” おじさんの恋人になるほうが若い男の奴隷でいるよりずっといい ”

のところはどうだろう。若い男の奴隷とは、女の子達の言い方だ。若い男と結婚したりすると、朝7時には仕事に出なくちゃならないから、かみさんの方は5時半には起きて朝食

MY SONGS

と弁当の準備さ。旦那が夕方 6 時に帰ってくるとすれば、シャワーを浴び終わるまでには晩飯の支度、テーブルの準備をしておかなくちゃならない。飯を食ってる間に今度は、新しいシャツと靴下を準備する。ようやく日曜日になると、今度は旦那は、友達と遊びに出掛けたり、友達の葬式だなんだと出掛けてしまい、かみさんの方は家で留守番だ。そして、ようやく家に帰ってきたかと思うと、また晩飯の準備をし、月曜日には仕事が始まるから、作業着の準備をする。仕事から帰ってきてキスもしてくれないが、スリッパと新聞を持って、玄関まで出迎える。

そこへ行くと、おじさんの恋人ってのは全然違う。おじさんの若妻の場合、7 時に仕事に出掛けなくちゃいけなかったとしても、

「今朝は気分がよくないの、ハニー。」

と言えば、

「わかったよ、ベイビー、朝飯は自分で作るさ。」

そしておじさんは、奥さんの分まで朝飯を作って、ベッドまで持ってきてくれる。新聞の記事まで読んで聞かせてくれる。

「ダーリン、私、お医者さんに往診を頼んだほうがいいかしら？それに、調子が良くなるまで、ブラウンさんにお手伝いに来てもらった方が良いわ。駄目ならブラウンさんの息子でも良いわ。彼ならもう 19 才だから、水を汲んでもらったり、お使いに行ってもらうことができるもの。だって私、あなたにゆっくりしてもらいたいのよ。」

6 時に仕事から帰ってくると、旦那は奥さんにキスして起こしてやるのさ。

「今日はどうだった会？スイートハート。少しだけお菓子を買ってきたよ。」

当然これは、大きな箱詰めのキャンディさ。

「ブラウンさんとこの息子は、ちゃんとお手伝いをしてくれたかな。」

「彼はすばらしいわ。水や食事を持って来てくれたり、何でもしてくれる。アイスクリームまで買ってしてくれたのよ。」

「あれはいい子だな。きっと立派な大人になるよ。」

「あら、あの子はもう大人よ。一人ですっかり何でも出来るわ。料理も皿洗いも掃除も床ふきも車の運転も。何でも出来て、どれも立派にこなすわ。」

次の朝起きてみると、奥さんはこんなことを言い出す。

「ダーリン、車が欲しいの。私、ブラウンさんと釣りに行くつもりなのよ。」

「でも誰が運転するんだい？」

「ブラウンさんの息子よ。」

「ねえ、スイートハート。ブラウンさんに頼んで、車の運転を教えてもらったらどうだい。」

それで奥さんの方も運転を覚えて、旦那はスペアキーを作ってやることになる。ある日、旦那が仕事から帰ってくると、奥さんはまだ帰ってきていない。旦那は自分と奥さんの分、晩飯の準備をするんだ。ようやく奥さんが帰ってきてキスしてやると、奥さんは旦那のひざの上に脚を投げ出して靴を脱ぎ、スリッパに履き替える。旦那は奥さんに冷たい紅茶を

MY SONGS

入れてきてやるんだが、これにはアルコールが入っていない。だって奥さんはもう、しこたま飲んだ後だからね。

「スイートハート、お腹は空いたかい？」

「少しね。少しだけよ。」

それで旦那は、ハムを自分で焼いて、奥さんと、ブラウンさんの息子にサンドイッチを作ってやるのさ。晩飯が終わると旦那は、ブラウンさんの息子にこう言うんだ。

「今夜は泊まっていったらどうだい？」

「そうよ、そうしなさいよ。そうすれば明日の朝、早くから釣りに出掛けられるわ。早朝の方が、魚ってたくさん釣れるんでしょ、ダーリン。」

旦那は

「そうだな。」

とだけ答える。

次の朝、旦那は早くに起きて、3人分の朝食を作り、ダイニングテーブルに持って行く。旦那が奥さんのコーヒーを注ぎ、奥さんはブラウンさんの息子にコーヒーを注ぐ。奥さんが、

「お料理をありがとう。」

と言うと、旦那は笑って、

「いい奥さんだな。」

と答える。

「ねえ、ダーリン。今日は車であなたを仕事に送っていくわ。そして、釣りが終わったら、仕事場に電話をするわ。仕事が終わる頃にあなたを迎えに行って、家まで乗せてきてあげる。」

「わかったよ、スイートハート。」

ところが奥さんからの電話はなく、駐車場には車もない。それで仕方なく旦那は、タクシーかバスで帰ることになる。

家に着くと、奥さんは旦那のベッドで寝ていて、ブラウンさんの息子は、奥さんのベッドで寝ている。旦那は紅茶とサンドイッチを3人分作って、ベッドの所へ行くと、ブラウンさんの息子と奥さんが起きてきた。

「あなたバーベキューを食べる？」

「ああ、食べたいね。」

「それなら今から買ってくるわ。今日行った所に、いいお店があったのよ。戻ってくるまで少し休んでいてね。」

奥さんも気付いているんだろうが、旦那は眠れないのだった。ブラウンさんの息子は19才で、自分は55才。もう2ヶ月もの間、キスだけでアレはさせてくれない。奥さんはブラウンさんの息子と出掛けて、一体何をしているんだろう。本当に出掛けるときのお供だけなんだろうか。一体ブラウンさんの息子のどこがいいんだ。長身でハンサムで巻き毛で....

MY SONGS

旦那は真実を確かめようと思うのだ。たしか、こんな事を言っていた友達がいた。妻について何かを確かめたければ、自分の目で確かめることだ。それで旦那は早速それを実行する。旦那が勤めている仕事場が壊れて、ボスは修理には午前中いっぱいかかるという。そんな事があって、旦那が家に戻ってくるとすると、奥さんとブラウンさんの息子は、同じベッドで一緒に寝ているではないか。

これがまあ、若い男の奴隷よりは、おじさんの恋人の方がマシ、という話だ。実はこの話も実話で、今、話に出てきたおじさんというのが、ウィリアム・リー・コルニー・ブルーンジー、つまりこのピック・ビルのことなのさ。

MY SONGS

=====

LOOKING UP AT DOWN

俺は年寄りのガチョウみたいに
岡の上に立ち尽くして
ただガアガアと鳴くだけだ
なあ神様、ビックビルは必死で生きてるのさ

俺はまるで、ヨブの七面鳥
ただグーグーと鳴くことしか出来ない。
俺は貧乏で、フェンスにしがみついてグーグー鳴くだけさ
いつかこの街を出て成功してやる
ああ神様、俺は地面に這いつくばったままだ
地面に這いつくばったまま、空を見上げている

炭鉱で働いている連中が俺を見下ろしている
俺は地面に這いつくばって
これ以上どうしようもないほど落ちぶれた
俺は地面に這いつくばって
どいつもこいつも、俺を見下ろしている

俺が手に入れたものはみな
6月の雪のようにどこかへ消え去った
もしもう一度チャンスがあるのなら
俺はあの月までも登りつめてやる
この街を出て成功するんだ
でも神様、俺は地面に這いつくばったままだ
地面に這いつくばったまま、空を見上げている

(Okeh 05698, Conqueror 9761, French Columbia BF384)

=====

1916年のこと、2月に綿ととうもろこしを植えるため畑を耕した。3月にはとうもろこしを植え、4月には綿、いも、キャベツ、玉ねぎ、かぶ、エンドウ、スイカ、その他色々なものを植えた。それ以外にも俺は、200羽の若鶏、25匹のブタ、12頭の子牛、2等のラバの面倒を見ていた。綿が50エーカー、とうもろこしが25エーカー、エンドウが20エーカー

ーあったよ。

これだけの農場をやって家族を養うのに、俺は 500 ドルの借金をして、ラバ、牛、ブタに食わせる餌は、納屋にしまってあった。

その年、植えた作物はどれもよく育っていたが、5 月の 1 日から 8 月までまったく雨が降らず、(それを俺達は干ばつと呼んでいるんだが)すべての作物は結局、枯れてしまった。若鶏は首からふにゃふにゃになって死んでしまい、ブタは目を真っ赤にして死んでしまった。牛は角がスカスカになり、ほとんどが死んでしまった。その上、農場の水場が干上がった上、太陽の日差し熱くなり、それで納屋が火事になってしまった。これで 3 頭のラバを一緒に失ってしまい、ほし草も作物の種もすべて燃えてしまったんだ。のこったラバと牛に、草や水を食わせてやる場所も無くなった。俺は、はるばる 5 マイルも出掛けて、草原の草を刈って持って帰ってはラバと牛に食わせてやり、それから俺自身は、炭鉱へ仕事に出掛けていったのさ。

俺の兄弟のうち 2 人は、アーカンソーの鉱山へ働きに行き、もう 2 人はテネシーの炭坑へ行った。親父が借金していた相手が 500 ドルを返せと言って来て、家にあるものはすべて差し押さえられちゃった。それで俺たち兄弟は、1 日 1 ドル、2 食付いて泊り込みの、この仕事をやる事になったのさ。

俺たちが働いていると、白人がやってきて、1 ドルを渡してくれる。食事は、昼と晩。俺は毎日、朝 5 時から昼 12 時まで働き、それからようやく何かを食わせてもらえる。いつも同じ靴、オーバーオール、をはいて、6 月から 11 月まで下着も替えたことがない。夜寝る時も服を脱いだりはしないんだ。みんな一緒に眠り、ベルが鳴ると起きて、炭坑に降りる。

俺のいた炭坑には 50 人ほど働いていた。炭坑には、みんなが"ピット"と呼ぶ場所がある。ボスが俺にピットに入るようにと言う。ここは坑道よりもさらに、20 フィートほど深くなっていて、仲間がみんな俺を見下ろすことになる。これが"Looking Up At Down"を書いたきっかけさ。

俺のポケットには 1 ペニーの金もなく、疲れてヘトヘトだった。どうにか喋れるぐらいで、すっかり痩せてしまったよ。囲いに寄りかかってガアガア鳴いたと言うヨブの七面鳥とは、このことを歌ったんだ。ボスがやってきて、飯を食いに戻って寝ていい、と言うと、俺たちがすることはまず、その場に座り込んで炭の山に持たれて休むことさ。そうしないと、飯を食いに戻る元気も出ないのさ。

食事は 5 ヶ月の間ずっと、豆と塩漬けの肉ばかりだった。1 ヶ月もすると豆を食うのが嫌に鳴ってきたが、これしか食うものが無えんだ。まあこうして俺は、豆や脂肪肉やとうもろこしパンを食べるようになったのさ。

俺たちが飯を食ったり寝たりする小さな小屋は岡の上にあって、これも"Looking Up At Down"の歌詞に出てくる。食事の時間になると俺たちは、互いに引っかかり合い、喧嘩したりして、食べるものを争ったんだ。生きるために、貧乏なビックビルは、引っかかりや

MY SONGS

喧嘩をしたのさ。

この曲は 1939 年に、ジョシュア・オールシマーのピアノ、フレッド・ウィリアムズのドラムで吹き込んだよ。

MY SONGS

=====

BLACK, BROWN AND WHITE

この歌は本当にあった話
あんたが黒人だったとして、生活のために働かなくちゃならない
あいつら、あんたに何て言うだろう

白人だったらすべてOK
褐色なら微妙なところ
でも黒人だったら最後
黒ん坊はとっとと失せろ

ある晩俺は楽しそうな連中を見かける
ビールにワインを売っている
でも俺には売ってもらえないだろう

白人だったらすべてOK
褐色なら微妙なところ
でも黒人だったら最後
黒ん坊はとっとと失せろ

俺の隣のやつは、並んで働いて同じ仕事
ところが給料は
やつは時給1ドル
俺は50セント

白人だったらすべてOK
褐色なら微妙なところ
でも黒人だったら最後
黒ん坊はとっとと失せろ

職業相談所へ行って
番号を呼ばれるのを待っている
みんなは順に呼ばれたけれど
俺は最後まで呼ばれない

MY SONGS

白人だったらすべてOK
褐色なら微妙なところ
でも黒人だったら最後
黒ん坊はとっとと失せろ

美しい栄光のために俺だって役に立ってきた
俺は鋤とくわを持って戦った
俺はこう言って欲しいんだ
ジムクローの老人みたいだってね

白人だったらすべてOK
褐色なら微妙なところ
でも黒人だったら最後
黒ん坊はとっとと失せろ

(以下の歌詞は録音には入っていないが、演奏する際には、ビックビルがいつも加えていたもの)

俺たちはアメリカ合衆国の建国に貢献してきた
俺たちも戦ってきた
あんた達にも判るだろう
黒人達が成し遂げたことを

(Vogue 134, Emarcy-Mercury MG36137, Folkway FG3586)

=====

俺がこの"Black, Brown And White"を録音したのは、1945年のことだ。俺は、RCA、ビクターコロムビア、デッカ、それから他にもレコード会社を回ったが、最初はどこもレコードにしてくれなかった。面白そうだから聴かせてくれとは言うが、最後は駄目だって言うんだ。

「どうしてこんな曲を出したいんですか？誰も買いませんよ。」

とあいつらは言ったよ。

「どこがいけないんですかね。教えてもらえないですか？この歌に出てくるような、ニグロに対する仕事の扱いは、南でも北でも東でも西でも、この国のどこへ行っても事実だったこと、あんたも知ってるでしょ。」

「ええ、でもそこが良くないんです。」

MY SONGS

とあいつらは言った。

「あなたがこの曲を書いて、どこかの会社がレコードにする。するとこのレコードの意味が問われる訳ですよ。あなた、自分の歌の歌詞の意味が判りますか？あなたの歌詞は過激なので、受け入れられないと思うんですよ。」

それでも俺は、どうにかこの曲をレコードにしたいと思っていた。1951年にフランスに行った時、ユーグ・パナシェ氏にこの事を伝え、すぐに演奏してみてくださいと言う。

「気に入ったよ。レコーディングしよう。」

「でも6年も頑張ってきたんだが、どの会社もレコードを出してはくれなかったですよ。」

「フランスにいる間にレコーディングしようじゃないか。」

と彼は言った。

その年、9月21日にはレコーディングし、すぐリリースされたよ。俺は録音をアメリカへ持って帰り、知り合いに聴かせてやったのさ。

「演奏はいいね。でも歌詞はどうかね。」

ある日、マーキュリーレコードから手紙が来て、8曲ほどレコーディングしましょうと誘いを受けた。それが1952年の1月で、その時この"Black, Brown And White"を録音したが、やはりこれはリリースされなかった。もちろんマーキュリーでレコーディングまで辿り着いたのは、ジョン・ハモンド氏のおかげだろうな。1946年に俺は彼に、この曲を聴かせたことがあって、彼と、アラン・ローマックスは、この曲を気に入ってくれたんだ。

「ビル、いい曲じゃないか。どうしてレコーディングしないのさ。」

「ほとんどすべてのレコード会社を当たっては見たが、どこも駄目だって言うんだよ。」

「そりゃそうだろう。」

と彼は笑いながら言った。こんな訳で、アメリカでもどうにか、録音までは出来たのさ。

俺もこの曲は悪くないと思うが、確かに、ニグロにとって見ると、"黒ん坊はとっとと失せろ"の所を聴くのは、少し嫌かもしれない。俺は、アメリカに住んでいる俺達自身、黒いと呼ばれることに嫌気がさしているニグロ達を責めるつもりなんてない。俺はただ、この国のニグロが働くときの本当の様子を語りたかっただけなんだ。

=====

昔、職業相談所へ行ったときの事、まずは番号をもらうために並び、それから自分の番号が呼ばれるまで待つんだが、俺が並んでから、すでに5時間も経っていた。50人ほど並んでいて、その中にニグロは、俺ともう一人女性がいたよ。

白人の男女がみんな呼ばれてしまった後、マネージャーがやって来て、俺とニグロの女にこう言った。

「悪いんだが、今日は、ニグロ相手の求人は一つもないんだ。次、いつあるかも判らない。」

MY SONGS

女は立ち去って行こうとしたので、俺は声を掛けた。

「タクシーをつかまえないか。」

「あたし、タクシー代なんて持ってないの。あたし、最後の 7 セントを、ここに来るために使っちゃったわ。あたし、新聞で 50 人の女性を雇うってのを見て、しかも 15 人しか並んでなかったから、絶対仕事にありつけると思ったのよ。それで並んでたのよ。」

「ニグロじゃしょうがねえよ。」

「でも私は女なのよ。5 人の子供がいるわ。旦那は 1918 年に軍隊に取られて、毒ガスで死んだわ。」

「あんたも俺もニグロで黒いのさ。言ってる事が判るかい？」

「それは南部の話でしょ。北部は違うんじゃないの。」

「あんた何処に住んでるんだい？」

「シカゴよ。」

「ニューヨークだって同じさ。アメリカ中どこでも、スープは同じなのさ。皿への盛り付けが少し違うくらいだよ。」

=====

この歌で俺は、ニグロに ” 帰れ ” と言ってるつもりはないよ。ニグロに向かって ” 帰れ ” と言っている連中に、その事を判らせてやりたいだけなんだ。この俺、ビックビルは、すごすごと引き下がったりはしないぜ。俺はブルースシンガーで、俺はこの歌を歌って見せるのさ。

=====

この歌の歌詞の一部は、俺と一緒に働いていた白人の話さ。

その頃俺は、鑄造所で働いていた。俺はそこで 7 年も型作りの仕事をやっていて、砂のきり方、模様に入れ方など、若い連中に、型の作り方を教えてやっていたんだ。俺は一通りの仕事がこなせたからね。新しい模様を入れる仕事が入ると、ボスは必ず俺を呼んだよ。それで俺は、注文の型を仕上げてやったのさ。

ある日、ボスが俺を事務所に呼んでこう言った。

「ビル、こいつを連れて行って、型作りを教えてやってくれ。」

それから俺は、この男に、型作りを教えながら 1 年ほど一緒に働いた。男はある日俺に、どこに住んでいるのかと尋ね、俺の家に一緒に来ることになった。俺たちはいつも、給料日には一緒に飲みに行っていたんだが、その日はウイスキーを一本買って、家で飲むことにしたんだ。俺達は一緒に飯を食った後、飲み始めた。男は酔っ払うと、俺のことを馬鹿にし始めたんだ。

「馬鹿ってどういうことさ。」

MY SONGS

「つまり、こうさ。」

男は給料の小切手をテーブルの上に置いた。

「これだよ。お前のも見せてみなよ。」

俺は自分のをテーブルに並べた。

「あんたのは 50 ドル、俺のは 100 ドル。これでも自分が馬鹿だと思わないかい？ あんたが教えてくれた仕事を、俺はすべて覚えて、あんたの 2 倍も仕事をしているのさ。あんたは 7 年も働いて、少しも進歩しないんだな。」

「いや、そんな事はねえよ。7 年前に仕事を始めたときは、週に 25 ドルしか貰えなかったからな。」

男は笑った。

「俺は 1 年前に始めた時から、週に 55 ドル貰ってたぜ。あんたから型作りを教えてもらって、週 100 ドルまで上がったのさ。自分が馬鹿だってわかったかい。型作りばかり考えていても、いい仕事は出来ないのさ。」

この男はポーランド人で、アメリカに来てから随分経っていたようだった。翌年、この男は俺の上司になり、不景気になったときには、真っ先にニグロを辞めさせた。”もしあんたが黒人なら...” の歌詞の意味はこういう事なのさ。世界中どこでも、こういう話は、大体似たようなもんだよ。

=====

ウイスキー、ビール、ワインなど、色々な酒を売っているバーに飲みに行った時のこと、俺は 3 人の白人と一緒に、ウイスキーを 4 杯頼んで飲んだのさ。すると、バーテンダーは、俺が使ったグラスをすぐに割ってしまったんだ。俺が一杯飲み干す度に、バーテンダーは、そのグラスを割るのさ。一緒にいた男が

「もっとグラスを割らせようぜ。」

といって、さらに注文すると、それでも男はグラスを割り続けた。それで一人が、

「ビル、シャンペンを飲もうぜ。あのグラスは高価だが、あいつがそれを割るかどうか見てみよう。」

と言った。

それでシャンペンを注文して飲み終わると、バーテンダーはグラスを 3 つも割ってしまった。とうとう支配人が怒って出てきて、

「グラスを割るのを止めろ！」

と怒鳴った。バーテンダーは、

「ニグロの使ったグラスは割るようにと、あなたが言ったから、そうしただけなんです。」と答えた。

MY SONGS

そこにいた皆は大笑いしたが、もう俺にはそれ以上酒を売ってくれなかったよ。それで俺達は店を出た。あのグラス代は俺達が払った金よりもずっと高かっただろうよ。

=====

確かに俺も、この"Black, Brown And White"という曲は、ニグロ達もあまり気に入らないんじゃないかと思うね。だってみんな、ニグロには生まれたくなかった、他の何かに生まれたかったと、そう思っているんだからね。それでみんな、髪型を整え、服装、話し方、振る舞いに気をつけて、アメリカの白人みたいにしようとしているのさ。

白人だったら俺も、100万ドルぐらい稼げるのかもしれないが、俺の場合、銀行に7000ドル、給料が週に60ドルだ。それで俺は、6000ドルでキャディラックを買い、110ドルでスーツを揃え、55ドルの帽子をかぶり、40ドルの靴を買った。どれも、身なりを白人のように見せるために、金を使ったのさ。肌の色の薄い、とびきりの美人のニグロの女を捕まえ、髪を縮れをストレートに直し、今までは行きたくなかった場所へと出掛けていった。すると、

「ニグロのお客さんは、ご利用いただけません。」

と言いやがる。

俺は頭に來たんだ。髪は白人のようにストレートにし、110ドルものスーツを着て、キャディラックに乗り、白人みたいに髪がまっすぐ、肌の薄い女を連れて行ったのに、どうしてだ？

どうして俺を入れてくれないんだ。俺はアメリカのドルを持っているし、税金も払っている。俺が黒人だからなのか？そうさ。ルイ・アームストロングが歌った、"Back And Blue"という曲の歌詞を思い出さなくちゃいけない。

” 顔だけは隠すわけには行かないんだ ”

色々な場所で、色々な人種の人々と会っていると、みんな自分の生まれた故郷を愛していることが判る。しかし、俺はどうだろうか。誰かに聞かれてミシシッピだと答えるとき、心の中には怒りが湧き上がり、これ以上話したくないと思うんだ。俺の生まれは貧乏で、子供の頃から白人に仕えて働いてきた。俺達の多くは、苛められ、虐待され、殴られた。なにかいい物を持っていて、例えば美人の奥さんとか、一番いい馬を白人に目を付けられると、もうそれを諦めるしかない。俺が自分の農場で育てたものはすべて、白人が勝手に値を付け、自分が払いたくなくて払って持って行っちゃう。北部へ来て、俺は白人のやつらみたいになろうとしたんだ。白人の女と付き合い、でかい車を買った。金がなくてガソリンを入れられないときには、時計や指輪を質に入れて金にした。だからニグロの連中は、ビックビルが白人の女を乗せて車を走らせているのを見ただろうな。白人の女と付き合いだっ

MY SONGS

たのさ。でも乱暴を振るったことは一度も無いよ。俺は白人みたいになりたかったのさ。家に帰れば、かみさんもいたさ。だけど南部の白人は、白人のかみさんもしれば、黒人の女とも付き合い、両方に子供を生ませていた。それでも、どこへ出掛けていっても、誰からも文句を言われず、みんなから尊敬してもらえる。俺はただ、こういう連中と同じようにしたかっただけなんだ。

白人とニグロの混血だと、黒人のニグロよりは随分マシな扱いだった。俺は、髪をストレートにし、話し方や歩き方に気をつけて白人みたいにし、少しは追い出されなくなった。しかし、外国へ行ってみると、この広い世界では、黒人というのは俺たちだけじゃない事が判った。こういう外国の黒人達は、互いに尊敬し、愛し合っている。そこが俺たちとは違うところだった。

アメリカのニグロ達は、互いに馬鹿にし合っている。もしあんたが、アメリカの北部とは違う場所の出身で、縮れ毛で肌が黒いとする。髪がまっすぐで街の暮らしを知っている北部のニグロの連中は、あんたに身のこなしでも教えてくれればいいのが、代わりに、ミシシッピのニグロと言って馬鹿にする。自分達の毛がストレートなその理由は、実は、母親が父親をだまして、白人の男との間に出来た子供だからなんて事は、おくびにも出さないんだ。

俺が北部に来たのは、なにも白人の女と付き合うためだけじゃねえし、ニグロの女に捨てられて、追っかけて来たわけでもない。その時の俺の女は、もう白人の男を捕まえていたんだ。俺が北部へ来たのは、白人の女と並んで外を歩けるからさ。でも白人の男達は、俺が白人の女と一緒にいるのを見ると、俺を殺そうとさえする。ニグロの女なら良いけど、白人の女は駄目だって？白人の男は、白人の女とも、黒人の女とも付き合う。それで俺は北部へ来て、そいつをやってみたんだ。白人がやる事すべてを、俺もやってやろうとしたんだ。でも家に帰って鏡を見れば、自分がミシシッピの出身だって事は、すぐに判るよ。次の朝、起きてみれば、髪は毛はすっかり元通りで、またストレートに直さなくちゃならない。どこへ出掛けるときも、白人の女と一緒に出掛ける。そうすれば、女が、食事や飲み物を俺の分まで買ってきてくれる。ニグロはお断りだと言われても、俺はでかい、綺麗な車の中で座って待ってればいいんだ。金さえ払えば、女が何でも買ってきてくれる。俺はそれで満足さ。女が戻ってきて、10ドル持っていったけど、3ドルで十分だったわ、と言う。それで俺は

「OK、ダーリン。公園でもぐるっと回ってこよう。」

俺は、黒人だと言って追っ払われないために、何でもしたよ。すべてを変えたんだ。ギターの弾き方を変え、歌い方も変えた。白人の女を見つけて、いい服を着て、でかい車に乗り、髪をストレートにした。歩き方、話し方も変えた。でも、顔は隠せないのさ。アメリカでは黒人である限り、黒ん坊は出て行け、なのさ。

実際、白人の女も、白い犬も、赤い車の、何の役にも立たなかった。俺が思うに、お互いに愛し合うって事が、一番大切な事さ。本当にそうありたいよ。

MY SONGS

=====

WHEN I'VE BEEN DRINKING

もう金なんて必要ない、俺の手は幸運の油にまみれている
もう女なんて必要ない、砂漠の蜃気楼のような
俺はいつだって飲んだくれていて、飲んだくれて
家まで辿り着いたなら、横にして少し休ませてくれ

俺が探していたのは、まだ誰ともキスしたことも無いようなウブな女
そういう女となら、ゲンコツ無しで、仲良くやっていけそうさ
俺はいつだって飲んだくれていて、飲んだくれて
家まで辿り着いたなら、横にして少し休ませてくれ

12の時俺は、仕事を見つけて一人立ちしたいと思った
どうにか今日も晩飯にありついて、辛かった一日も終わりさ
俺はいつだって飲んだくれていて、飲んだくれて
家まで辿り着いたなら、横にして少し休ませてくれ

誰かこのベッドの上で、俺を優しく飼い慣らしてくれないか
そして、姉ちゃん、優しく話しかけながら、髪をとかしてくれないか
俺はいつだって飲んだくれていて、飲んだくれて
家まで辿り着いたなら、横にして少し休ませてくれ

それから俺を車椅子に座らせて
何処かへ連れ出してほしい、何処だっていいんだ、このビックビルにとっては
俺はいつだって飲んだくれていて、飲んだくれて
家まで辿り着いたなら、横にして少し休ませてくれ

(Okeh 06303, Conqueror 9931, Columbia 37474, Columbia WL111)

=====

ずっと前の話だが、1900年に俺のおじさんが、"Keep On Drinking To Drive My Blues Away"という曲を歌っていたのを憶えている。

俺のお袋が出掛けて戻ってくると、おじさんがちょうどこの歌を歌っている所だった。
お袋は酒を飲んだといって、えらい剣幕でおじさんに怒鳴っていた。

俺の親父とおじさんは、二人とも酒飲みだったよ。二人は酒のことを、"山の露"と呼ん

MY SONGS

でいて、山に行って汲んで来るんだと言っていた。岡を越えて向こう側へ行き、ジョッキを満たし、切り株の上に代金を置いて 10 分もすれば戻ってくると言う。ジョッキにはいっぱい の ” 山の露 ” が満たされ、その分、切り株の上の金もどんどん増えていく。そんな事が本当にあれば、の話だがね。

MY SONGS

=====

WPA RAG

1934 年に俺は、"WPA Rag"という曲を書いた。

"俺はこの小さな街の真ん中で、大声で叫びたい気分だ
俺達はサイコロを転がして、勝ち点を稼いだのさ"

の部分は、昔のレビーキャンプでの話しさ。

その頃、俺達はいつもサイコロを転がしていた。6 や 4 で止めちまう奴もいるが、10 で得点になるんだ。それで俺達は

「6 や 4 の奴ら、さあどうだ。」

と煽ってやったもんさ。

"女だったら良かったが、男連中は金を払え
金のない奴はとっとと帰れ"

俺がこの"WPA Rag"で歌っている、"男連中"というのは、男だけのパーティーという意味だ。やつらは男だけのパーティーと呼んでいたよ。それでつまり、俺がこの歌を歌うときってのは、この男達に、金を払え、金の無い奴は帰れ、ってそういう意味なのさ。

その頃は、男女を問わず、誰でも WPA に行かされた。当時は、WPA ぐらいしか仕事が無かったのさ。でも、そんな状況が随分続いていたよ。ルイ・アームストロングは、"WPA"という曲を吹き込み、ケイシー・ビルと、ピーウィー・ウィートストローは、"WPA Blues"という曲を吹き込んだ。その頃は何でも、WPA に引っ掛ければ大当たりする時代だった。だってみんなが WPA に関わって暮らしていたんだからね。

WPA、PWA、CWA、これらはどれも、男女を問わずに働けるプロジェクトだった。俺と俺のマネージャも WPA で働いていたよ。その頃はレコーディングの仕事は全然無かったんだ。俺達は 1918 年に軍隊で働いた事があり、経験者ということで、WPA でもすぐに仕事が見つかった。その頃はベテランの経験者は、WPA ですぐに雇ってくれたよ。

そんな頃の話だが、俺は WPA で働いていて、シカゴの 47 番通りでコンクリートを敷き詰める仕事をしていた。それである日、晩飯を食っていると、男の子が一人やって来て、
「ピックビル、今日、あんたのバンドのメンフィス・ファイブみたいなレコードがかかっているのを聴いたぜ。」

「そりゃ何処だい。」

「今度、仕事が終わった後に連れて行ってやるよ。」

「わかったぜ。」

MY SONGS

それでこの坊主と一緒にしてみると、確かに"WPA RAG"がかかっている。そいつは、WPA で仕事を見つける 5 ヶ月ほど前にレコーディングしたものだった。WPA 自体は、俺がそこで働くようになる 1 年ぐらい前から始まっていた。

WPA には、" ビック・ジョージ " というあだ名のボスがいて、つつ立っていたり、シャベルに寄りかかって休んでいたりと、

「おい、そいつ、シャベルを動かせ！疲れたなら、事務所に戻って給料をもらってとっとと帰れ！明日出直して来い！」

なんて、怒鳴ってたな。

それで俺たちも、シャベルに寄りかかっている奴を見つけては、からかっていじめていた。そんな事もあって、WPA の仕事は楽しかったな。

俺はどこでも働いたよ。音楽を演奏したり、録音することも続けてはいたが、それとは別に、いつも何かの仕事をしていたよ。音楽では家族を養うことが出来なかったからね。昼は働き、夜は演奏する、というような暮らしを続けていたんだ。でもまあ、働くことも、そんなに嫌でもなかったよ。

友達で 2、3 人、暑さにやられて病気になっている奴もいたが、俺は平気だった。ミシシッピの農場から出てきてから日も浅かったし、鑄造工場で働いて、熱い鉄を扱ったこともあり、暑さはへっちゃらだった。

ある日、ビック・ジョージがやって来て俺に言ったんだ。

「ビックビル、お前、身長はどれだけある？」

「6 フィートと 1.5 インチさ。」

「お前にぴったりの仕事があるんだが、どうかな。」

「なんの仕事さ、ジョージ。」

「深さ 6 フィート、幅 4 フィート、長さ 5 フィートの穴を掘りたいんだ。お前ならぴったりだと思うんだが、やってくれるよな。」

俺はみんなの前でそんな風にボスから言われ、いい気になっていたんだが、実は俺は馬鹿にされていたんだよ。

奴らはみんな、俺がヘビが嫌いだって知ってたんだ。次の日俺は、朝 8 時から早速、穴を掘り始めた。やつらがみんな笑ってやがるのが聞こえてきたんだけどな。昼飯の休憩で、ボスが俺に、

「その調子なら、3 時までには終わりそうだな。」

と言った。

だいたい 6 フィートほどの深さまで掘った時、背中と足に、妙なものが触るのを感じた。それで腰を伸ばしてみると、指ぐらいの太さで、2 フィートぐらいのヘビが 5 匹、そこにいたのさ。

それで、気付いてみると俺は、家のベッドで寝ていて、

「一体全体、どういう訳？なんで家にヘビなんか連れてくるのよ。」

MY SONGS

とかみさんが言うのさ。

見ると、まだ 1 匹のヘビが俺の目の前にぶら下がっている。俺はヘビが頭に落ちてくるのが怖くて、早速逃げ出しちまったよ。

次の日、仕事に出掛けてみると、

「どうして帰っちまったんだ。」

とビック・ジョージが言う。

「定時前だったぞ。」

「そうでしたかね。」

「ああそうさ。だれか家族に病気でも？」

「ええ、そうです。」

「そりゃ、誰だい？」

「私が。」

「お前さんがどうかしたのか？」

「あんなにたくさんのヘビを一度に見たのは、初めてだったんですよ。そうでしょ、ジョージ。」

奴は大笑いして何処かへ行ってしまったよ。それから俺がジョージのところへ、何度も話しに言ったんだが、いつも笑って何処かへ行ってしまうんだよ。ようやく 5 回目ぐらいに、

「事務所へ来いよ。」

とそう言ったよ。

そこには所長さんがいたんだが、こいつも俺を見ると、涙を流して大笑いしていた。笑いをこらえながら、どうにか、

「今日はもういいから、明日また来い。」

と言った。

友達の誰かが、俺のかみさんに、電話でこの話を伝えたらしかった。所長さんが「家に帰れ」と言ったのは、どうやら俺は首になったという意味らしい。家に帰ってみると、かみさんも子供も、電話で聞いたといって大笑いしていやがる。それから 5 日間、俺は毎日仕事には出たが、いつも、何もしないで帰らされた。

しばらくたってから、ジョージはボスに言われて俺の掘った穴にヘビを入れたんだと聞いた。みんなは俺が、どんな風にして穴から這い上がったか、どんなに早く走っていたか、しかもその時、ブルースを口ずさんでいた、とかいう話をして盛り上がっていた。俺も一緒にそれを聞いて笑っていたよ。それからまた、例の穴を見に行ってみると、埋め戻そうとした跡や、逃げようとした跡が、12 フィートも離れたところまで残っていて、それを見てまた大笑いした。

これが"WPA Rag"についての話さ。"WPA Blues"の方は、ケイシー・ビルが録音するとき、俺も一緒に演奏した。こいつの本当の名前は、ウィリアム・エルドンで、アーカンソ

MY SONGS

ーのパインブルックで 1909 年の 7 月 10 日に生まれた。今はカリフォルニアに住んでいる
と思うよ。

MY SONGS

=====

JUST A DREAM

そいつは夢だった、ただの夢だった
目を覚ましてみれば、そこには何も無かったんだ

俺は天使と一緒に掛けて、楽しい時を過ごした
俺は満たされた気持ちで、心配することなど何も無かった
(俺は天に昇り、王座に腰掛ける
天使達がやってきて、周りで遊び戯れる)
でもそいつは夢だった、ただの夢だった
目が覚めてみれば、天使なんて何処にもいやしない

俺は街を取り仕切り、馬を乗り回す
俺は大金を稼ぎ、何に使おうかと考えている
(俺は 100 万ドルもっていて、マーメイドのような美人をかみさんにする
俺はサイコロを転がして、ブルックリン・ブリッジを手に入れた)
でもそいつは夢だった、ただの夢だった
目が覚めてみれば、1 ペニーの金もありゃしない

俺は結婚して家族が出来る
10 人の子供がいて、みな俺にそっくりさ
でもそいつは夢だった、ただの夢だった
目が覚めてみれば、子供なんて一人もいやしない

俺はホワイトハウスにいて、大統領の椅子に座っている
客がやって来て、「ビル、あなたに会えて光栄です。」
と俺の手を握り締める
でもそいつは夢だった、ただの夢だった
目が覚めてみれば、座る椅子一つありゃしない

(注：ビッグ・ビルは少なくとも3つの異なるバージョンを録音している。ここに紹介したのはそのうち有名な2つのバージョンのもの。ジョシュア・オールシマーのピアノで、1939年2月の録音(Vocalion 04706, Columbia 30153)と、1939年9月の録音(Vocalion 05259)である。ビッグ・ビルは亡くなる直前、この曲を再度録音している。(Verve MGV-3000-5 Vol.5))

MY SONGS

=====

ある晩、俺が、とあるホームパーティーで演奏していた時のこと、一人の女の子が来ていた。演奏の合間、キッチンに隠れてムーンシャイン・ウイスキーを飲むときに、その娘に話しかけた。

「演奏が終わったら、俺の家に遊びに来ないか。」

「誰の家へ遊びに行くって？」

「俺の家へ遊びに来ないかって言ってるのさ。」

「それはただの夢ね。」

とその娘は言った。

「だって 12 時になったら、旦那が迎えにくるんだもの。」

まあ、つまりこれが、"Just A Dream"というこの曲を書くきっかけだったのさ。

MY SONGS

KIND-HEARED WOMAN

優しい心の女だった
いつもあの娘は優しくしてくれたよ
あの娘はいつも俺に小遣いをくれて
神様、いつも俺に好きなようにやらせてくれた

もっと優しい女が他にいるのかも知れねえな
だって、今度付き合った女は
神様、俺のために何もしてくれやしねえ

今度の女は、俺のことを愛してるって言う
俺のためになんでもするって言う
今度の女は、俺のことを愛していて
「もう悪いことをするのは止して
もし今度そんな事をしたら
田舎で長い電報を受け取ることになるんだわ。」

女はこの俺のために
有り金を全部使っちゃった
女は言ったんだ
私はあんなのために
有り金を全部使っちゃった
「最後にもう一つ、棺おけを買ってあげるわ
そいつにあんたを押し込んで、ゆっくりと眠らせてあげる」

(Vogue LD072)

俺は、"Kind-Hearted Woman"という曲を書いたことがある。俺はこの歌みたいな、優しい女と付き合ったことがある。こいつは本当に心優しい奴だった。どんなだったかって言うと、体重は 303 ポンド、体の幅が身長と同じぐらいで、縦も横も 5 フィートと 7 インチあるって訳さ。この女が怒って体を揺ると、地面が揺れるぐらいだったよ。

” あの娘はいつも俺に小遣いをくれて

MY SONGS

神様、いつも俺に好きなようにやらせてくれた ”

これはつまりこういう事さ。女は朝起きると、俺をベッドに残して、一人で仕事に出掛けるんだ。その前に俺に 5 ドル渡して、

「さあ、ダーリン。これで、ミルクと、芋と、ストッキングを買ってきておくれ。それから私の靴の修理、あと晩御飯のチキン、えーと、電気代とガス代も忘れずに払っておいてね。私のビールを半パイントも。お金を全部使っちゃだめよ。残ったお金で今夜、ショーに出掛けるんだから。それからあなたはタバコでも買って、車を取り回していればいいわ。ガソリンは 1 ガロンぐらい残っているからね。それならあなたの望み通りでしょ。でも、買い物は絶対に忘れない事。5 時までには帰ってきて、6 時に私が帰ってくるまでには、晩御飯の準備を終わらせておくこと。あ、それから、嗅ぎタバコを買ってきて。これから出掛けるんだけど、あともう 3 回分ぐらいしかないの。それから、ブタとヤギと牛に餌をあげていてね。昨日の夜、洗濯物を干しといたから、入れてたたんでおいてね。後は...あなたの好きにしていいいわ。」

” もっと優しい女が他にいるのかも知れねえな ”

この 303 ポンドの女と付き合い始めた最初の夜は、こんな風だったな。女から

「ベッドに入りなさいよ。」

と言われて、俺はすごすごとベッドに入ったのさ。

朝、女が起き上がって、服を脱ごうとした時、俺は恐ろしくなった。女がベッドの一方に座ったかと思うと、俺の座っていた反対側が持ち上がり、俺は天井に頭がぶつかりそうなぐらい飛び上がったんだ。女と一緒にシーツの中に入ると、俺はそのすき間の中で、シーツに触らずに泳ぐ真似が出来るぐらいだった。まあ、小さなテントの中で寝るようなものさ。

ある晩、夜中に目が覚めてトイレに行こうと思ったら、女の脚が上に乗っていて、俺は身動きが出来ないんだ。女はぐっすり寝ていて、いびきをかいたり、寝言をブツブツ言ったり、泣いたり、とにかく色々やっているのさ。つねっても全然目を覚まさないのさ、とうとう俺は女の腕に噛み付いた。それでようやく、女は目を覚ましたんだ。

「今夜はやけに蚊がうるさいわね。そんな事ない？」

「ああ、そうだな。」

それで俺はようやくトイレに行き、それからゆっくり眠ったんだ。

” もう悪いことをするのは止して

もし今度そんな事したら

長い電報を受け取ることになるんだわ。”

その女がこう言ったとき、
「どういう意味だよ？」
と俺は笑いながら聞いたんだ。
「つまり、あたいの金を使い込んだりしたら、あんたのお袋さんは長いことしまっただった喪服を着ることになるって意味よ。だからあんたは、死んだアヒルみたいに、あたいに伸されちまって、親父さん、お袋さんを悲しませないように、良おく、気をつけなさいよ。」

最後の歌詞はこうなってたな。

” 最後にもう一つ、棺おけを買ってあげるわ
そいつにあんたを押し込んで、ゆっくりと眠らせてあげる ”

「悪いこと」ってのはこういう意味さ。あんたが、働いて稼いでいる女のヒモだとして、まあだいたい、こういう時、女はギャンブル好きなんだが、そういう女はあんたに何もさせないようにして、ただ夜の楽しみのためだけに、あんたをベッドにつないでおくんだ。それで女があんたに、賭けで勝った金や給料を数えさせて、あんたは必要な金を払った後、お釣りを女に返すとする。女の方でもそのお釣りを数えて、あんたの言った通りかどうかチェックする。女の計算が 50 ドルなのに、あんたが 40 ドルだと言って、9 ドルの釣りを返すようなことをすると、つまりあんたは、死んだアヒルみたいに伸されちまう事になる。アヒルの丸焼きみたいにされちまうって事だよ。あんたが出掛けている間に、女は剃刀とポケットナイフを見比べて、どっちで殺してやろうかと考えるって訳さ。

昔、俺達はブラック・サディって呼んでいた女がいて、いつも剃刀を持ち歩いている、本当に危険な女だったよ。こいつの旦那のアブラハムって男は、片目のエイブってあだ名だった。こいつとサディが喧嘩して、エイブがサディを道の真ん中に張り倒したんだ。その時、俺達はカードテーブルに座って、ジョージアスキンをやっていた。これを見て、女は死んだんじゃないかと思ったよ。それから、片目のエイブはドアにもたれて座っていたんだが、そこへサディが入ってきて、エイブの首に剃刀を回し、グイと引いたのさ。エイブの首からは血がしたたって、肩へと流れたよ。

「エイブ、あんた首を切られたぜ」

と俺達は言った。

「なに、あの女は俺を怖がっているんだ。見なよ、逃げてったじゃねえか。この勝負が終わったら、馬で追いかけて捕まえて、一発殴ってやるよ。それから連れ戻して、博打を打ってる間は、頭が落ちないように手で押さえてろって言ってやるぜ。あの女だって、博打を打ってる間、俺は邪魔されたくないって事を知ってるんだ。」

それで友達の一人が言ったんだ。

MY SONGS

「でもあんた、死んじまいそうだぜ。」

「いいから、冗談は止して、カードを俺に配りなよ。博打を打ってるとき、俺はからかわれるのが嫌いなんだ。さあ、カードを配れよ。」

別の友達が言ったよ。

「エイブ、死にそうだぜ、首が切れてるんだぞ。」

「冗談じゃねえよ。俺はまだ喋ってるじゃねえか。」

「喋ってるのも確かだが、首が切られたのも確かだぜ。もし俺達の話が信用できないって言うなら、お前少し、首を振ってみろよ。そうすりゃどうだか判るだろうよ。」

「なに言ってやがんだ。よし首ぐらい振ってやるよ。」

エイブが首を振ると、あいつの首はテーブルの上に落っこちたよ。

「だから言ったじゃねえか！」

と叫んださ。

これが片目のエイブの最期だったのさ。俺達は翌日、あいつの亡骸をルビーに埋めて葬った。あいつは自分が死んだことに気付いていなかったんだな。もちろんシャディは、あいつが死んだことを確信していただろうさ。いつだって剃刀の刃を研いで、片目のエイブをアヒル見たく殺してやろうと思っていたんだらうからね。

シャディも “ 心の優しい女 ” の一人だったが、こんな女がミシシッピには他にも結構いたのさ。俺が知っていたナーシスという女は、こいつは俺の背中を切りつけやがった。俺は切られた事に気付かずに、その後 2 時間も座ってギターを弾いていた。それで帰るときになって立ち上がろうとすると、俺のズボンが脱げ落ちたのさ。女が切りつけたとき、ベルトも一緒に切っちゃったんだな。見ると、俺の靴は血で真っ赤だったよ。その後、俺は医者に運ばれて、背中を 22 針も縫ったのさ。なあブラザー、これもブルースの真実の一つだな。

=====

俺の娘が 7 才ぐらいの頃、寝る前には色々な話を聞かせてやったよ。毎晩、俺が帰ると娘はまだ起きて俺を待ってるんだ。俺が帰ってきてドアを開けると、

「お父さん？」

と言う。

「ただいま、キャサリン。お父さんだよ。」

「ねえ、待ってたの。お話を聞かせて。」

俺は、「赤い小さな幌馬車」「3 匹のこぐま」の話を 5 年ぐらい繰り返して話してやったんだが、あの娘はいつも笑って、ぐっすりと眠ったのさ。それで俺は、

「今度こそ、あの娘の知らない話をして笑わせて、すっかり眠らせてやろう。」

と思ったんだ。

MY SONGS

ある晩、俺はあの娘の横に座り、アブラハムとブラック・シャディの話を聞かせてやったのさ。話し終わるまで 20 分ほどの間、あの娘は目をぱっちり開いて聞いていたよ。

キャサリンはずっと目を開いたままで、笑いもせずに俺の方を見ていたんだ。ただじっと、話が終わるのを待っていた。

「えーと、キャサリン。今日は笑わなかったけど、あまり楽しくなかったかな。」
話が終わって、俺はあの娘に聞いたんだ。

あの娘は起き上がって言った。

「ねえお父さん、これって嘘でしょ。嘘をつくとお化けに連れて行かれちゃうってお母さんが言ってたわよ。ねえお父さん、お化けに連れて行かれないように、早く、私と一緒に寝たほうが良いわ。私がお父さんをお化けから守ってあげる。早く、服を脱いで、わたしの後ろに隠れて眠ってちょうだい。あんな話をしてしまった後だもの、急いで。」

またある日、俺は床屋で髪を切っていた。それで床屋の奴に片目のエイブとブラック・シャディの話を聞かせてやったんだ。全部話し終わると、床屋は何かブツブツ言っていた。髪を切り終わって俺は椅子から立ち上がり、

「なかなか良くなったな。いくら払えばいい？」
と聞いたのさ。

「面白い話を聞かせてくれたから、タダにしとくよ。」
と床屋は言った。

「1 回分おごりさ。なあビックビル、その代わり、もっとすごい嘘を思いついたら、またうちに来て聞かせてくれよな！」

MY FRIENDS

MY FRIENDS

MY FRIENDS

=====

RED MIKE, BLACK MIKE

RCA ビクターとコロンビアにスカウトされて働いていた頃の事だ。ある晩、スカウトの男から電話があって、俺に会いたいと言う。それで俺は車を飛ばしてその男のところへ行ったんだ。

「東セントルイスに 2 人、なかなかのブルースシンガーがいるんだ。」
と男は俺に言った。

「で、頼みなんだが、お前、そこまで行って、そいつらをシカゴに連れてきてくれないか？ここに 100 ドルある。50 ドルはその費用だ。ウイスキーも一本、くれてやるぞ。」

それで俺は、次の日にはシカゴを発ち、夕方の 6 時にはセントルイスに降り立った。おれの知ってるのは 2 人の名前と住所、それっきりさ。2 人とも名前はマイク、一人がレッド・マイク、もう一人がブラック・マイク。2 人の住所は互いに遠くはなさそうだった。俺は途中、リブ・ジョイントに立ち寄ってたらふく飯を食い、もう夜 9 時だったんだが、音楽を聴きながら車を走らせて行った。そして道を聞こうと車を止め、通りを歩いていった。

そこに男が一人いたので、俺は
「レッド・マイクとブラック・マイクという男を知らないか。」
と声を掛けた。男は知らないと言う。もう一度、同じことを聞いたが、やはり、知らないと答えた。それで俺は、こんな時には ”ドルが口を利く ” という話を思い出し、ポケットから 1 ドル札を 2 枚出して男に握らせた。

「2 人の男を知らないか？」
と問い直すと、男を俺を見上げ、
「知ってるよ。」
と言ってニッと歯を出して笑い、
「ついて来い。」
と言った。

3 フロックも歩いただろうが、男は立ち止まって俺を見上げると、またニッと笑い、
「2 人に会いたいのか？」
と聞いた。俺が、
「2 人のレコードを作りたいのさ。」
と言うと、男はまた、ニッと笑い、
「ブラック・マイクとレッド・マイクはこの家の中にいるんだ。俺が呼んできてやろう。」
と言って、中へ入っていった。

最初に出てきたレッドマイクは、肌の薄いニグロだった。その後から出てきたブラック・マイクは、新品の革靴のように黒い奴だった。

俺たちは道を横切って店に入り、ムーンシャイン・ウイスキーを飲んだ。そして、明日

MY FRIENDS

の朝シカゴへ来ないかと誘ったんだ。俺は奴らに、ムーンシャイン・ウイスキーのフルーツカクテルをおごってやった。あいつら、すぐに 1 杯目を飲み干したんで、2 杯目を注文した。でも 1 杯で半ガロンもあるんだぜ。2 人はすっかり酔っ払い、このビック・ビルは 2 人のマイクを支えて店を出て、とうとう俺達 3 人、シカゴに辿り着いたって訳さ。レコード会社の男と約束した時間にはギリギリだったけどな。

やつら、なかなかいいブルースをレコーディングしたよ。レッド・マイクは、"Hell Ain't Bu A Mile And A Quarter"、ブラック・マイクは、"Pussy Foot Baby"という曲を吹き込んだんだ。

もちろん俺達は友達になり、そして、俺は 2 人をセントルイスまでちゃんと連れて帰ってやった。その時、俺は、やつらの親父さん、お袋さんにも会ったよ。2 人のお袋は浅黒いニグロなんだが、レッド・マイクの親父さんは黒人で、ブラック・マイクの親父さんは白人なんだ。つまり 2 人は、母親は同じで、父親が違うんだ。2 人ともなかなか歌が上手かった。2 人はミシシッピのダック・ヒルの生まれで、俺の故郷からそんなに遠くない。俺もレッドマイクの曲を 1 曲、録音させてもらったよ。1937 年のことさ。

MY FRIENDS

=====

SLEEPY JOHN ESTES

スリーピー・ジョン・エスティスの歌うブルースは、「嘆きのブルース」って感じだった。ワークソングやブルースを歌いながら、あいつ、本当に泣き出しちまうんだ。やつの曲では、"Married Life Blues"、"Good Old Cabbage Green"、"My Mother Don't Allow Me To Stay Out All Night Long"、"Don't Take Money From A Poor Boy Like Me"、などがヒットしたよ。

あいつが歌ったワークソングは、俺たちの毎日の仕事そのものだった。俺は時々、線路の仕事をやったんだが、その仕事は"イエロードッグ"と呼ばれていたよ。その頃、俺は、路線敷設隊の一員だった。

敷設隊のメンバーは8人、1人1本、長さ6フィート半の棒を持っていて、俺たちはその棒を敷設棒と呼んでいた。ジョン・エスティスは毎朝、俺達を線路の上に呼び集めた。

あいつが仕事を始めるように声を掛けるんだが、その時はこんな風に歌うんだ。

” 毎朝、子供たちは棒を掴むと、私の後ろに従った ”

それから俺達は、寝泊りしている車両から仕事場まで 1 マイル半、歩いていく必要があった。

俺達が仕事場まで歩いていく間、ジョン・エスティスはずっと歌ってるんだ。

” 俺は群集に取り囲まれた。まるで砂糖にハエがたかるように。 ”

こんな風に歌っていやがったよ。それで俺たちも一緒に歌っていると、
「男達はみな、道を走っていく馬のようだ」
と来る。

線路の下に棒を差し込む段になると、こう来る。

” 子供たちよ、しっかり掴んだかい？もしまだなら、しっかり掴め。 ”

100 フィートも向こうにいる白人が線路をどっちに動かしたらいいか、指示する。ジョン・エスティスはそれを俺たちに、歌って伝えるんだ。

ある日、ボスが俺たちに作業を言いつけたとき、俺達は線路を動かす作業を、ちっとも始めないので、とうとうボスは怒り出した。俺達に詰め寄って、こう言うんだ。

「おい、ニグロども。何やってやがんだ。」

俺たちが何も言わないので、ボスはジョン・エスティスを見つめ、

「どうしたんだ。」

と言った。ジョンが何も言わないので、白人はあいつを引っぱたいた。それでようやくジョンは起き上がって歌いだし、俺たちも仕事が始められたって訳さ。それ以来、俺たちはあいつのことを、「眠れる線路作業指示人」と呼ぶようになった。つまりこれが、スリーピー・ジョン・エスティスという名前の由来さ。

敷設隊のメンバーの中に、あいつの女がいて、みんなから「泣き虫メアリー」と呼ばれていた。女は毎日のように、ジョンに殴られていたんだ。だってこの女、殴られないと料理も何もしないのさ。一発殴りさえすれば、美味しいパイやビスケットを焼くし、ハムを焦がすこともない。殴らないとどうなるかって言うと、すべての料理は黒こげさ。ボスの料理までこうなっちまう。

ジョンの仕事はいつもこんな具合だったよ。メアリーを殴り、俺たちには、歌って仕事をさせる。昼間は、何をする時も、ジョンに歌ってもらったよ。もし仕事中に便所に行きたくなったら、それもジョンに言って、ボスに向かって歌ってもらうのさ。ボスから仕事の指示があると、ジョンはそれを、歌って俺達に伝える。

「さあみんな、棒を持て。仕事の始まりだ。」

周りにはトイレなんて無いから、俺たちは草むらか、木の陰に隠れて用を足し、それから戻ってくるとまたジョンが歌う。

” 男達はみな、道を進む馬のようだ。”

ある日、列車が通り過ぎるまで仕事を止める事になり、列車が来るまで 10 分間休んでいろ、とボスが言った。俺達は線路から棒を外し、線路から離れるように言われて休んだよ。ジョン・エスティスは眠っていたが、列車は通り過ぎる時、俺達をどけようと、俺達に向かって汽笛を鳴らした。あいつは、びっくりして飛び起き、一目散に走って逃げた。列車が行ってしまうと、ボスが来て言ったんだ。

「ジョン・エスティスはどこへ行ったんだ？」

俺達は知らないと答えたよ。

「何をやってやがるんだ。あいつはいつも、何かやらかすぜ。眠っていないなら、どこかへ逃げたな。おい、ニグロども、森へ行ってあいつを捕まえて来い。見つけるまで戻ってくるんじゃねえぞ。」

もちろん俺達は喜んで出掛けたよ。ジョン無しじゃ便所にも行けねえからな。探しに行ったら、あいつは 3 マイルも離れたところで、死んだように眠っていやがったよ。俺達はあいつを起こすのは止めて、自分達も木の下に寝転がって一休みすることにしたのさ。

3 時間も休んだ頃、1 人がもうそろそろ戻ろうと言い出した。それで俺達はジョンを起こして仕事場へ帰りながら、ボスに話す言い訳を色々と考えたんだ。ボスはジョンが嘘をつくとは思っていないから、俺達はジョンに話させることにした。

MY FRIENDS

「こう言えばいいんだな。俺は熊に追いかけて木に登り、みんなが来て追い払ってくれるまで木から降りられなかったんですよ、とな。」

そうして俺達は仕事場へ戻ったが、見るとボスも木の下に横になって眠っていやがる。

ジョンは、

「せっかく嘘を考えても、ボスが寝ていたんじゃないだろうがねえ。もう帰る時間だから、ボスを起こすでしょう。」といってボスを起こしたんだ。

「お前、どこに行っていやがったんだ。」

「ここに居ましたよ。ここに。」

俺達は手押しの車両を線路に残し、みんなで帰ることにした。ボスは一言もしゃべらず黙ったままだった。ジョンはいつもの調子で歌いだし、俺達もそれに合わせて歌い、寝泊りしている車両に戻るまで、ジョンの歌を盛り上げた。

晩飯を食った後、俺達は草っぱに横になり、ジョンはボスとの話がどんな具合だったか話したよ。みんな大笑いして、それから寝たのさ。

ジョンも今では 87 才だ。こんな話があったのは、俺が 19 の頃、1912 年から 1915 年の頃の話だ。俺は家を抜け出してジョンの所へ行き、よく一緒に歌わせてもらったもんさ。

1922 年に一度、シカゴでジョンに会ったことがある。その時あいつは、ブルースを歌っていたよ。

(章末、注 a)

=====

BIG MACIO

ビック・メイシオって奴は、自分だけの演奏スタイルを持っていたよ。それでももちろん、死ぬまで良い演奏を続けていた。あいつはジョニー・ジョーンズにピアノを教えてやってたんだ。それでジョニーは、メイシオそっくりに演奏できるようになったんだ。知らない奴がみたら、区別がつかない程だったな。

以前、俺とビック・メイシオは 2 人で列車に乗り、ミシガンのデトロイトへ、あいつの兄弟に会いに行ったことがある。そこで俺は、3 人の姉妹、2 人の兄弟、1 人の従兄弟に会った。とても素敵な家族だったよ。兄弟には聖歌隊に入っているのもいた。

ビック・メイシオは、アメリカ中のミュージシャン、ブルース・シンガーに愛されてたよ。特に、タンパ・レッドとは仲良しで、俺が知り合う前から互いに友人だったようだ。あいつと初めて会ったのはタンパ・レッドの家で、俺はそこで初めてあいつの演奏を聴いたんだ。俺はあいつの演奏を聴いて、メイシオはブルースを愛していて、最高の演奏をするミュージシャンだと、俺はみんなに断言した。

タンパ・レッドに紹介してもらってから、あいつは俺のことを Big Boy と呼んで、兄弟みたいに仲良くしてくれたよ。あいつは俺と会うずっと以前からタンパレッドと組んで、ピアノを弾いていたんだ。俺はその頃、シカゴのウエストサイドのナイトクラブで演奏していたんだが、相棒のピアニストのジョシュア・オールシマーが 1940 年に死んでしまったんで、一緒に演らないかと誘ってみたところ、早速 OK と言ってきた。

それで俺は、ゲイトウッドさんというボスの所へ行ってその事を相談したんだ。「お前がそうしたいなら、全然問題ないよ。俺と一緒に演奏する訳じゃないんだ。俺にはいい音楽さえあればいい。誰でも好きな奴を連れて来いよ。」

俺とメイシオが始めて一緒に演奏した夜、クラブはえらく盛り上がったな。俺は 1、2 曲しか歌わなかったんだがね。ボスが早速、俺の所へ来てこう言った。

「お前にはブルースシンガーを見る目があるようだな。」
そして、ゲイトウッド・スペシャルという酒を一本プレゼントしてくれた。俺とビックメイシオは、車で帰る途中、トリオを組もうと決めたのさ。

早速、俺達はリトル・T という男にドラムを頼むことにした。こいつは人気のある曲はどれも、演奏も歌も両方出来て、それで俺達は色々な所で演奏できたよ。それで今度は、リトル・ジョーというベーシストもくわえる事にした。こいつのウォーキングベースは、本当にウォークな感じだったが、小男なので、客は立ち上がらないと、こいつの演奏が見えなかったよ。俺達は、劇場、ナイトクラブ、カクテル・パーティーなど、どこへでも出掛けていき、いつもなかなか良い演奏を続けていた。そしてさらに今度は、バスター・ベネットというサクソプレーヤーもバンドに入れることにした。

1945 年にはコロンビアで、"Partnership Woman"、"Roll Then Bones"、"Bad Luck Man

MY FRIENDS

Blues", "Wandering Man Blues", などを吹き込んだ。どれもなかなかの演奏だったよ。

その後、リトル・T は別のバンドの仕事を始め、バスターは自分のバンドを作り、ビッグ・メイシオは、もっと金になるツアーの仕事に出掛けてしまい、俺はまた一人ぼっちになった。

ニューヨークのカフェ・ソサエティから手紙が来て、うちで演奏しないか、と誘われて、俺は2年ほどニューヨークで演奏し、その後2ヶ月ほど、テキサスで演奏した。

そしてシカゴに戻ってくると、その頃ビッグ・メイシオはタンパレッドと組んでフレイム・クラブで演奏していた。タンパはジョージアへ友達に会いに行きたいと言っていて、その間、俺が代わりにギターを弾くことになった。

その後俺はまた、ニューヨークへ戻ったが、ビッグ・メイシオのかみさんから、メイシオ発作で倒れ、不具になったという手紙が来たので、早速シカゴへ見舞いに行ったよ。でもあいつは大丈夫そうで、フレイム・クラブの演奏も続けられそうだったから、俺はまたニューヨークへ戻ったんだ。

でもまた手紙が来た。今度は床屋で倒れ、家まで運ばれたという。また見舞いに行ったんだが、今度は歩けなくなっていたよ。それで俺は、シカゴに戻って、あいつの面倒を見てやることにしたのさ。

俺達はよく口論や喧嘩をしたけど、それは殴りあうようなものじゃなかったぜ。あいつは俺より音楽に詳しくあったが、本物のブルースってことになると、俺の方が良く知っていた。それであいつが正しいコードを弾けと俺に言い、それで口論になったのさ。

「でも俺にはこっちの方が良いと思うんだ。」

そう言って俺は、メロディーを口ずさんでみせる。

「その歌のメロディーは悪くないんだが、コードがおかしいんだよ。そんなのはコードでも何でもなくて、ただ音を鳴らしてるだけじゃねえか。」

そう言って自分でピアノに向かい、コードを鳴らして歌って見せるんだ。

「ああ止めた、止めた。クソ食らえだ。」

俺は頭に来て、また口論になる。でもゲンコツは出さなかったぜ。そんな時、俺達はウイスキーを一本出してきて、2、3杯あおり、そしてまた、演奏に戻るのさ。

「わかったぜ、ビル。お前が歌う曲では、お前の言う通りにしよう。でも俺が歌う曲では、俺の演り方に合わせてくれよ。」

そして俺達はまた、一緒に演奏を続けたんだ。

あいつは言ったよ。

「俺が歌うとき、このコードに合わせてくれ。じっと座ってギターを抱え、このコードを鳴らすんだ。よく聞けよ、C, F, G, D のディミニッシュを鳴らすからな。やってみなよ。」

あいつがピアノでコードを鳴らすので、俺はそれはギターの上で探すんだ。ギターのネックを上へ下へと押えて、メイシオがピアノで鳴らしているのと似たサウンドを探すんだ。

「そう、それでいい。じゃ俺が歌うから、合わせて弾いてくれ。」

MY FRIENDS

まあ、こんな風にして、俺はブルースを演奏する時のコードのサウンドを覚えてたってわけだよ。でも俺は、あの時俺が主張したサウンドの方が良かったと、今でも感じている。おれにとって良いサウンドだと感じるときこそ、ミシシッピで憶えた古いブルースのサウンドが、本当に歌い始める時なんだ。だから俺は、ミュージシャン達が正しいというサウンドじゃなくて、昔、俺が覚えたサウンドに戻らなくてはいけないのさ。あいつらは本当のブルースを知らないのさ。俺はいつも、ビッグ・メイシオや、他のミュージシャンにこう言っていた。ブルースってのは、本に書いてある理論の通りには行かないんだとね。ブルースってものは、自分が感じたように演奏し、歌うものなんだ。男や女が普段の生活で感じているものとは違うのさ。もしいつも、ブルースを感じているのだとしたら、気が狂っちゃうよ。

ビッグ・メイシオとはいいい友達だったが、演奏の事になると、いつも喧嘩していた。あいつは俺より音楽については詳しかったよ。ブルースでは俺の方が上だったけどな。あいつは、"The Married Life Blues","Texas Blues"、など、多くのヒット曲を出して有名になってた。タンパレッドとの付き合いが長くて、自分のレコードも吹き込んでいた。このビッグ・ビルとも一緒に、12枚のレコードを吹き込んだ。あいつは色々なスタイルの演奏が出来て、様々なアーティストと一緒に演奏していた。

もう話したことだけど、ビッグ・メイシオはミシガンのデトロイトに家族が住んでいる。1941年に俺達は知り合った。生まれたのは1905年の3月30日と言っていたよ。毎年3月30日には、誕生パーティーをやるんだが、その時は、ミュージシャンを最低15人は集めた。あいつを胴上げするためさ。なんてったってあいつは、体重が245ポンド、身長は6フィートもあるからね。でも実は、いつも誕生日にお互いに祝うやり方には続きがある。胴上げが終わるとそいつを縛っちゃまって、ヒモや板でそいつを引っ叩くのさ。多いときは、25人から30人のミュージシャンが集まって、一人1回ずつ引っ叩く。叩くときは、誰にやられたか判るように、自分の名前を言ってから叩くんだ。全員終わると、ようやく許してもらえるのさ。

ビッグ・メイシオは、ブルースの世界にどっぷり浸かっていたよ。アメリカ中のシンガーに愛されていた。あいつは、シカゴとデトロイトの両方で地元のミュージシャン組合に入ってた。ブルースが好きなやつはみんな、ビッグ・メイシオを愛していたよ。あいつはシカゴでかみさんと娘さんと暮らしていて、1953年の2月26日に死んだ。遺体は船でデトロイトに送られて、3月31日に墓地に葬られた。

俺があいつに最期に会ったのは、1952年の9月で、俺達是一緒に野球をした。ちょうど俺がイギリスのロンドンへ発つ前さ。あいつと別れるときは、何かあるんじゃないかって、そんな予感がしてたんだ。その後結局、ビッグ・メイシオの名で知られる、メジャー・マリーウェザーという偉大なブルースシンガーは、天国に召されちゃったのさ。

=====

TAMPA RED

タンパレッドってやつは、スタイルのあるミュージシャンの一人で、あいつは小指に付けたボトルネックでの演奏を得意としていたよ。こうやって弦の上を上下にスライドさせるのさ。俺はボトルネックで演奏するのを見たのは、あいつが始めてだった。ボトルネックで演奏するのはあいつだけじゃなく、他にも、エルモア・ジェイムス、マディ・ウォータース、ナイトホーク、ココモ・アーノルドなどもいる。

もう一人別人で、俺が本物のタンパレッドだ、って言っている奴がいたが、俺達はそいつをひっ捕まえて、お前は偽者で本物のタンパレッドの足元にも及ばない、って言ってやったよ。俺は本物の方のタンパレッドと知り合いで、毎日のようにあいつの家へ出掛けていたからね。こいつはタンパレッドのプレイを盗んでいて、まったくのコピーなのさ。この男はどうやら、1920年代のタンパレッドの録音を聞いてすっかり惚れ込んでしまい、タンパレッドみたいに弾いたり歌ったりする真似をするようになったんだそうだ。でもタンパレッドって男はただ一人で、その演奏は誰にも真似できなかったよ。あいつが死んでしまったときに、すべてが消えてしまったのさ。

タンパレッドは本当に良い録音を残していて、ヒットも出してる。"My Gal Is Gone", "When Things Go Wrong", "Let Me Play With Your Poodle", "She's Goikng To Sell My Monkey"、そのほかにも良い演奏がたくさん残ってる。俺が知る限り、あいつはRCAビクターでレコーディングを続けていた。

俺がタンパレッドに初めて会ったのは、シカゴのスタジオで、1928年のことだった。あいつは銀色に光るギターを抱えて、本当に良い演奏をしていた。それまではジョージア・トムと一緒に演奏していたが、その頃からは"Forty Five"という名のピアニストや、ブラインド・ジョン・デビス、ビッグ・メイシオ、ジョニー・ジョーンズ達にピアノを弾かせたり、ハウカム・ボーイズというバンドで演奏したり、ウィリー・B、L.C.マッケニーというギタリスト二人と演奏するようになっていた。俺は、タンパレッドと一緒に録音したことはないな。でも、ショーやパーティーでは、よく一緒に演奏したよ。あいつは良い奴で付き合いやすかった。いつもは無口なんだが、時々しゃれた冗談を言うのさ。

タンパレッドの誕生日は12月25日で、毎年12月25日には、ミュージシャンはみんな、あいつの家に集まって、飲んだり食ったり、ブルースの話をして、それからあいつを、ベルトでびしびしと叩いてやったんだ。だいたいいつも、12人から15人集まって、あいつを押さえつけるんだが、多いときは30人ぐらいのミュージシャンがいたこともあった。誰かが押えている間に、他の奴が周りをぐるぐる回りながら引っ叩くのさ。電気を消してね。時々あいつが叫び声を上げるのさ。俺達ブルースミュージシャンの誕生日の祝い方ってのはいつもこんな感じだった。毎月3、4回、どこかの街でこんな事をやっていたよ。

(章末、注 b)

MY FRIENDS

誕生パーティーに行くときは必ず、ウイスキーのボトルのでかいやつを一本持って行く。時々、みんなに引っ叩かれるのがいやで、仮病を使う奴もいたよ。

俺とタンパレッドは、一緒に釣りや狩りにも出掛けたよ。何かが釣れることもあったが、何も釣れないこともよくあった。釣りに行くとなると、いつもだいたい、5ドルぐらいかかった。魚を釣るエサ代、俺かあいつの車のガソリン代、そして一番大切なものは、ウイスキーかジンのボトルを一本。あいつは、一緒に飲むには最高の相手だったね。

ある日俺達は、一緒に釣りに行ったんだが、その日は一匹も釣れず、帰りにタンパレッドは魚屋で魚を買って帰ったんだ。あいつが言うには、

「これをかみさんに渡すんだ。あいつなら気付いたりしないだろう。」

「そうかな、タンパ。お前のかみさんは頭がいいぜ。今までだって嘘をつくと、すぐにはれちまったじゃないか。」

「でも誰が捕まえた魚かなんて、判りやしねえよ。俺が魚を洗ってきたって言えば大丈夫さ。」

それで俺達は、車であいつの家に帰り、あいつはかみさんにこう言ったのさ。

「ハニー、釣った魚を綺麗に洗って持ってきたぜ。」

あいつがこう言っている間にも、俺はもう、ドアの方へにじり寄っていた。だって、俺とあいつが何かやらかして、あいつのかみさんに嘘がばれると、あの女、俺達を家の外へ投げ飛ばすんだぜ。あの女は本当に腕っ節が強かったから、怒り出したらすぐ逃げ出せるよう、俺はドアの近くに行ったのさ。以前、本当にそんな事があって、俺もタンパも良く判っていたのさ。タンパのやつが、ハニーとかダーリンとか言って魚を渡すと、あの女は目をパチパチさせて、魚を見回した。

それから鼻の上の眼鏡を少し上げると、タンパレッドに言ったのさ。

「お前達、また嘘をついているね。これは買ってきたんだろ。」

「いいや、タンパの奥さん。彼が釣ったんだよ。」

と俺はいった。

「じゃあ、ビル。一体どこで釣ったのか言ってみな。」

「いや、俺の方は一匹も釣れなかったのさ。」

「そしてタンパレッドの方も釣れなくて、こいつを買ってきたんだろ。そんなのはこいつの目を見りゃ一目瞭然だよ。こいつは一ヶ月も前に死んで、冷蔵されていた魚さ。あんたら二人とも、地獄へ落ちことしてやるよ！」

あいつのかみさんは俺達をぶっ叩くための棒を探しに奥へ行った。俺達は大急ぎで階段を駆け下り、車に乗り込むと、全速力で逃げ出した。それから酒を一本買って飲みながら、大笑いしたのさ。

「だから言ったじゃねえか！」

ってね。

=====

LONNIE JOHNSON

ロニー・ジョンソンは、他の奴とは違うタイプのギタリストだった。あいつは、「ギター
の王者」と呼ばれていたよ。あいつの作ったレコードは良く売れた。例えば、"Falling Rain
Blues", "Love Story Blues", "In Love Again", "Jelly Roll Banker", "Tomorrow", など、他に
も良い録音がたくさん残っている。あいつは有名なバンドや、レイ・アームストロングみ
たいな有名なミュージシャンとも一緒に演奏していたよ。テキサス・アレキサンダーはロ
ニー・ジョンソンに似たスタイルのギタリストだったな。

俺がミズーリのセントルイスへ 1921 年に来たとき、ロニーとあいつの兄弟に初めて会っ
た。兄さんの方はバディ・ジョンソンと言って、ピアノを弾いていたが、ロニーの方は、
バイオリンギター、ベース、マンドリン、バンジョーなど、音が出るものなら何でも演奏
できて、どれを弾いても上手かった。もちろん、歌も同じくらい上手かったよ。

ロニーから聞いた話では、あいつは 1894 年にニューオーリンズで生まれたってことだっ
た。でも 1952 年にあいつに会ったとき、俺にはあいつが 47 オぐらいに見えたな。俺が聞
いたのは、1923 年頃に、あいつがシカゴで録音したブルースさ。あいつは、ハードに弾く
方法を覚えたと言って、その頃はいつも、ピックを使って演奏していたよ。

(章末、注 c)

俺はロニーとは一緒に演奏する機会にはなかったが、ショーやパーティーでは良く一緒に
なった。あいつは 5 フィートと 10 インチぐらいの身長だったよ。あいつとは一緒に釣りに
行ったことがあるんだが、俺は自分で釣るより、あいつが釣るのを見てるほうがずっと面
白かった。魚が釣れる度に大声を上げるんだ。

「きたぞ！ビル！ちょっと小さそうだけど充分だ！フライパンで焼くにはちょうど良い
ぜ！」

そんな調子で 1 日に 25 匹も釣り上げちまう事もあったのさ。あいつは釣りが大好きだっ
たよ。俺達がシカゴにいた頃の話さ。

MY FRIENDS

=====

JOE MCCOY

ジョー・マッコイというギタリストは、兄弟やいとこ達とは、ちょっと違うプレイをしていた。あいつはブルースやジャンプの大ヒット曲を出した。一番のヒット曲は、"Oh Red What You Gonna Do?", "Why Don't You Do Right"などかな。

ジョーの故郷はミシシッピ、あいつはそこで生まれ育った。俺はあいつの兄弟のチャーリーを知っているよ。他にも兄弟がいて、宣教師をやってるって言ってた。

あいつの話だと、1900年に生まれたらしい。そして1951年に死んだんだ。その時俺は、あいつの葬式に行ったんだが、同じ日にシカゴの別の場所でもっと大きな葬式があって、俺はその両方に呼ばれていた。もう一つの葬式は、大きな教会で、2000人ぐらいの人が集まっていたが、そこにはジョーのヒット曲で儲けたマヨ・ウィリアムズも来ていた。

俺はその葬式を途中で抜け出して、ジョーの葬式へと出掛けたよ。そこは葬儀場で、20人ぐらいの人が来ていた。墓地には3台の車が停まっていて、そのうち1台は俺の車さ。ウィリアムズは、ジョーの葬式には来ていなくて、その日、ジョーのことは一言も口に出さなかった。

でかい葬式は葬儀屋の葬式で、シカゴの74番街の大きな葬儀場でやっていた。一方、ジョーの葬式の方には、メンフィス・ミニーも含めて、ジョーの昔なじみの連中は、誰も来ていなかった。ジョニー・テンブル、ハーブ・モランド、オーデル・ランド、ホレス・マルコム、T.C.ウィリアムズなど、ジョーのレコードやナイトクラブで一緒に演奏した連中も誰もいないんだ。

ジョーは1937年にブルースを演るのは止めちまって、しばらくは宣教師の仕事をしてた。あいつは再婚して、2人目のかみさんとの間に2人の子供がいた。葬式の時、俺は2人の娘を見たが、もう随分大きくなってたよ。あいつの兄弟のチャーリー・マッコイも、ジョーと同じ年に死んでしまったよ。

=====

SONNY BOY WILLIAMSON

ソニー・ボーイ・ウィリアムソンは、フレンチハープ、つまりハーモニカを吹く男で、一風変わったブルースをプレイしていた。あいつはハーモニカを吹きながら歌うんだ。あいつも良い曲を書き、その中からは、"Cold Chills Blues", "Cuttor Woman", "Keep Rubbing On The Old Thing"などがヒットしたよ。ソニー・ボーイはブルースシンガー達に気に入られて、色々なアーティストと一緒にレコーディングしたり、クラブでプレイしたりした。例えばロニー・ジョンソン、ピック・ビル、ジョシュア・オールシマー、ブラインド・ジョン・デビス、ボブ・コール、ウォルター・デビス、メンフィス・スリム、サニーランド・スリム、エディー・ボーイ、ジョー・ウィリアムス、その他色々なミュージシャンと共演したのさ。

ソニー・ボーイは、身長が6フィートぐらい、とても色が黒く、髪の毛の多い男だった。1948年にプランテーション・クラブって所で演奏していた頃、あいつはクラブからの帰りに頭をひどく殴られたんだ。家には辿り着いたんだが、病院に運ばれる前に死んでしまった。プランテーション・クラブはシカゴの31番通りにあったクラブさ。あいつの遺体はテネシーのジャクソンまで船で運ばれて、そこで葬られた。そこがあいつの故郷なのさ。あいつが死んだのは32の時だ。頭をアイスピックで刺されて死んだ。氷を砕くときに使う、鉄で出来て尖っているあれだよ。

あいつは優しく、とても気前のいい男だった。なんでも周りのやつにあげちまうのさ。着ているシャツを脱いで、沢山あるから、と言って友達に渡しちまう事なんかもあった。

俺とソニー・ボーイとメンフィス・スリムは長い間、一緒に演奏していたんだが、あいつは酔っ払うとすぐ、俺かスリムに飛び掛って、それから喧嘩になるのさ。俺達はその喧嘩の相手になることもあったが、相手にせず、放っておく事もあった。すると俺達を探して、ようやく見つけると、泣きながら

「俺を一人にしないでくれよ。」

なんて言うので、あいつを慰めてやるんだ。

それからあいつはウイスキーを一本買ってきて、俺達に渡すと、

「もういじめるのは止してくれ。」

と泣きながら言っていた。

あいつが泣いている間、俺達はウイスキーを飲み始めたよ。でもあいつは泣き止むと、俺達の方を見て、

「俺のウイスキーが無くなっちゃったじゃねえか。」

と怒鳴りだす。

それでまた喧嘩が始まるんだ。俺達のどちらかが相手をする事もあったが、あいつはめっぽう強かった。でもそんな喧嘩はすぐに終わったよ。

ソニー・ボーイの嫁さんは美人で、ソニー・ボーイに良く似ていた。俺は奥さんに、あんたは嫁さんと母親の両方だね、と言ってやったよ。あいつの嫁さんは歌とリズムが判るので、ソニー・ボーイが曲を書いたり、練習するときにいつも、手伝っていた。

俺が始めてソニー・ボーイに会ったのは 1934 年のことで、ちょうどあいつが、テネシーのジャクソンのメンフィスに近い街からシカゴへ移ってきたばかりの頃のことだった。あいつの故郷はジャクソンで、家族はそこに住んでいた。俺はあいつのお袋やきょうだいに会ったことがあるよ。

アーカンソーにソニー・ボーイに似た演奏をする奴がいて、こいつの名前はソニー・ボーイ・ウィリアムスと言うんだ。片方は肌の薄いソニー・ボーイ・ウィリアムス、もう片方は肌の濃いソニー・ボーイ・ウィリアムスン、名前が少ししか違わない。でもあいつの方が本当のソニー・ボーイだったよ。ハーモニカを吹くのが大好きで、演奏は本当に上手かった。

(章末、注 d)

ブルースシンガー達みなと同じく、俺も、ソニー・ボーイと一緒に演奏するのがとても好きだった。ある日あいつが俺の家に遊びに来たとき、

「野球を見に行こうぜ。」

と言い出した。俺は、

「そんな金はねえよ。入場料が 1 ドル 25 セント、飲み物代もかかっちゃうよ。」

と答えた。あいつは、

「それなら俺がチケット代とウイスキー一本を払ってやるよ。」

と言うので、

「よし、それならサッチェル・ペイジが投げるのを観にいこう。」

という事になった。

俺達は早速出掛けていき、野球場に着くまでの間もずっと飲んで、到着してシートに座ってからも飲み続けた。そして、試合まではまだ 30 分もあるのにとうとうボトルは空になっちまい、俺達はぐうぐうと眠り込んでしまったのさ。しばらくして、野球場の管理人がやって来て、俺達を起こした。ソニー・ボーイは、

「試合はいつから始まるんですか。」

と尋ねたんだ。

「次は日曜日だよ。今日のは終わったんだ。さあ、帰った、帰った。」

その日、ホワイトソックス・パークには 5 万 2 千人が詰め掛けていたんだが、俺達は、サッチェル・ペイジが投げるのも見なかったし、試合の結果も何も知らないままだった。俺達がソニー・ボーイの家へ帰ると、今日の試合のを見た連中が大勢来ていて、試合の話をしていた。

誰かが試合のことについて何か言うと、ソニー・ボーイは言った。

MY FRIENDS

「そうか、本当か。ちくしょう！」

みんなは

「本当に試合を観にいったの？」

と聞いたが、

「確かに行ったんだが、それは見なかったな。それはいつの話？ 1回？ 最終回？ ダブルヘッダーじゃなかったの？ そうでなかったなら、すぐに球場を出て、金を返してもらえばよかったな。なあ、ビル。」

「そうだな、ソニー・ボーイ。」

と俺は答えた。ソニーボーイはみんなに、試合の様子を詳しく聞いていたよ。

「本当に5万2千人も来ていたの？」

「あんたら、寝ていたとしか思えないな。」

そう言われて、あいつは、大笑いしていたよ。

MY FRIENDS

=====

PETER CLAYTON

ピーター・クレイトンは、「ドクター・クレイトン」という名前で録音を残している。あいつがブランド・ジョン・デビスや、ランサム・ノウリングと一緒に RCA ビクターで録音したレコードは良く売れた。あいつは 1941 年になってようやく、「I Am Going To Murder My Baby», "Doctor Clayton Blues", "Gin Head Woman Blues", "Pearl Harbour Blues"などのヒット曲が出たんだ。

あいつは自分がアフリカ生まれ、学校に行くためにアメリカへ来て、ミズーリのセントルイスに住んだ、と言っていた。あいつは一人の女の子にほれ込んで結婚し、工場で働いていたよ。かみさんは子供を 4 人生み、6 年ぐらいの間は幸せに暮らしていた。俺はそんな当時の様子を覚えている。

でもある晩、あいつが仕事を終えて家に帰ると、家は火事で焼けていて、かみさんと 4 人の子供は全員、その火事で死んでしまっていたのさ。

そんな事があって、あいつはセントルイスを離れ、シカゴに移り住んだ。それが 1937 年のことで、それからあいつは酒を飲み、博打を打つようになり、いかがわしい場所や、やばい店に出入りするようになり、そして、ブルースを歌うようになったんだ。あいつは火事で家族をなくす前は、ポップスやバラードを歌っていた。それもなかなかのものだったよ。

ドクター・クレイトンは優しい男だったよ。いつも部屋には戻らず、冬でもテニスシューズを履き、玉突き台、路地、地下室など、どこでも寝た。だって歌って稼いだ金は全部、飲むか打つかして使っちゃうからなんだ。

1946 年にあいつはとうとう肺炎にかかって死んじまった。葬式に来たのはたったの 10 人で、墓地の埋葬まで見届けたのは、俺と、俺のかみさんと、タンパレッドの 3 人だけだった。あいつはシカゴで死に、そのままシカゴに葬られた。

俺はドクター・クレイトンが友達や家族の話をするのを聞いたことがない。思うにアメリカには、あいつの友達や家族は居なかったんだろう。あいつは良い学校を出ていて教養のある立派な男だった。セントルイスで家族を亡くす前まではね。

=====

GEORGIA WHITE

ジョージア・ホワイトはピアニストで、彼女はブルースとブギの両方が上手かった。彼女が録音したブルースとブギウギにはヒット曲がいくつかあったけど、一番ヒットしたのは、"Trouble in Mind"だね。この曲は、1922 年にリチャード・ジョーンズが書いた曲だ。

彼女の話だと、生まれたのは 1903 年の 3 月 9 日、身長は 5 フィート 7 インチぐらいで体重は 185 ポンドあった。色が黒く、美人で付き合いやすい、優しくて本当にフレンドリーな女だった。

1949 年か 1950 年頃、シカゴのナイトクラブで、俺と彼女は一緒に演奏していた。一緒にレコーディングしたことは無いんだが、レコーディングしているスタジオへ遊びに行った事はあるよ。彼女は、RCA ビクター、コロンビア、ボカリオン、オーケー、デッカなどのレコード会社でレコーディングしていた。

その頃彼女は、俺がやっていた、"Laughing Trio(お笑いトリオ)"というバンドでピアノを弾いていて、演奏を始める前には必ず何か、ちょっとしたジョークを言っていた。

もう一人のメンバーは、アルフレッド・ワラスというドラマーで、体重は 260 ポンドあった。当時 23 オでなかなかのビートを叩き、歌の方も結構歌えて、ブルース、ピクシィ・ブルースなんかを歌っていた。

その頃、サディという女が居て、みんなからブラック・サディと呼ばれていたんだが、こいつがアルフレッドのところへ来て怒鳴りつけたんだ。

「なんで笑ってばかりいて歌おうとしないのさ。客は笑い声じゃなくて、歌を聴きに來てるんだよ。」

ってね。これがバンド名の"Laughing Trio"の由来さ。でも俺達の演奏はなかなかのものだったぜ。

ジョージア・ホワイトは俺と一緒に演奏するようになる前は、トランペットを吹く女と組んで、女の子ばかり 12 人のバンドをやっていて、結構な人気があったんだ。1950 年からは俺のバンドを辞めて、シカゴ近郊の街で堅気の仕事をするようになった。今もそこで暮らしているよ。

=====

CURTIS JONES

カーティス・ジョーンズは、独特のスタイルのピアニストで、誰もあいつみたいなピアノを弾くやつは居なかった。真似されることはなかったな。

あいつは良い曲をいくつも書いて、"Lonesome Bedroom Blues", "You Got To Change Your Mind"、など沢山のヒット曲を出した。

あいつは誰かと一緒に演奏するって事がなかったよ。独特のスタイルだから、合わせるのが難しいんだ。誰にも出来なかったよ。

あいつは西部出身で、オクラホマのツルサから来たって言っていた。当時 37 才で、かみさんもいたよ。

(章末、注 e)

あいつはシカゴの色々なナイトクラブで演奏していたが、給料についてはいつも、ミュージシャン組合とトラブルになっていた。組合費や税金を払うのが遅かったり、払わなかったりしたんだ。

カーティスは良い奴だったが、ひどい忘れん坊だったな。ある日あいつが、かみさんと一緒に俺の家へやって来て、車で乗っけて行ってほしいと言う。荷物は箱が一つ、小さなトランク、それからスーツケースとラジオだけだ。

「いいよ。でもガソリン代だけは出してくれよ。タクシーの免許はないから、それ以上は取らないけどな。」

と俺は答えた。

「そんな事は判ってらあ。だからあんたの所へ頼みに来たのさ。」

あいつの引越し先はモーガンパークって所で、おれの家からは 25 マイルほどあったよ。それで俺は、まずあいつの家へ行ってあいつの荷物を詰め込み、それから出掛けたのさ。モーガンパークへ着いて、俺はあいつに聞いた。

「場所は何番通りだ？」

「それが判らないんだ。」

しかたなく俺は車を止め、あいつを探しに行かせた。俺とあいつのかみさんは車の中で待てることにした。2 時間ほどして、やっと帰ってきたので

「見つかったか？」

と聞くと、

「見つかったさ。あそこで " 部屋を貸します " という看板を見つけた。」

それでそこへ行ってみると独身の男用の狭い部屋だ。あいつは車に戻ってきて、

「ここは俺しか住めそうにない。お前はビッグ・ビルと一緒に戻ってくれ。夫婦で住める部屋が見つかったら連絡するから。」

と言うのさ。

MY FRIENDS

それで俺はあいつのかみさんを俺の家に連れてきて、部屋が見つかるまで、しばらく住ませてやったよ。まあ、それでもすぐに見つかったけどね。

=====

MEMPHIS SLIM

メンフィス・スリムが初めてシカゴへやってきた時、俺は早速あいつに会いに行ったんだが、あいつは、ルーズベルト・サイクスみたいな演奏をやっていたよ。これが 1939 年のことで、俺があいつに、ルーズベルトに似たスタイルだって言ったら、あいつは否定していたが、おれは確かに似ていたと思うね。

あいつはいくつかレコーディングを残していて、あいつ一人でピアノを演奏しているものもあるし、もう一人に、弦を張ったチューブみたいな楽器を演奏させているものもある。こいつは弦の先が棒みたいなものに張ってあって、チューブの中を反対側まで弦が通っている。弦を弾きながら棒の方を押したり引いたりして、音程を変える楽器さ。あいつらは 2 人で、"Feeloing Low Down", "Beer Drinking Woman"などの、なかなか良い録音を残したよ。

俺とメンフィス・スリムは良い友達だった。俺はあいつが大好きだったよ。その頃あいつには仕事が無くて、俺は自分のリハーサルやレコーディングにあいつを呼んだんだ。そして、"Rock Me Baby Blues", "Walking Blues", "What Is That She Got", "Saturday Evening Blues", "Conversation With The Blues"といった曲を録音した。それ以来、俺とあいつで組んで、他の奴も呼んで、沢山のレコードを吹き込んだ。

1940 年の 2 月 18 日に俺のバンドのピアノのジョシュア・オールシマーが死んでしまったとき、俺はメンフィス・スリムと一緒にやろうと誘ったところ、あいつも乗ってきた。俺達は 1410 クラブ、ルビー・ターバン、ニューヨークのタウンホール、リーガルシアター、8 番街シアター、シカゴのビーブなど、色々な場所で演奏した。

(章末、注 f)

そしてある日、俺はあいつに言ったんだ。

「お前はもう、自分のバンドを作って独り立ちした方が良いぜ。ビッグ・ビルはもう、お前には必要ないのさ。誰かブルースシンガーと、腕の利くミュージシャンを探して、一緒に演るのさ。このビッグ・ビルがやってきたように、メンフィス・スリムとして演奏するんだ。」

あいつは自分のバンドを作って活動を始めたよ。アルトサックスにはアトキンス、ドラムはエディ・ペイン、ベースはブリーズ、テナーサックスはコットン、というメンバーのバンドさ。そしてメンフィス・スリムはアメリカ中で有名になり、いくつかのヒット曲を飛ばしたんだ。

俺はその時初めて見たんだが、あいつのバンドのアルトサックスは、一度に 2 本のサックスを吹いていたよ。はじめ、メンフィス・スリムからその事を聞いたとき、俺は信じられなかった。それである晩、俺はあいつのバンドを聴きにいった、そのアトキンスって男を一番前でよく観てたのさ。するとそいつはその日、クラリネットとアルトサックスを一

MY FRIENDS

度にくわえて演奏していて、それがまた、2人の男と一緒に演奏しているみたいに聴こえるんだ。こんなすごい奴を見たのは初めてだったよ。

最近のメンフィス・スリムは6人のバンドで活動している。どいつも腕利きのミュージシャンだ。特にヒットしたのは、"Motherless Child Blues","Every Day I Have The Blues"だな。他にもあいつのバンドは、良い曲を沢山レコーディングしたよ。

メンフィス・スリムは身長が6フィートと6インチぐらい、かみさんと4人の子供がいる。俺はあいつの親父さんにも会ったことがある。あいつと親父さんは同じ名前なんだ。そういえば、ピーター・チャットマンも、あいつと一番上の子供が同じ名前だったな。メンフィス・スリムの誕生日は9月3日なんだが、その日、俺達はあいつを必死で追いかけた。だってあいつは、ケーキのろうそくの火を吹き消すと、そのまま馬に飛び乗って、逃げて行っちゃったんだ。

以前、あいつの誕生日に俺達があいつを追いかけていると、警察がギャングの喧嘩と勘違いして、やって来た事があった。俺達がようやくあいつを捕まえたと思ったら、今度は俺達がみんな、警察に捕まっちゃったんだ。俺は警察に、俺達が何をやってたかを説明するから、家まで来てくれ、と頼んだ。警察は俺達の所へ来て、話を聞いてくれた。その後、メンフィス・スリムは警察の奴らを座らせて、お茶とケーキを勧めたのさ。で、その間にメンフィス・スリムは例のやつを食らったのさ。

その日は30人ぐらい集まっていた、あいつの奥さんと子供、親父さんも来ていた。スリムが引っ叩かれる間、警察の奴らも一緒になって大笑いしたよ。それから俺達はしこたま飲んで、音楽を始め、男も女も一緒に踊ったんだ。

俺が最初、あいつに、ルーズベルト・サイクスに似ている、と言ったとき、あいつは怒っていたけど、俺の言う意味が判っていたようだった。その後、あいつは演奏のスタイルを変え、メンフィス・スリムとしてのスタイルを確立したのさ。俺とあいつは、色々な場所で演奏したんだが、兄弟のようだと言われたね。最近、エディ・ボーイという男がいて、こいつはちょうど、メンフィス・スリムのような演奏をするよ。ルーズベルトに似ているというよりは、メンフィス・スリムのスタイルに似ているのさ。

あいつがメンフィス・スリムと呼ばれているのは、テネシーのメンフィスの出身だからさ。あいつはメンフィスで生まれ、育ったんだ。

こんな事もあったんだが、スリムと俺がニューヨークの仕事から帰ってきた時、
「酒でも飲もう。」

とあいつが言い出した。それで俺達は酒屋に出掛けていき、100度のグランド・ダッド・ウイスキーと、ゴードン・ジンの5番と、シャンペンを買って込んだ。いざ飲もうとして、ふたを開けてみると、シャンパンの中身が全部飛び出しちまった。シャンパンは、飲みもしないうちに空になっちまい、せっかく16ドルも払ったのに、捨てたようなもんだった。

仕方なく俺達はウイスキーのボトルを開け、それからゴードン・ジンを飲んだ。俺達はそれをすっかり飲み干しちまうと、ぐでんぐでんに酔っ払っていて、家に連れて帰っても

MY FRIENDS

らったのは 1 時ぐらいの事だった。次の日、俺はあいつの家のベッドで目を覚ましたんだが、2 日酔いで気持ちは悪いし、腹ペコだし、ひどいもんだったよ。

=====

LIL GREEN

俺は2年ぐらいの間、リル・グリーンバンドでギターを弾いていた。彼女の曲の、"My Mellow Man", "Country Boy", "Give Your Mama O'Ne Smile"などは、俺が書いた曲さ。実際には、曲を書くって感じではなくて、俺がメロディを口ずさむと、ピアノのヘンリー、ベースのランサム・ノウリング達が、それに合わせてコードを鳴らし、今度は彼女が、それに合わせて、菓子を見ながら歌い始める、そんな風にして曲が出来ていった。

ベースのランサムと、ピアノのヘンリーは、腕利きのミュージシャンだった。俺とヘンリーとランサムは、彼女のバックバンドとして、アメリカの南部の色々な街へ演奏に出掛けたよ。

もちろん彼女みたいなビッグなシンガーにしてみれば、ピアノとギターとベースだけの、俺達のバンドでは小さすぎた。それで俺達は一人ずつ首になったのさ。3回目のツアーでランサムが首、俺は4回目のツアーで首、ヘンリーはニューヨークまで一緒に行ったが、そこで首になり、リル・グリーンはビッグ・バンドをバックにして歌うようになった。

1945年と1946年に俺は、アポロシアターへ、リル・グリーンに会いに行ったことがある。2度とも彼女は、俺を喜んで迎えてくれたよ。彼女が昔の仲間を憶えていてくれて、俺はとても嬉しかったよ。彼女はシカゴへ来たこともあり、その時、俺とランサムとヘンリーに晩飯をご馳走してくれた。でも彼女は、料理をほとんど一人で食っちまって、その後で、何でも好きなものを召し上がって、と言ったのさ。

リル・グリーンは給料の払いが良く、食べ物やウイスキーもたっぷり買ってもらえたから、リル・グリーンと仕事をするのは好きだったよ。彼女は俺達のために、いつも2、3本、ウイスキーを準備してくれた。でも彼女自身は酒も飲まなければ、タバコを吸ってるところも見た事がない。彼女と演奏していた頃に、彼女が酒を飲んでいるのを見たという奴がいたけど、違うと思うな。ある晩、俺とヘンリーが、オレンジ・ソーダのビンにウイスキーを入れて、彼女に渡したことがある。彼女はそれとは知らずにソーダのビンのウイスキーを飲んじゃったんだ。それで彼女、病気になっちゃったんだぜ。

=====

MENPHIS MINNIE

メンフィス・ミニー、本名はミニーマッコイと言って、ギタリストとしても、シンガーとしても、凄かったよ。ヒット曲も何曲か残している。最初のビッグヒットは、"Bumble Bee Blues"で、その時は、彼女の夫がギターを弾いていた。ギター2本でプレイしていて、彼女がリードを弾き、旦那のジョー・マッコイが伴奏するのさ。

このヒットは1928年で、ボカリオンというレコード会社、これはコロンビアと同じ会社なんだが、ここからリリースされた。その後、彼女と旦那は離婚して、それからしばらく、彼女は、ブラック・ボブというピアニストと一緒にレコーディングしていた。

しばらくして彼女は、リトル・ソン・ジョーという男と再婚して、2人で良い曲を作るようになった。旦那がほとんどの曲で伴奏していたよ。"Me And My Chauffeur", "Looking The World Over", "Dirty Mother For You", "Have You Seen My Man Today", それから、"Black Rat Blues", "Black Rat Swing"など、沢山の良い録音を残した。

シカゴにはもう一人、メンフィス・ミニーと名乗ってる女がいた。俺はそいつに会ったとき言ってやったよ。

「お前は全然、メンフィス・ミニーなんかじゃないぜ。本物のメンフィス・ミニーは、歌もギターも、俺の知っている男達よりも断然上手いぐらいだぜ。お前は所詮、女のギタリストって程度さ。」

メンフィス・ミニーのギターは、歌い、泣き、呻き、語り、ブルースが聞えてくるのさ。俺は彼女と一緒に演奏していたから判るんだ。俺と彼女は、1933年の6月26日、俺の誕生日に行われた、アメリカで初めてのブルースシンガーのコンテストに出場したんだ。

会場は混んでいた。出場は自由で、色々なミュージシャンが来ていて、それぞれ酒を飲んだりしていたよ。俺とミニーの勝負は、商品がウイスキー1本、ジン1本。3人のジャッジが判定するんだ。

先に演奏するのが俺、という事になっていて、会場は1階、白人と黒人のジャッジがガラスの向こうで見てるんだ。俺は、"Just A Dream", "Make My Gataway"の2曲、彼女の方は、"Me And My Chauffeur", "Looking The World Over"の2曲を歌うことになった。

ほとんどのミュージシャンの演奏は終わり、俺達の番は1時30分からの予定だった。その頃には、俺もミニーも、すっかり酔っ払っていたよ。みんなが言うんだが、

「あいつ、女を相手に勝負してかわいそうだと思うねえのかよ。ギターで女なんかをやっつけて、恥ずかしくねえのか。」

一人の白人がやって来てこう言う。

「お前はこの辺りでは1番のブルースプレーヤーなんだ。あの女のギタリストと勝負するんじゃ、面白くもないだろ？」

彼女はまだシカゴに来たばかりで、レコードを作るときは、旦那がメンフィスに連れて

MY FRIENDS

行っていた。メンフィス・ミニーの演奏を聴いたことがある奴は居なくて、みんなこんな事を言っていたんだ。白人の奴はこんな事も言ってた。

「ビル、ジャッジはフェアにやるんだろうな。」

「もちろんさ。俺達は3人の凄いミュージシャンにジャッジを頼んだんだ。」

「それは誰だ？」

「スリーピー・ジョン・エスティス、タンパレッド、そして、リチャード・ジョーンズさ。」

「ああ、あいつらならブルースが判っているだろう。でもフェアに頼むぜ、みんなあんたが勝つて期待してるんだからな。」

「そいつはどうか判らないぜ。でも是非勝って、あの2本の酒を頂きたいね。そしたら早速、隅っこに行行って飲み始めることにするよ。」

男は笑いながら言った。

「何か必要なものがあれば電話しなよ。すぐ持ってきてやるからさ。」

会場には白人が40人ぐらい集まっていた。1時30分になって、タンパレッドが俺を立てて紹介すると、会場はどよめいた。演奏を始めるまで、10分ぐらいこうしていたよ。1曲目は人気のある"Just A Dream"。それから、"Make My Gataway"を歌って、俺はステージから降りた。

それからタンパレッドが、メンフィス・ミニーを立てて紹介したんだが、会場はシーンとしちまったよ。でも彼女が、1曲目の"Me And My Chauffeur"を歌い始めると、会場は20分ほどの間、大いに盛り上がった。そして、2曲目は"Looking The World Over"を歌った。

ジョン・エスティスとリチャード・ジョーンズは、ステージに上がってミニーを持ち上げ、ホールの中を練り歩いた。彼女の旦那がそれを見て、

「一人でも歩けるんだ。降ろしてやれよ。」

と叫んだ。

旦那は嫉妬深い男だったからね。結局、メンフィス・ミニーの勝ちで、ボトルは彼女に取られちまったんだが、俺はボトルが彼女に渡されるのをじっと待ち構えていて、横からウイスキーをかつぱらい、早速飲み始めた。彼女は文句を言ってたが、大丈夫さ、なんて言って飲み続けた。

俺とミニーは昔なじみで、俺はミニーの大ファンさ。彼女の話だと、生まれたのは1900年の6月24日、身長は5フィート5インチぐらい、体重は100ポンドぐらいの肌の濃い女さ。彼女はミシシッピで生まれて、メンフィスで育った。彼女の、兄弟、姉妹にも会ったことがあるよ。

俺とミニーは一緒に、アメリカ中のナイトクラブを回った。他にも女のギタリストを聴いたことがあるが、ミニーが一番上手いよ。彼女は今もシカゴにいて、地元の208人のミュージシャン組合のメンバーさ。今でも最高のギターをプレイしながら歌っているよ。

(章末、注g)

MY FRIENDS

=====

TOMMY MCCLENNAN

トミー・マクレナンは独自のスタイルのギタリストだった。ギターを弾くには E,A,B のコードが押えられりゃ良くて、指を伸ばして弦を押えながらブルースを歌えばいいって訳さ。E,A,B のコードのチェンジは、変えなくなったときに変えればいい。いつでもいいのさ。あわてず目を閉じて変えればいいんだ。

トミーは、いい録音を沢山残していて、"Bottle Up And Go", "Gin Head Woman", "Boodbye Baby"などのヒット曲を出したが、歌詞の言葉が問題で、リリースされなかったものもあるよ。

"Bottle Up And Go"がリリースされたとき、こんな歌詞が入ってて、あいつはニグロ達に嫌われることになった。

”ニガーと白人が、セブン・アップをプレイしている
ニガーは白人を殴りつけた、怖くてボトルが拾えない
ボトルを拾って行くしかない”

ミシシッピの連中は、ニガーと呼ばれてもあまり気にしないよ。お互いにニガーと呼び合っているし、みんながそう呼ぶからね。でも、シカゴやニューヨークでは、こういう呼び方は止めたほうがいい。トミーはシカゴが初めてで、そういう事を知らなかったんだ。北部のニグロもこういう言葉を使わないわけじゃないが、白人や肌の薄いニグロがいる所では、こういう言葉は絶対に使わないんだ。肌の濃いニグロは、肌の薄いニグロに、ブラックと呼ばれるのが嫌なのさ。ニガー、ブラックという言葉が原因で、血なまぐさい事件が沢山起こったよ。俺やトミーは、こういう言葉をあまり気にしないけどね。

=====

トミーは 1908 年に、ミシシッピのヤズーで生まれた。4 月に生まれたと言っていたよ。あいつの身長は 5 フィートと 7 インチぐらい、体重は 130 ポンドぐらい、肌は本当に黒かったよ。

メルローズという白人がトミーを録音しようとした時、俺は、ミシシッピであるようなトラブルに巻き込まれないよう、気をつけるように言ってやった。彼は、自分も白人だし、そういう事は判っている、と答えた。

「ミシシッピでは大丈夫なんだが、北部の場合、あいつらは、ニグロの連中に囲まれたところで白人に会ったり、話しかけられたりするのをひどく嫌がるんだ。誰かニグロに頼んで、街の外でトミーの居場所を聞くほうが良いかもしれないよ。」

でも、メルローズは俺のアドバイスに従わず、自分でそこへ行ってしまう、トラブルに巻き込まれることになった。彼は車を置いて逃げて帰ってきたんだ。車は後から運んでも

MY FRIENDS

らい、トミーには、シカゴまでの交通費を送ってやることになった。彼に会ったら、

「ビル、あんたの言う通りだった。あそこじゃ俺は、ひどく嫌われたよ。」

トミーのいる農場は、ヤズーの街から 15 マイルぐらいにある。そこまでは一本道で、必ず、農場主の家の前を通らなくちゃいけないんだ。あいつらは、よそ者が来るのを用心していて、ひどく嫌がるんだ。

「あいつら、俺のことを、白人とは呼ばず、ヤンキーって言ってたぜ。ビル、ヤンキーってどういう意味さ？」

「つまりあいつらは、北部の白人が、自分達の農場とか、500～600 人のニグロが働いているような場所にやってくるのが嫌なのさ。あいつらの農場やキャンプに行くのを止めにしないと、怪我をするかもしれないぜ。」

「怪我じゃすまないな。あいつら、俺を殺す気だったぜ。逃げなきゃ絶対にやられてたな。もう二度とあんな場所には行かねえよ。」

それから彼は、アーティストを探すときは、必ず俺に頼むようになった。自分では南部へも行かなかったよ。

=====

トミーは、RCA ピクチャーで 8 枚のレコードを録音したんだが、俺はその時、あいつと一緒にスタジオにいて、こう言ってやったんだ。

「トミー、この歌はトラブルになりそうだぜ。ニガーと白人のところの歌詞を、こんな風に変えたほうがいいんじゃないか。」

”大男と小男がセブン・アップをやってる

小男は勝ってるが、金を取り上げられるんじゃないかって怯えてる

それでボトルを取り上げて、立ち去るしかない”

でもあいつは怒って、言った。

「いやだね。俺はこの歌詞を変える気はねえよ。」

それであいつ、歌詞はそのまま出しちまった。あいつが感じていたことは、ある意味、正しかったと思うよ。俺も、トミーが生まれる前に、同じ言葉を使って歌っていたことがある。でもここは北部なんだ。俺だったらそんな事はしない。レコーディングするようになるまでに、3 年ぐらい暮らしている間に、この辺りのニグロの連中は、ああいう言葉が嫌いだって事が良く判ったんだ。そんな話をトミーにしてやったんだが、

「クソ食らえ。」

と言ったきり、耳を貸さないんだ。

ある日、トミーがレコーディングをしていて、友達から俺に電話が掛かってきた。今晚のパーティーにトミーを連れて来てくれ、そう言うんで、トミーを連れて行った。会場はブルースシンガーで満員で、みんな、トミーに歌わせろというのさ。俺はトミーのところ

MY FRIENDS

へ行って、その事を伝えた。

「でも、"Bottle Up And Go"は、歌っちゃ駄目だぜ。」

「うるせえ。何を歌うかは俺が決めるんだ。」

俺は何かトラブルになりそうだと思って、あいつが歌うときには、傍についていることにした。そして、例の歌詞のどこに来ると、案の定、えらい事になった。俺はトミーを窓から外に押し出して、2人で5マイル先の別のトン立ちの家まで逃げたよ。そして、そこでまた飲みなおしたんだ。

「こうなるって言ったじゃねえか。」

「確かにそうだな。本当に、ボトルを持って立ち去ることになっちまったな。でも戻って、ギターを取ってこないといけないよ。」

「その必要はねえよ。」

「なぜだい？ビル。」

「あんたの首に、ギターの残骸がぶら下がってるよ。」

「これは、ネックのかけらしが残ってねえ。あそこへ戻って、あいつらに、俺のギター代を払わせてやる。」

「行きたけりゃ、行けばいいさ。でも俺は行かない、家へ帰るよ。お前も俺ん所へ来たほうがいいな。でないと2度とヤズーの故郷へ帰れなくなるぜ。」

それで俺達二人は、俺の家へと帰ったのさ。

=====

北部のニグロの連中は、肌の薄いニグロから、ニガーとかブラックとか呼ばれるのをひどく嫌がるよ。本当に嫌なんだ。でも周りにいるのが全員黒人で、肌の濃いやつばかりなら、互いにブラックとかニガーと呼び合って、気にしない。そこへ白人や肌の薄い奴が入ってくると、こういう言い方は止めたほうがいいんだ。北部に行ったときは、こう言う言葉を使うのは止めたほうがいいな。

白人も黒人も、ミュージシャンは互いに、ニックネームで呼び合う。黒人のミュージシャンは、白人のミュージシャンを"Old Fay (フェイじいさん)"と呼び、白人のミュージシャンは黒人のミュージシャンのことを、"Old Spade(スペードじいさん)"と呼ぶ。それでお互いに、怒ったりすることはないよ。お互い、この呼び方が気に入ってるんだ。

白人の中にも、ブルースをなかなか上手く演奏するやつもいる。例えば、フランク・メルローズなんかがそうさ。あいつらはいつもニグロと一緒に演奏してる。たまにそんな奴のことをニグロ、と呼ぶこともあるが、あいつらは気にならないようだな。あいつらは、「ニグロミュージックをやろうぜ」と言って、ニグロの連中に負けないぐらい上手く演奏する。でもあいつらには、本物のブルースは歌えねえよ。あいつらもブルースの歌詞だけなら歌うことも出来るだろうが、本当に歌おうと思っても、歌えるのは、ビッグシティブルースのような、洗練されたやつだけで、本物のミシシッピのブルースは無理なのさ。あいつらが演奏できるのは、例えば、ジェリー・リー・モルトン、スペックルド・レッド、ジミ

MY FRIENDS

ー・ブレイズ、ブラインド・ジョン・デイビス、カール・シャープ、こういった、ビッグ
シティスタイルのものなのさ。

肌のうすいニグロ達は、こんな風に歌う

” ベリーは濃いほど、ジュースはおいしくなる
俺だけの本当に黒い女が欲しい ”

濃いニグロの場合はこうだ。

” 黒い女にパンを焼かせるのはコリゴリだ
黒い女は性悪で、俺はまたムショに逆戻りさ ”

白人と黒人の混血のやつの場合は、どっちを歌ったとしても、黒人の連中から殴られる
ことになるだろうな。黒人の男が聞けば、自分の姉妹の悪口を言われたと思うだろう。で
も、色の濃い男は肌の薄い女と結婚したがるし、色の薄い男は色の濃い女と結婚したがる
もんだ。黒人の男女が一緒にいて、

「自分達は黒人であることに誇りを持っている」

って言うのを聞くことはめったに無い。でも、俺はそうじゃない。

=====

WASHBOARD SAM

ワッシュボード・サムは、なかなかのブルースシンガーだったよ。あいつは、"Longest Train I've Ever Seen"という曲を書き、その他にもたくさんのヒットを残した。俺はあいつにたくさんの曲を書いてやって、それも結構ヒットしたぜ。例えば、"Somebody Changed that Lock On My Door","She Never","Somebody's Got To Go","Who Was That Here A While Ago","Mama Don't Allow That","Flat Foot Floogie","Your Time Now","Back To Arkansas","Digging My Potatoes","Stop And Fix It","Outskirts Of Town","Baby Don't You Tear My Clothes"など、これらは俺が書いてヒットした曲さ。

あいつは歌も上手いが、演奏の方は洗濯板をやっていた。あいつは指先に 7 つのシンバルをつけて、そいつで洗濯板を撫で下ろすように動かし、自分の歌に合わせて、音程やリズムを変えるんだ。

あいつは色々なアーティストと一緒に演奏していたよ。例えば、ボブ・コール、ランサム・ノウリング、ジャッジ・ライリー、メンフィス・スリム、ルーズベルト・サイクス、サックス・マレット、ブラインド・ジョン・デビス、ジョシュア・オールシマー、バスター・ベネットなどさ。あいつのレコードのほとんどは俺が参加しているよ。だって俺が曲を書いて、あいつに歌い方を教えてやっていたからね。あいつの歌は音程が外れちゃうことが多くて、俺はあいつに歌って見せてやり、洗濯板のリズムを取ってやることもあったよ。

ワッシュボードと俺は、義理の兄弟なんだ。なぜかって言うと、親父には隠していた別の女がいて、そいつが俺の家から 35 マイルほど離れたところに、80 エーカーほどの農場を買ってもらって住んでいたのを、俺のお袋がを見つけ出したんだ。この女ってのが、ワッシュボードのお袋なんだ。

ある日、お袋が俺の部屋に来て、まだ 5 時なのに起きろと言う。

「いったい、こんな朝っぱらからどこへ行くんだ？」

「これからスカンクを撃ちに行くのさ。」

俺はこの時、それが親父の事を言ってるって、判らなかったよ。

「ショットガンと一番早い馬を 2 頭、バギーに繋ぎな。食糧も積み込むんだよ。明日まで帰ってこないんだからね。」

俺は親父が持っている一番良い馬に乗れると聞いて喜んだよ。親父が家にいると、乗せてもらえなかったからね。俺が乗せてもらえたのは、せいぜいラバだった。俺達は準備が出来ると出発したのさ。

11 時頃には、ウォールナット・リッジという小さな街に辿り着いた。お袋はバギーを降りて、ビクター・ボジスさんという白人に話しかけた。お袋はその男の親父さんの家でコックをしていたので、お袋を知っていたんだ。話が終わり、バギーに戻ってくると、俺

にジンジャー・ブレッドを一つ渡し、

「止まれって言うまで、バギーを進めな。」

と言うので、俺はまたバギーを走らせた。

30 分ほど走ったところで、お袋は、

「止めて。私が戻ってくるまで待ってるんだよ。」

といってバギーを降り、バギーの後ろからショットガンを取り出した。

「お袋、スカンクはどこにいるんだい？」

「あたしにゃ、匂いで判るんだよ。」

でも俺には、何の匂いもしないんだ。お袋は古い双胴のショットガンに 2 発の銃弾を詰め込んで、一軒の家へと近づいていった。お袋は十分近づくと、親父の名前を呼んだんだ。親父はフランクという名前なんだが、「フランク！」とお袋は叫んだよ。すると裏口が開いて、女が一人、着の身着のままの姿で駆け出した。俺は可笑しくなってきた。お袋はその女を見つけて、古いショットガンをぶっ放した。すると親父が窓から飛び出してきて、とうもろこし畑に逃げ込んだ。お袋はもう一発、ショットガンをぶっ放したよ。そして俺とお袋は、家に帰ってきたのさ。

「お袋、俺達はスカンクを撃ちに行ったわけじゃないよね。」

「そうさ。巣穴には 2 匹いたけどね。」

お袋は親父に対して怒り狂って、泣いてばかりだった。そんな姿を見ていたら、俺も親父のことが腹が立ってきた。家に帰った晩、お袋は 1 マイルほど離れた、マーグラルさんという白人の人の家を訪ねていった。

「ミッティ、どうしたんだ？」

「旦那様、お話したいことがあるんです。」

男はお袋を家にいれ、ポーチでしばらく話をしたんだ。俺にもその話が少し聞えてきたよ。

「私、農場を売ってしまいたいんです。」

「どの農場を？気でも違ったのかい？あんたには 15 人もの子供がいるんだぜ。」

「いいえ、うちのじゃないんです。ウォールナット・リッジの農場です。」

「ああ、あれの話ね。どうして気付いたんだい？」

と男は笑った。

「OK、ミッティ。言った通りにしよう。明日の朝、街で会おう。お金はその時に渡すよ。」
こうしてお袋は、あの農場を売っちゃまったのさ。

2 週間ほどして、俺がラバにエサをやりに行くと、親父が納屋の中で寝ているのを見つけたよ。

「家へ行って、パンが何か、持ってきてくれないか。腹ペコなんだ。」

それで俺はキッチンへ行き、パンを少し持って出てきたんだが、そこでお袋に捕まっちゃった。

MY FRIENDS

「そのパンをどこへ持っていくんだい？スカンクのエサかい？」

「違うよ、母ちゃん、父ちゃんにあげるんだよ。」

俺は泣き出しちゃった。すると他の子供達もみんな集まってきたんだ。俺は親父が納屋で寝ている話をみんなにしたんだが、それを聞いてみんなも泣き出しちゃった。お袋は笑いながらこう言ったよ。

「行ってスカンクを連れてきな。あいつにコーヒーを入れてやるよ。」

俺達はみんなで納屋へ行き、親父を連れてきた。でも親父は、家に入る前に

「母ちゃん、俺の事を何か言ってたか？」

と聞いた。

「母ちゃんは、ろくでなしの野良犬って言ってたよ。」

と俺が言うと、姉ちゃんが、

「違うよ、首の長いラバって言ってたわ。」

と言った。

それでみんな喧嘩になったんだ。すると兄弟の中で一番親父に似ている、ガスターブという姉ちゃんが、こう叫んだ。

「母ちゃんが、早くスカンクを連れて来いって言ってるわよ。コーヒーの準備が出来たんだった。」

親父は、ジムっていう俺の兄さんに、

「俺が入る前にお前が入って、スカンク殺しの道具を取って来い。」

と言った。俺達はみんな笑ったよ。つまり、ショットガンを取って来い、と言ったのさ。

それから 3、4 日して、ようやく親父は、普通に家で食事が出来るようになり、俺達兄弟 15 人は、また幸せな生活に戻ったよ。

ワッシュボード・サムが義理の兄弟だっということがわかったのはこんな話さ。これがちょうど、1910 年のことで、確かワッシュボードはこの年に生まれていたはずさ。

2、3 年して、親父は、俺とジムとジェリーを連れて、ワッシュボードとあいつの姉妹に会いに行ったことがある。あいつの名前はロバートで、姉妹の名前は、ロザリーと、メアリーさ。俺達兄弟は、彼女達に会って、

「あいつ、メアリー姉さんにそっくりだな。しかも名前まで同じだ。」

と言った。親父は、

「彼女はお前達の姉妹さ。こっちは兄弟のロバートさ。」

と言った。

親父は時々、この子供達に会っていたようだ。でも、ワッシュボードのお袋さんには、ブルーンジーというファミリーネームは名乗らないように言っていた。あのショットガンが怖かったんだろうな。それであいつらは、爺さんの名前から取って、ブラウンと名乗ったよ。だから、ワッシュボード・サムの本名は、ロバート・ブラウンさ。

MY FRIENDS

この話はみんな、1910 年のアーカンソーでの話しさ。当時俺は 17 才だった。ワッシュボードと初めて会ったのは、1916 年で、この時俺は 23 才、もう結婚していて、よくあいつらに会いに行ったよ。1918 年からは軍隊に出て、しばらく会わなくて、その次は、1925 年にメンフィスで会ったんだ。その時には、あいつは大男になっていた。1932 年にあいつはシカゴへやって来た。長い間、俺達と一緒に暮らしていたよ。それから俺はあいつに、歌と洗濯板を弾かせるようになり、RCA ビクターからレコードまで出したんだ。1947 年ぐらいまで、録音を続けていたよ。

その後あいつは、気楽ではあるけど危険な仕事、警察官になったんだ。今もあいつは、シカゴで警察官をやってる。あいつなら良い警官になるだろうな。自分が何度も逮捕されているから、逮捕の仕方をよく知ってるんだ。あいつが逮捕される度、俺は拘置所まで、身柄を引き取りに出掛けて行ったよ。昔のあいつは、何かを始めるとのめり込んでしまうやつだった。それでも今では、いい大人、立派な警察官さ。

今じゃ結婚して、2 人の子供がいる。家族を愛していて、仕事が終わると飛んで帰るんだそうさ。

そんな話を、あいつのかみさんが教えてくれたのさ。

(章末、注 h)

MY FRIENDS

=====

以下の情報は、アメリカ版の出版に先立って、筆者によって補充されている。

a) Sleepy John Estes

後に、ビッグ・ビルによると、1953 年 3 月に死亡した聞いているが、1962 年、テネシーのブラウズヴィルにて、ブルース専門家のボブ・ケスターによって発見された。盲目にはなっていたが、まだ演奏することが出来、デルマーク・レーベルに録音を残した。

エスティスは、テネシーのリプリーで 1904 年 1 月 25 日に生まれたと言っている。

ビッグ・ビルは事実と風説に基づいて語っていると思われるが、もちろん日付に関しては意図的に変更されているようだ。

b) Tampa Red

ヤニック・ブルイノフのインタビューによると、タンパレッドはジョージアのスミスヴィルで 1903 年の 1 月 8 日に生まれた。これは他の公的資料においても裏付けられている。

c) Lonnie Johnson

ロニー・ジョンソンの誕生日には諸説がある。1894 年 2 月 8 日にニューオーリンズで生まれたとの説がもっとも有力。彼のパスポートの記載もこの日付である。

d) Sonny Boy Williamson

ここでは記述が混乱している。

当時、アーカンソーに住んでいた、シンガー、ハーモニカプレイヤーはライス・ミラーで、彼は後に、ソニー・ボーイ・ウィリアムスン(世)の名で知られている(Trumpet and Checker records)。ソニー・ボーイ・ウィリアムスは、シンガー、ピアニストで、40 年代までシカゴで活動していた。

e) Curtis Jones

1962 年 1 月からヨーロッパに移住しており、そこでのインタビューによると、カーティス・ジョーンズは、テキサスのナプレスで 1906 年 8 月 18 日に生まれた。

f) この日付について、ビッグ・ビルは確信を持っているようだが、この年の後半に、オールシマーはレコーディングしており、11 月 18 日に死亡したと考えられている。

g) Memphis Minnie

ボブ・ケスターがスリーピー・ジョン・エスティスにインタビューしたところによると、彼はこのようなコンテストを覚えていないという。あまりはっきりした記憶は無いようだ。当時、このようなコンテストは頻繁に開催されていたので、エスティスが忘れてしまった

MY FRIENDS

か、あるいは、判定結果がここでの記述とは違っていただのかもしれない。

初版の出版後、ミニーの二人目の夫、リトル・ソン・ジョー（アーネスト・ローラーズ）は、1961 年に死亡している。ミニー自身も 1960 年に発作を起こし障害が残ったが、現在もテネシーのメンフィスで生活している。

h) Washboard Sam

ビッグ・ビルが述べたワッシュボード・サムについての話は、ほとんどが想像によるものと思われる。義理の兄弟だという主張も、可能性が無くもないが、甚だ疑わしい。シカゴで長年に渡って共同で生活し、ブルースミュージシャンよくやるように、互いに ” ブラザー ” と呼び合っていた、というのが事実のようだ。もちろん、ワッシュボード・サムが警察官になったという話も、事実とは考えづらい。非常に気まぐれな人生を歩んだサムが、警察官になるという話を、ビッグ・ビルは、洒落たジョークだと考えたのではないか。

ENVOI

結び

俺がこの本で書いたブルースプレイヤー、シンガー達は、まだ死んでいなければ、俺が書いたちょっと良い話を見て、きっと喜んでくれるんじゃないかな。死んだ後ならどうだって？死んだら何も話せないし、金をせがんだり出来ないだろ。

俺が思うに、100 万ドル売れたレコードを出したのに、1 ドルの収入にもならなかったなんて、昔の話を蒸し返されるのは、あまり良い気持ちじゃない。レコードを出しても、その金では全然、自分や家族を養うことが出来なくて、別の仕事を続けなくちゃならなかったんだからね。そして、年を取ってくると、スキヤワゴンが引けない、老いぼれのラバみたいに扱われる奴もいるんだ。放し飼いにされて飢え死にするか、撃たれて処分されるか、どっちかなのさ。

俺自身としては、こうして、自分の人生を読むのは嬉しいことさ。これはみな、俺がどう生きてきて、あいつらの知っているビッグ・ビルがどれほど飲んだかって、そんな程度の話だが、そんな事は気にしねえよ。これはすべて本当の話で、俺には楽しく読めるんだ。

でももし、あんたが俺の事を書く機会があったら、ジャズミュージシャンだとは書かないで欲しい。ミュージシャンだとか、ギタリストだとか書かず、こう書いて欲しいんだ。

ビッグ・ビル。1925 年から 1952 年までに 260 曲を録音した有名なブルースシンガー、プレイヤー。陽気な酒飲みで、いつも女と遊んでいた。多くのブルースシンガーに愛され、妬まれることもあったが、そんな時、ビルは、ウイスキーを一本買ってきて飲んで笑い、また演奏を続けた。ビルはいつも、パーティーの途中で酔っ払ってダメになり、家に帰って寝た。

ブルースシンガーの中には、歌は歌うが、酒は飲まないって奴もいた。でもビッグ・ビルは違った。彼はウイスキーが大好きで、正真正銘の飲んだくれだった。

訳注

文中には差別用語とも取れる表現が含まれるが、原書の意図を鑑みて、相応の訳出を行った。意図を了承いただきたい。

ゲイトウッド ... 50年代シカゴのライブハウス、タヴァンのオーナー。

レスター・メルローズ ... RCAのプロデューサー。

サッチェル・ペイジ ... 有名な野球選手。

ジッター・バグ ... スウィング・ジャズに合わせて踊るダンス。

レビー・キャンプ ... 堤防など河川工事現場の仕事。

ムーン・シャイン ... 密造酒。

WPA ... 公共事業推進局。

ヤニック・ブルイノフ ... ベルギーのジャズ評論家。

チャールズ・エドワード・スミス ... ブルース/フォーク・シンガー。

スタンリー・ダンス ... アメリカのライター、レコードプロデューサー。

スタッズ・ターケル ... アメリカのDJ。パーソナリティ。

ユーグ・パナシェ ... フランスのジャズ評論家。

ブレッシー対ファーガスン裁判 ... 人種差別の合憲性を支持したアメリカ合衆国の裁判。

クーン・シャウト ... シート・ミュージック時代の黒人音楽のスタイルの一つ。

メディスン・ショー ... 芸で客を集め薬を売る、旅回りの一座。

ミンストレル・ショー ... 白人の芸人が、黒人風の歌やダンスをやるバラエティ・ショー。

ジム・クロウ ... 擬人化された田舎の黒人のキャラクター。黒人隔離を意味する場合もある。都会の黒人、ジップ・クーンと対を成す。

ニグロ・ダイジェスト ... 雑誌。後に広く読まれる Ebony の前身。

Big Bill And The Country Blues

BIG BILL AND THE COUNTRY BLUES

Big Bill And The Country Blues

ビッグ・ビルとカントリー・ブルース

(アメリカ版への序文)

チャーリー・エドワード・スミス

「俺は森へ出掛けて行っては、切り株の上に立って歌っていたもんだよ。

小僧達からは、気ちがい扱いさ。

” あんたは、ランデイルいちの気違いだ ” ってね。」

「ビッグ・ビルを知らない奴はいないよ。」1950年代に、ベテラン俳優のジョン・ネヴィルはこう言って、「知らないなんて誰さ？」と少し逆説的に付け加えた。

スタッズ・ターケルは、イギリスから来たばかりのこの狂信者の真剣な言いようを見て、「でも、ビッグ・ビルの故郷では、100人中、99人は、ビッグ・ビルの曲を聴いたことがないんですよ。」と、あっさり答えた。

ネヴィルは驚いたようだ。ビッグ・ビル・ブルーンジーのコンサートと言えば、イギリスではちょっとした話題になっていたのだ。それはヨーロッパ本土でも同じだった。しかしここは、ビルの故郷だ。スタッズはそれを判って話している。その頃は、泥臭い、田舎風のブルースが聴けるのは、ニューヨークのハーレムに似た、シカゴ南部地区のクラブぐらいしかなかった。そんな時期にスタッズは、ブルース・シンガーのレコードをラジオでかけ、シカゴと中西部では、優れたドキュメンタリー番組を放送した。後にこの番組は、"Big Bill Broonzy Interviewd By Studs Terkel(Folkway FG3586)"という歴史的なアルバムとなった。

1950年代のシカゴにおけるビッグ・ビルの評価は、随分偏ったものだった。ジャズクラブなどで演奏すると、カントリー・ブルースへの理解がある人たちには素晴らしい演奏であることが理解してもらえるのだが、他の人たちは、酒と会話に夢中で、演奏には耳も貸さないのだ。マディ・ウォーターズのように、ブルースに造詣のあるリズム＆ブルース・シンガーには、ビッグ・ビルを尊敬していると表明しているミュージシャンもいたが、若いロック＆ロール世代が彼のことを「ダウン・ホーム」だと言う時は、それは敬遠する態度を表していた。中高年の世代で、ビルのように、いわゆる南部の出身の者たちが「ダウン・ホーム」と言ってため息をつく時には、それはちょうどコインがひっくり返るようにして、軽蔑から、温かさや仲間意識といったものへとその意味が変化する。コインのきらめきを見なかった者は、ビルの演奏を見るのを止めて立ち去ってしまうだろう。もちろん、ガタガタ言うまでもなく、彼はそんな事は承知の上なのだ。

シルビオズのようなバーでは、ビルのライブがある日には、年配の人達がいつもやって来ていて、故郷の歌、ブラック・ベルトの歌を楽しむ。時にはビルも、コンサート・ホールや、クラブで演奏する事もある。ここでの聴衆はまったく別の人達だ。ビルがジャズ・クラブであるブルーノートに出演した時、カウント・ベイシー、ベニー・グッドマン、そ

してもっと若いジャズマン達も、ビルが単なるフォーク・アーティスト以上のミュージシャンである事に気付き、そしてその音楽性を再認識したのだ。ここでの、ブルーノートとシルビオズを結ぶ何かを定義することは難しい。歴史や人間への理解こそあっても、綿花の農場やレビーキャンプとは無縁の生活をしてきたデューク・エリントンは、クラブの後ろの方の席で暗がりの中に座って、じっと演奏を聴いていた。そしてつぶやいた。「ああ、ビル。こんな音楽は彼以外にはない。俺はこれが大好きなんだ。」

ビッグ・ビルの風貌は印象的だ。大柄で色が濃く、肩幅が広い。街を行く人達も振り返る。彼の柔和な表情を見ると、彼の中に潜んでいるものが何であろうかと考えてしまう。いつもの大笑いや馬鹿騒ぎが隠れているのか？あるいは隠された傷や暴力性だろうか？とっぴな子供の発想の歌？これらのすべて、そしてもっと違うものも、彼の中に潜んでいるに違いない。ビルは、生々しくも荒々しい人生の生活に、どっぷりと浸かりこんでいたのだ。彼が姿を現すと、しばらく無言で考え込み、そして突然、大声で笑い出す。これはどちらも彼の本当の姿だ。レコーディングセッションの時には、いつもこんな調子なのだと、以前に彼自身もこの事を語っている。本当に歌おうとするためには、抵抗する何かを打ち破らなければならなかったのだろう。このようにして周りの雰囲気盛り上げ、気さくな態度を振りまく。そして、ある所へと向かって、ギターと歌のサウンドが深まっていく。立ち振る舞い、座り方、腕、肩、顔の表情、すべてが彼の歌の一部なのだ。

「ブルース・シンガーとは何だろうか。いいの？悪いの？」この自伝の中で、ビッグ・ビルは自問している。「金に目がくらんだ男女の晩飯のチケットみたいなもんさ。」ブルースの真実、と題して語られた事実の内容に関して言うと、特にその日付について、多くの誤りに気付く。おそらくあなた方は、それも一つの真実として受け入れてしまうだろうし、それがありのままの事実なのだ。(この“バターミルクのハエ”は、ルソーのジャングルの絵の中のソファを思い出させる。事実とは異なっても、赤いものを加えて脚色しているのだ。) ビルの母は奴隷に生まれたが、綿花農場の労働の中でも恋愛を育む若々しい女性として描かれている。その一方で、ビルがリトルロック郊外のさびれた家に住んでいる母を訪ねたとき、母親は昔ながらの偏見で楽器を嫌っており、ビルはギターを外に置いて家に入ったという話もある。1940年代にリトルロックで活動を始めた頃の事を、こう語っている。「初めてアーカンソーのバーに出演した時、母はドアの外に立ったまま、中に入れなかったんだ。」またビルは重要なことを付け加えている。「店の連中は、母が誰か判ったので、母からは金を取らなかったよ。」またクライング・メアリーについて言うと、線路敷設隊で料理をする時にいつも殴られていたこの女は、哀れではあるが、ジョン・エスティスの歌の中に実感を持って浮かび上がる。

”子供たち、しっかり持ったかい？

もしまだなら、しっかり持つんだ。”

Big Bill And The Country Blues

ビルの話には虚飾が多いからといって、スタッズ・ターケルはビッグ・ビル・ブルーンジーに対する評価を止めてしまったわけではない。「ビルが語ったのは客観的ではないが、主観的な事実なのだ。」

ユーク・パナシェの「ガイド・トゥ・ジャズ」(Houghton,Mifflin,1956)によると、ビルは1893年6月26日にミシシッピのスコットで生まれたとなっている。彼は17人兄弟で、子供の頃から、夜遅くまで働いていた。彼の名前はウィリアム・リー・コルニー・ブルーンジー、義理の兄弟のワッシュボード・サムと、名作駄作を含め、多くのブルースの録音を残した。アーカンソーで育ち、生まれたミシシッピとの間を行き来して暮らした。1915年までは小作農として働き、その後、干ばつで作物を失って炭坑で働くようになった。AEFでニグロとして働いた後、家へ戻った頃には、以前のような田舎の若者ではなく、せかせかした怒りっぽい男になっていた。しばらくして彼は、北部のシカゴへ移り住み、ブルマン社で働きながら、黒人レコードの看板アーティスト、パパ・チャーリー・ジャクソンの下で、ギターに熱心に取り組むようになった。初期のレコーディングには少ないが、ビルの歌からはプロテストを感じる。端正にまとまっているとは言えないが、善悪のあるブルースへぶつかって行く勢いがある。

1930年代には、彼は商業的には、ブルースという分野のトップ・アーティストだった。しかし、後に一つの産業と言えるほど発展するリズム＆ブルースという分野を出てしまうと、驚くほど知名度は低かった。ブルースやジャズの熱狂的なファンの中には、彼のレコードを知っているものもいたが、それは少数で影響力は無かった。やがてそんな少数の人々の中の一人、ジョン・ハモンドの働きかけにより、ビル・ブルーンジーは、新たな聴衆の前に登場することになる。ジョンはビルを、ニューヨーク、スターリン・ブラウンへと連れ出し、カーネギーホールへ出演させることになるのだ。

「忘れられないね。」

アーヴィング・コロダンは、ビッグ・ビルの初めてのコンサートを思い出してこう言う。都会のジャズと田舎のブルースの関係がそこに示され、聴衆に強いインパクトを与えたのだ。ビッグ・ビル・ブルーンジー自身についても、偉大なカントリー・ブルース・シンガーとしての彼の地位は、1939年のカーネギーホールでのスピリチュアル・トゥ・スウィング以降、徐々に確立されたのだ。しかしまた、数ヶ月すると、リトルロックへ戻り、「差別を受けている」聴衆を相手に、新たな仕事を始めなければならなかった。レコーディングの機会さえあれば録音もしたのだが、その他の多くの時間は、生活のために働くのだ。型工場の職人、コック、ピアノ運送、ポーター、

「音楽だけで生活できるやつなんていなかったよ。昼は働いて、夜、演奏するんだ。」

とビルはアート・ホッデスに語っている(The Jazz Record 1946年3月)。また10年後にも、こう述べている(Oakland, Cal., Tribune, 1956年)。

「いろんな辛い仕事をしてきたよ。1953年になってようやく、音楽でメシが食えるようになったのさ。」

Big Bill And The Country Blues

当時、もっとも人気のあった黒人レコードのアーティストが、音楽では生活できなかったとはどういう事だろう。大きな買い物とは言っても、中古のキャディラックと新しいギター程度なのだ。この問いに対して、スタッズ・ターケルはこう答えている。

「30年代には彼のレコードがそれなりに成功したとしても、生活のためには仕事を探す必要があっただろう。ビルのようなアーティストは、ボランティアのような音楽活動で満足するしかなかったのだ。」

彼がもっとも成功した時代は貪欲なプロモーターばかりだった。どのブルース・シンガーも経験したことだが、若手のブルースシンガーの歩合は極端に少なく、ビルの自意識は傷つけられ、1950年代まで、彼の生活は楽観的なものではなかった。

やがてフーテナニーのような形式ばらないやり方で、フォークやニューエイジの音楽の面白さがアメリカ中に再認識され、やがて、フォークリバイバルに火をつけていく。そうした流れの中でビルは、新しい友人関係を広げていくことになった。ある夏の終わり、シカゴの「I Came For To Sing」のグループと共に、アイオワ州立大学を訪れ、そのまま管理人として滞在したことがある。社会派のファンの中には、こうした事実を知らずに、オーバーオールを着てモップを持ったギャグの写真に腹を立てたものもいた。でもビル自身はこの場所を気に入っていて、生活していたのだ。この仕事を与えたのは、教職団体であったが、休む間もなく働かなければならないような仕事だった。この頃に彼は、半ば忘れかけた自身の過去を題材として曲を作っている。大学の学長の家へはよく、客として招かれていたようで、教職団体の中でも有名な彼に会いにやってくる者がいたようだ。

カントリー・ブルースは、フォーク音楽の縦系、横系の上に描かれている。その織物は派手なパッチワークである事もあるし、シンプルなパターンである事もあり、そんな想像上のデザインの上に息づいている。ブルースという呼び方もそれほど古いものではない。ジャズとあまり変わらず、20世紀になって一般化したものだ。皆がそうではないだろうが、ブルースが古くから存在したと考えている南部の都市のシンガー達とは対照的に、ビッグビルのような地方のシンガーは、20世紀になるまで、こういった呼び方はしなかったと答えている。ブルースという呼び方は1890年代まではほとんどなかったと思われるが、その曲自体は、スピリチュアルと同じぐらいに昔から歌われているものだ。確証はないが、西アフリカのものに類似した歌詞の形式も見られる。ブルースは1890年代までに、ニグロフォーク音楽の集まりの中から生まれてきたのだ。このことは、ブレッシー対ファーガスン裁判で最高裁が隔離政策承認する際、ハーラン判事の主張を裏付ける少数派の意見でもあった。ブルースは単なる歌以上のものであり、人々の叫びそのものだと言える。後にブルースが商業として成長し、ドキュメンタリーとしての録音が行われなくなると、ブルース、ワークソング、シャント、ホラーなどの世俗の音楽の複雑な関係は、曖昧なものになってしまった。

神聖な音楽と罪深い音楽は両立しないものだと言われており、そして実際、片方しか歌わないものが多い。しかし、その音調やリズムには隔たりはなく、双方に共通の特徴を持

っている。(この事はブラインド・ウィリー・ジョンソンのスピリチュアルに見られる。) 両方を歌う事を知られているシンガーもいるが、2つを分けて考えている場合が多く、そこから我々は、シンガーや歌について知る事も多い。当然それぞれのミュージシャンには、自分自身を取り巻く環境がある。この話はビッグ・ビルがパートタイムの宣教師になるか、カントリー・フィドラーになるかを選択しなければならなかったというエピソードからも判ることだ。ブルースを愛するものには自分自身の宗教観があって、ブルースを選択したとしても、その事を幸福と感じられるのだ。ビルは都会で自分のカントリースタイルを完成させていったのだが、それはニグロフォーク音楽の本質的な成長以上に、音楽の基本的なところでの成長であった。

このような環境のなかで、カントリー・ブルースシンガー達は、ブルースに限定しない活動を行っていた。ブルース以外にも色々な歌を歌い、ダンスミュージックも演奏した。同じように、教会の音楽に参加する事もあった。兼業のエンターテナーと呼ばれたジェリー・ロール・モルトンのような巡礼シンガー／ピアニストの親類なのである。ブルース・シンガー達はブルースの分野に納まりきらなくなった時、最初は、メディスン・ショー、 minstrel、ボードヴィルなどから、スタイルや曲を取り入れていった。楽器そのものに関しては、初期のブルースやジャズの録音、ビルのディスコグラフィーを見ると、フォーク・ミュージックに用いられる、様々な楽器の名が見られる。ジャグとボーン、フィドルとバンジョー、ギターと洗濯板、ハーモニカと洗濯桶のベース、多くのブルース・ピアノ・プレイヤーは、バンジョー、ギター、フィドルのサウンドを取り入れて、ジューキン・ジョイント(ジューク・ボックスの古い呼び方)のスタイルをプレイした。音楽の影響の伝搬性というものも、考慮すべき事柄の一つだ。マー・レイニーが彼女のテント・ショーをブルースで締めくくっていた時代に、その頃はまだ若かった田舎のミュージシャンのビッグ・ビル・ブルーンジーは、フィドルと歌を演奏しており、2分されたピクニックで、ダンスのための音楽と歌を演奏していた。ピクニックは人種によって隔離されていたが、音楽は共通で、同じ粗末なステージで演奏されていたのだ。

後に我々が使うようになる、ブルースという言葉は、W.C.ハンディーが最初の曲を出版して以来、ポピュラー・ミュージック・シーンに巨大な影響を与える事になった。このように一般的な言葉として定着するようになるまでは、ブルースという言葉は、歌として、また歌を語る用語として使われてきた。19世紀には多くのブルースのメロディーが、通貨のように流通した。スロー・ドラッグはブルースから変化したダンスのスタイルで、ラグタイムの作曲家がよく取り上げた。スコット・ジョプリンは自身のフォークオペラ「トゥリー・モニシャ」にそれを取り入れている。ニューオーリンズでのブルースの発展は、スロー・ドラッグからストンプへの変化として捉える事が出来る。クーン・シャウトは、ニグロ・ウィークリーのフリーマンによると、シャウティン・ブルースのスタイルに近いものとされている。やがてクーンシャウト・スタイルは衰退して行ったが、ブルースのスタイルはシャウトする傾向になって行く。ビッグ・シティ・ブルースのジョー・ターナー

や、ジミー・ラッシングは、ボードヴィルからのインスピレーションを待つまでもなかったのである。

都市部でのブルースの発展では、色々な小節の長さの中から（拍子のないものも含め）12小節のスタイルがクラシックなものになっていった。しかしその根底には明らかに、4小節のフレーズを組み合わせるというアイデアが横たわっている。（ハンディの美しいメロディーよりも、ベッシー・スミスのセントルイス・ブルースの方がより基本的なスタイルとして聞える事に注意していただきたい。例えばそこには、テクニク、音色、理論の影響などが見られる。）ブルースから離れてみると、ビル・ブルーンジーのようなカントリー系の歌では、4小節のスタイルが広く用いられている。南部では広範囲に渡って、今世紀においては、色々な4小節のブルース・フレーズからなる歌が、リニング・トラック、カッティング・ケーン、チェインギャング・シャント、ロンリー・コールなどで用いられてきた。ホラーや古い英国のバラードにおいても、ブルースの影響が見られるが、互いが与えた影響の結果ははっきりとは見いだされない。古くからの歌い手達の記憶の中では、これらのスタイルが同時に存在し、今世紀において、かつてない豊かさを、フォークミュージックにもたらす事になった。

ビルが初めて演奏した楽器は、自作のバイオリンである。彼はマンドリンも演奏したようだ。しかし、ビルをギターと切り離して考える事は難しい。ギターは、コードを刻み、フレーズを繰り返して盛り上げ、スタッカート、ストップタイム、アクセント、悲しいメロディー、ストラミングでリズムにハーモニーをくわえ、音楽を盛り上げた。彼は古いブルースとの関係性を無視していた訳ではない。彼のギターは、第2声としてフレーズに返答を返す。そうして、彼は古いブルースに対して、より複雑なスタイルを発展させたのだ。彼はダンスのためのギターソロも演奏した。そこではフィドルであれ、ギターであれ、目的は共通である。テキストの中で彼は語っている。

「ダンスの伴奏で、演奏が長時間に渡る時は、歌うのは止めて、「踊れ！踊れ！」と声を掛けるんだ。そしてそれに合わせて、みんな一晩中踊っていたよ。歌とは違って、ギターの演奏はこんな事をするうちに弾きかたを憶えていった。こんな風にして、4、5種類のギターだけの演奏のスタイルを身につけたんだ。」

ブルースとニグロ・フォークソングが、ジャズに基本的な影響を与えた側面は、西洋音楽の慣習に対してのアフリカ音楽の調和として据えることが出来る。これはつまり、ジャズマンが音の響きに熱中していた事と関連があるだろう。スタッカート、リガートによるブルースに基づいたメロディックなフレージングについても同様に考えられる。このことは曲に歌詞を盛り込み、歌詞を耳障りを良くする事と、対をなすものである。こうしたいくつかのスタイルが、ジャズとブルースの強い関連を裏付ける。ニグロ・フォークソングの目に見えない資産は、新たな感覚、発見を生み出し、バンジョーには5弦目を加え、ブルースには多くの新しいメロディーをもたらした。

「若い連中はブルースが泣くって事を忘れてるね。まるで弁護士がしゃべっているみ

たいな歌い方だよ。」

ビッグ・ビルはこう語っている。この発言にはいささか誇張があるが、環境の変化に対しての音楽が果たした役割を示唆している点が面白い。もちろんそこには、フォーク的な要素とともに、莫大な量の純粋なリズム＆ブルース的要素があったのだ。ビッグ・ビルは、マディ・ウォーターズ、リトル・ウォーターといった商業的なニュアンスの強いミュージシャンの活躍に惑わされる事は無かった。実際、彼が初めてレコーディングしたブルースの歌詞では、典型的なカントリー・ブルースが、商業的な面で強調された形のものだった。サミュエル・カーターズの「カントリーブルース」(Rinehart)という書籍では、ビッグ・ビル・ブルースから、次のような引用がある。

” 神様、俺の髪は逆立ち、体はのた打ち回る。
昨日見た夢では、よそのラバが俺の馬小屋にもぐりこむ。”

「ビルは、もっとも活躍した時代の録音から、300以上の著作権を持つ事になった。」とサミュエルは語っている。

「しかし、それらの多くは、1920年代のレコーディングを元にしており、法的な訴訟が起ければ、トラブルになっただろう。だが、最も売れた、“Key To The High Way”, “Looking Up At Down”などの曲は、彼自身の作品だった。」

ただし、シンガーの間では、多くの取引が行われていた事は明らかで、著作権で制限されるような事はなかった。もっと古くからのフォークソングの場合、一般的に言って、著作権法の適用外となり、自由な音楽環境だったと言える。ブルースシンガー達は、このような自由な環境の中で、ブルースの歌詞、メロディーを自由に使用し、蓄えていった。例えば、ジャズ・ジラムは、初めてこの曲を録音したミュージシャンということで、ビッグ・ビルの”Key To The Hight Way”に間違ってクレジットされていた。実際にはこの曲は、ビッグ・ビル自身のものであったのだ。シャントにも似たメロディーを持ち、歌詞は、小作農にとって特に意味のあるものであった。それが我々にも伝わってくるのである。

「雰囲気伝わるように作るだけだよ。それだけさ。例えば、歩くって事で書き始める。すると、“俺はここを抜け出すのさ...”」

“ ハイウェイ行きのキーを手に入れた。
そうだ俺は進んでいくんだ。
俺はこの街を抜け出すんだ。
歩いてるんじゃ、遅すぎるぜ。”

ビルの詩は、時間の概念に乏しいが、人生の力強さを感じさせる。

Big Bill And The Country Blues

“「スキ引き男」が俺のあだ名。
もう 40 年もずっとそうさ。
毎晩俺は、うなされて目が覚める。
起きろ、起きろと声がする。”

“Black, Brown & White”という曲には、第 2 次大戦頃の型工場の職人の仕事の描写がある。また他のブルースの歌詞でも、特定の経験に関する事柄が出ている。ビルと友人のグループが、インディアナのラファイエットでビールを分け合っている描写がある。

“ある晩のこと
楽しそうにしている連中をみかけたが
ビールもワインも自分達ばかりで
俺には少しも売ってくれない。”

1950 年代にビルはアフリカを訪れている。そこでは先祖が共通だという以上の共感を感じた。例えば彼らは、ビルと同じように大人になるまで、“Boy”と大声で呼ばれていた。同じ“Boy”という言葉にも、長い人生においては多くの意味を持つのだろうが、その中から、Boy の 2 つの意味を好んでいた。ビルの母は、1957 年に 102 歳で死んだのだが、そこへ出掛けていく途中、ビルは中古のキャディラックでガソリンスタンドに立ち寄った。店の人間の対応は典型的なもので、

「坊主、これは誰の車だ？」

「俺んとこの旦那の車さ。」

また違う話では、スタッズ・ターケルがシカゴの街角でビルを待っていると、ある上院議員に出くわした。話しているところへビルがやって来て、ビルは紹介された。上院議員はスタッズに向かって、

「彼はあんたの所の坊主か？」

「いや…」

「そうです。」とビルが割って入った。

「そうは見えないかもしれませんが、父親なんです。」

上院議員はどう答えてよいかわからず、くすくす笑い、

「またな、坊主。」

と言って、立ち去ってしまった。スタッズは振り返って何か言おうとしたが、ビルが大笑いしているので、言葉が出なかった。1 ブロック先まで行ってしまった上院議員にも聞えそうな程大きな笑い声だった。上院議員も否定する資料を持っているわけでもないのだ。1928 年に書かれ、その後書き直された歌詞で次のようなものがある。

“生まれてこの方、
一人前の男として呼ばれた事がない。
もう 53 にもなるのに。”

ある意味では、ビッグ・ビル・ブルーンジーは、カントリー・ブルース・シンガーとして神格化された存在である。力強く生々しい音色、石像のような存在感のある歌、時には呻き、時には叫び、そしてさらに言い尽くせない何かがある。フォークスタイルの基盤の上に、アフリカの影響を与え、ざらざらした音の響きを自由に操る。彼の用いる音の震えは、ニグロの教会音楽のメリズマティックなスタイル（小節の中に音数が多い）とは、世俗的な対比を成している。彼が歌うときのリズムの緊張感は、ビートのコントロールが重要な役割を持っている。この事へのギターの貢献も大きい。実際のところ、演奏からは音数の少ないシンプルな印象を受けるが、複雑な伴奏はリズム＆ブルースに陳腐な音色を加えるだけであり、ブルースのフィーリング自体は十分なのである。同じように、ビルは、陽気なフーテナニーで演奏する事はなく、商業的な時代にあっても、エレクトリック・ギターを演奏することは無かった。フォーク、ジャズ両方のミュージシャンから共感され、熱狂的にサポートされたビルに、こういう機会があればリスナーは喜んでに違いないと想像するのみである。（ビルに共感し、サポートしたミュージシャンには、ランサム・ノーリング、ワッシュボード・サム、パンチ・ミラー、ブラック・ボブ、ジョシュア・オールシマー、アルバート・アモンズなどがいる）

長年、都会で暮らしたこの男が、カントリースタイルにこだわってきたのは何故だろう。でもこの質問のしかたは正しくない。ビルは自分自身であり続けたのであり、レコードやソング・ブックに残らなかったとしても、その偉大な才能で自分自身を歌ったのだ。ニグロ・ダイジェストに紹介されている、ブルーンジーのブルースへの動機は、忘れる事のない小作農時代の、鉄道、アーカンソーのレビーキャンプで働いた、深く、辛い思い出に基づいている。歌のスタイルは、彼自身の過去から来るものであり、子供の頃から死ぬまで続いた、カントリーシンガー達のお互いのつながりによるものだ。他の才能ある、フォーク・シンガーと同じように、あらゆる経験をレパトリーとして加えていった。しかし、彼を、蓄えてばかりの雑貨屋としてみるのは間違っている。むしろ彼は農民である。太古からの営みにしたがって大地を潤し、科学的ではない昔からのやり方で作物を育てる。彼がカントリー・シンガーだったのは、彼が田舎を離れる事が出来なかったからなのだ。この事はビル自身の言葉からも知る事が出来る。それは、ロングプレイのレコードのように、面白く、愛らしく、感動的で温かい、ヤニック・ブレイノフが編集したこの、「ビッグ・ビル・ブルース」という本の中に、である。

ブルースという音楽の一般への広がりや、順調に始まったわけではない。しかしながら、W.C.ハンディのコンサートはブルースに、尊厳や、新たな存在感を与え、ブルースを作る側においても、商業的なブルースの生産は、北部の都市へ移動してきたニグロ達にア

ピールするようになった。その意味で、商業的なブルースの始まりは、第 1 次世界大戦に続く時期に起こったといえる。仮に、貧困、無視、差別という悪夢が、北部の都市のスラムに不可欠なものとしても、フォークにおけるブルースでの人生の暗い側面が、商業的なブルースでは強調されすぎているきらいがある。しかし、荒々しく暴力的な人生の諸相が必要だった事は確かだ。(後に、ポピュラーミュージックに対しては、無害な感傷を与えたのだが。)1920 年代以降のよく出来た商業的なブルースでは、ニグロにおいての神話を作り出すに至ったわけだが、特定の例の中でその特徴を強調しただけで、新たなイメージを作り出したわけではない。偏見がごく普通に变化して、典型的に受け入れられたに過ぎない。

サミュエル・カーターは、「カントリー・ブルース」に書いている。

「レコード・コレクターが古いレコードをかける。サキソフォンの音、荒々しいピアノ、汚い歌詞からなるビルの曲を聴き、ビルの若いファン達はびくりにして黙り込んでしまう。この若い熱狂的なファンは、最期にはこう叫ぶ。”これはビッグビルじゃない。同じ名前のミュージシャンが 2 人いるに違いない。”」

この若いファンの言葉は、ある意味で真実である。

ミンストレル・ショー生まれのステレオタイプで風刺の弱い商業ブルースは、クーンソングと同じで、イメージを売る事は無かったのだが、ニグロの中には、クーンソング以上に、新しい大衆娯楽の大量の聴衆が生まれた。それは、商業ブルースが、クーンソングにある、社会的な人種問題への言及を避けて、好色でショッキングな内容のものへと発展していったからだ。でも、社会的な内容に挑戦しなかったわけではない。

低俗性とは何だろう。あるシンガーがある女の空っぽのベッドを面白おかしく歌ったとしても、このダビュークの年配の女は少し曖昧なままであろう。ティンパンアレーは、ここから、汚れた端部を切り落とし、空っぽのベッドの退屈さを削り落とすことで洗練した。しかしまた時代は変わったのだ。ビルとその仲間、商業ブルースの中で、これまで受け入れられなかった悪趣味や悪い歌詞と呼ばれていたものを、作り出し、確立し、生き生きとした現実の人間の、現実の生活の描写を生み出した。

シカゴの友人、アイオワでの滞在、ユーグ・パナシェが企画した 1951 年のヨーロッパツアー、こうしたすべてのものが、ビッグ・ビルに、もう一度、歌い続ける力をもたらした。2 回目のツアーでは、個人的な成功だけでなく、ブルースが世界で通用する音楽である事を確信した。しかし、外国のリスナーには、その歌の内容はどのように伝わったのだろう。

“泣く、泣くんだ、すべての言葉で。

叫ぶ、叫ぶんだ、すべての言葉で。”

1951 年、ギングスウェイでのビッグ・ビルの最初のコンサートの様子は、マックス・ジョーンズによって、58 年 8 月 23 日号のメロディ・メーカーで取り上げられた。

「聴衆は、ビルの広いレパートリーからの素晴らしい演奏、ギターマンシップの素晴らしい

さに聴き入った。聴衆はビルを、クリエイティブなアーティストとして、かつまた、生きた伝説として感じたであろう。私が思うに、アメリカ版のレコードの比べると、声のパワーは少し劣るようだったが、タフなブルースを歌うにはその力強さは充分だった。彼の演奏は柔軟性、独創性に溢れ、想像を超える表現の幅を持っていた。さらに特筆すべきは、その素晴らしくスウィングするギタープレイである。その演奏のテクニック、伴奏の豊かさ、声と楽器の素晴らしい調和、彼はイギリスのブルース、フォークソングの聴衆に、大きな影響を与えるだろう。」

メロディ・メーカーの同じ号には、ハンフリー・リトルトンという有名なジャズ・トラソペッター、バンドリーダーの書いた面白い記事が載っている。

「ビッグ・ビルと一緒に演奏する事は難しいだろう。彼がよくある 12 小説のブルースを歌うというなら話は別だ。1953 年に彼は、知り合いの学校を出たミュージシャンに笑われる事を気にしていた。私もその時、一緒にパリにいたんだ。書籍によるとそのときの議論は明らかだ。ソフィストケイトされた現代のブルースでは、彼のコードやメジャーは、間違いとも言えるものだった。」

「ビルをヨーロッパに呼んだのは私が最初だった。」

とヤニック・ブレイノフは書いている。ブレイノフは、ブリュッセルに住むジャズ・マガジンの編集者だった。

「1951 年の 6 月、パナシェが、フランスのホット・クラブでの演奏を企画したんだ。ビルはブリュッセルまでやってきてくれて、私は彼に会いに行った。もちろん私は彼の、素晴らしい人間性に恐れ入ってしまった。私が彼と本当に知り合えたのは、1953 年のことで、パリで会い、この本を書く事を勧めたんだ。彼も大いに乗ってきたよ。この出版に当たって、テープレコーダーは使わなかったと断言するよ。ビルはほとんどを自分で書いたんだ。もちろん私が手助けをして、付け加えたり、修正したり、削った部分もある。それから私はまず、それをフランス語に翻訳した。その時気にしたのは、彼のオリジナリティ、話し方、アクセントを伝えるように苦心した点かな。ニューヨーク・タイムズのレビューにもあるけど、結果としてとてもやりがいのある仕事だったよ。」

1950 年代になってビルの暮らし向きはよくなったと思うかもしれない。アフリカからアルゼンチン、アラバマよりもオーストラリアで、このシンガーは認められたわけだが、それでも生活にはあまり変化がなかった。仕事のない時期には、フルハウスの玄関番などの仕事もしなければならなかった。彼が最も楽しんだ仕事は、ミシガンのサマーキャンプでの、サークルパインの仕事だろう。彼は歌も歌ったが、キッチンの仕事もしていた。子供から家族まで楽しめるフォークキャンプで、ビルはそれをとて気に入りしていた。

ビルは偉大なブルース・シンガーとして、シカゴのサウスサイドの人々にも受け入れられていただろうか。若者達の反応はすでに見たとおりで、それは拒絶であった。彼はおそらく個人的には失望していたのだろうが、このように考えを語っている。

「彼らを責めたりはしないよ。洋服みたいなもんだよ。好みを押し付けるわけには行かな

いのさ。」

===

ビルがアーカンソーを離れて長い年月が経つ。この事だけで、彼のカントリー・ブルースシンガーとしての地位を疑問視する向きもあった。スタッズはこれに対して軽蔑的に意見を述べている。

「これをカントリー・ブルースと呼ばなかったら、南部からシカゴへやって来たすべてのニグロが、シルビオ、スミティ・コーナー、マーチン・コーナーなどのバーで聴いたビルの演奏がすべて間違いという事になる。私が話しているのは、南部というものを一緒に連れてきた年配の人々の話なんだ。そこにはめったに見られないような気さくな雰囲気、聞いたことのないような笑い声が溢れていた。ビルはその王様なんだ。」

「私が始めて聴いたブルースは、」

スタッズはビル・ブルーンジーへの賛辞(saga 1961 年 10 月)の記事を挙げた。

「1893 年の洪水についてのブルースだった。この曲は ” ジョー・ターナーの嘆き ” というタイトルで呼ばれていた。特別に機会があって、週末のバーでの演奏のように、彼が歌うのを聴いたんだ。彼はもう歌うチャンスは無いと思っていたようだ。続く月曜日には入院してしまったんだ。彼がギターをチューニングしている間、レコーディングスタジオのコントロールルームでは静まり返っていた。彼がギターを弾き始めたとき、かつて聞いたことのないサウンドだと感じた。それはまるで人間の声のようで、ぐらぐらと揺れる街のようだった。ビルは淡々と洪水について、家、穀物、すべてを失った人々について語った。ジョー・ターナーが現れると、彼は黒人と白人の 2 人の人間になったかのように感じた。彼は救いの手を差し伸べた。そして彼らは泣き、歌ったのだ。コードは間違っているが、本当に泣いているかのような演奏だった。」

“ ジョー・ターナーがやってきた

神様、ジョー・ターナーがやってきた

そしてまた何処かへ行ってしまった。 “

この曲は、人々をさらって行く悪人の保安官や役人として描かれる別のジョー・ターナーのブルースと著しい対比を成している。(この事はジェリー・シルバーマンの”The Art Of Fork Blues guitar”(Oak Publication)に詳しい。) 曲の繰り返しの部分はほぼ同じである。どのようにして南部の各地で異なる曲として発展したのかは、他のフォークソングについての多くの話と同様に謎のままである。

メロディは伝説の通り、奴隷の時代にさかのぼるのだろう。しかしこれは、黒人と白人の、なんと的確な擬人化だろう。ビルはこれを題材として、優れたブルースを作った。正直でアピールのある象徴化、細い道をラバで下っていく黒人、収穫を分け合える豊かな約束の地、希望と飢え。奴隷社会の悲しみとそれを助長する差別というものを、人間的に表

現した。

1958 年 6 月になって、ビルの病状は悪化した。その月に彼は、ビルのコンサートを企画していたデイヴ・スチーブンス、そして、ロニー・ドネガン、クリス・バーバーといったイギリスの友人に手紙を書いている。

「それぞれに手紙を書かなかった事を悪く思わないで欲しい。目が見えなくなってきていて、精神的にも調子がよくない。神経質になっているんだ。」

支援コンサートでは 500 ポンドの収入になる予定であったが、ビルがそのお金を奥さんのラス・ブルーンジーに遺産として残す前に、奥さんからビルの死を伝える電報が届いた。

ビルは 1958 年 8 月 14 日に死亡した。葬儀はシカゴ、メトロポリタン葬儀場の大きなチャペルで行われた。ビルの古くからの友人、メンフィス・スリムはツアー中で参加出来なかったが、シカゴにいた多くの友人が敬意を表して集まった。スタッズ・ターケルは後に、saga に、そのときの感想を次のように書いている。

マヘリア・ジャクソンは、"Just A Close Wak With Thee"を歌う間、おそらく彼女は、パリで入院した時に、ビッグ・ビルがふらりと訪ねてきて、彼女の手を握り、冗談を飛ばして帰っていった時の事を思い出していただろう。ブラザー・ジョン・セラーズは、"Nobody Knows The trouble I've Seen"を歌う間、ミシシッピのクラークデイルから北部に出てきたばかりの頃、ビッグ・ビルに面倒を見てもらった事を思い出したのだろうか？またその日、イリノイの南部で、自分の曲、ビルの曲を見知らぬ人々に歌っていたメンフィス・スリムは、どう感じていただろうか？

リンカーン共同墓地におろされた棺の上に、介添え人の白い手袋が落とされた。

「タンパレッド？彼は、エージェントやプロモーターに、ビルの友人達が、入れ替わり立ち代り、騙されてた事を思い出しただろう。」あいつらを見ろよ。点々と並んで。まずは注意して読むんだ。そして、John Henry と書け。字が小さいが、眼鏡はいるか？」

「サニーランド・スリム？ビルとは兄弟以上に仲が良かったよ。サニーランドは、下水道部のトラックで働いていて、機会があれば今も、ブルースを歌っているよ。」

「マディ・ウォータース？彼はリズム＆ブルースの素晴らしい歌声の中に、本物のブルースを保ってきたよ。彼の声や歌はビッグ・ビルのような先輩から受け継いだものだね。」

「リトル・ウォーター？この若い元気なハーモニカ・プレイヤーは、ルイジアナのアレクサンドリア出身で、まだ子供だった 1938 年に西部から危険なシカゴの街にやって来た。こいつを励まして、ブルースを教えてやったのは誰だか判るかい？」

「J.B.ルノワ？レッド・ネルスン？リトルブラザー・モンゴメリ？ジャスパー・テイラー？ギタリストもピアニストも、ビルに思い出を持つものは皆、シャベルを持って、棺に土をかけたのさ。」

===

その日、他の人々はどうだっただろうか。

「小さくて元気なリル・アームストロングも、チャペルに座っていた。ビルの双子の姉妹

Big Bill And The Country Blues

もリトルロックからやって来た。悲しみの中の優しい未亡人のローズ、少年たち、少女たち。白人も黒人も、晩年に彼を愛していた人々はみんな集まっていたよ。」

ビッグ・ビル・ブルース

著者：ヤニック・ブルイノフ

序文：チャールズ・エドワード・スミス、スタンリー・ダンス

挿絵：ポール・オリバー

この本は良くある口述の自伝とは違う。実際、このブルースに関する素晴らしい本は、ビッグ・ビル・ブルーンジーが、著名なジャズ評論家の、ブルイノフに宛てた手紙を元に編集して完成した。これはブルース文学の古典といえるだろう。(ポール・ガロン、作家)

彼はストーリーテラーではないが、痛々しい貧困や悲しみを、人生と音楽によって生き生きと描写している。ブルースを愛する人すべてにとって、またそれ以外の人々にも、一人の男とそのブルースを描いたこの本は、新鮮な経験を与えてくれるだろう。「ビッグ・ビル・ブルース」は、印象的、感動的なドキュメンタリーだ。(ニューヨーク・タイムズ)

編者のヤニック・ブルイノフが構成した、ビッグビルの語りと、ブルースの歌詞と一緒に読ませるというアイデアは大成功で、力強くのびのびした作品にまとまっている。ビッグビル自身が生活や歌についてのとびきりの逸話を、彼自身の言葉ではつらつと語ることで、リアルさが一段と高まっているのだ。(スタンリー・ダンス、ライター)

ビッグ・ビル・ブルーンジーの豊かな挿話を通じて、我々はカントリー・ブルースの誕生を知る事が出来る。「ビッグ・ビル・ブルース」は、今まで知られていなかった初期のブルースミュージシャンの視点と彼らの世界に迫る古典と言える。(ウィリアム・フェリス、大学教授)

=====

でももし、あんたが俺の事を書く機会があったら、ジャズミュージシャンだとは書かないで欲しい。ミュージシャンだとか、ギタリストだとか書かず、こう書いて欲しいんだ。ビッグ・ビル。1925 年から 1952 年までに 260 曲を録音した有名なブルースシンガー、プレイヤー。陽気な酒飲みで、いつも女と遊んでいた。多くのブルースシンガーに愛され、妬まれることもあったが、そんな時、ビルは、ウイスキーを一本買ってきて飲んで笑い、また演奏を続けた。ビルはいつも、パーティーの途中で酔っ払ってダメになり、家に帰って寝た。

ビッグ・ビル・ブルーンジー(1893~1958)は、1955 年に出版された自伝ビッグ・ビル・ブルースの中で、自分自身のことをこう書いている。このように謙遜しているが、ブルーンジーを、単に「有名なブルースプレイヤー、シンガー」と呼ぶだけでは足りない。彼は、

カントリーブルースの巨人の一人であるのだ。彼のボーカルスタイルは、すでに生前から伝説化していた。また、"Big Bill Blues","Key To the High Way", "Looking Up At Down"などを含む彼の作ったブルースナンバーは、ブルースの中でも有名な作品である。

「ビッグ・ビル・ブルース」は、最初でそして唯一の、ブルースミュージシャンによって書かれた書籍である。ブルーンジー自身のユニークな語り口で、30年に渡るブルース演奏活動が描かれている。また、彼と親しかったブルースの巨人達の挿話も含まれている。スリーピー・ジョン・エスティス、ロニー・ジョンソン、ソニー・ボーイ・ウィリアムスン、メンフィス・スリム、メンフィス・ミニー、ワッシュボード・サム等が登場する。そしてまた、彼が作曲したブルースのアイデア、経緯も紹介されている。会話と逸話、ユーモアの生気に溢れた「ビッグ・ビル・ブルース」というこの本は、ブルースの世界に迫る名作である。